蜘蛛と夢のあとさき

松元千春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蜘蛛と夢のあとさき

【Ｎコード】
Ｎ３４６１Ｏ

【作者名】
松元千春

【あらすじ】
大学生になり、祖母の住む村へと出かけた祐子。
久しぶりに訪れた村では、五十年に一度開かれるという復活際の準備がされていた。
それはうわさにしか聞いたことがなかった。
実際に開かれる。

必要なのは、ただ一つ。

美しく、素直な女の、心臓のみだ。

1　プロローグ

人は、夢を見る生き物だ。「夢」という一つの単語に対しての意味は、一般的に考えても最低でも二通りあるだろう。一つ目に、睡眠中に起こる仮想現実的な世界がある。あらゆることを考え妄想しつつも、それらは決して手が届く範囲には得られない。そのメカニズムは未だ発展途上の状態にあり、原因は分かってさえいない。人間が自分の想像をエネルギーとして自由に生きられる唯一の世界かもしれない。それを体験出来る夜の長い睡眠は、主に二種類に分けられる。周知のごとく、レム睡眠とノンレム睡眠である。

近年まで、夢を見る状態は眠りの浅いレム睡眠の場合のみとされ、深い睡眠状態にあるノンレム睡眠では夢を見ないと考えられていた。そのレム睡眠時に見る原因は、ＰＧＯ波といわれる脳波が海馬を刺激することによって起こると研究されてきた。しかし、今ではフラッシュバック性の悪夢はノンレム睡眠時によく起こるということが分かってきたのだ。つまり、脳波の発生していないとされているノンレム時にも、比較的夢を見るというのだ。

今のところその両者においても夢を見るという行為そのものは、無意味な情報を記憶から捨て去るためだというのと、忘れないために知覚作用を用いているのだという二通りに分かれている。

現在、寝ている時に見る夢は人間のみにとどまらないとされる。ほとんどの温血動物、つまり生命体が見ているというのだ。考えてみれば、こんなに面白い話もないだろう。犬や猫等の一番身近な動物は、普段自分たちに芸をさせる飼い主を、夢の中では笑っているのだろうか。野生に生きるライオンやチーターなどの肉食動物は、普段追いかけているしまうまやジャッカルに襲われる夢でも見て、慌てて目が覚めることなどあるのだろうか。それがノンレム時だとすればフラッシュバックになる。そんな経験があるのだろうか。魚や鳥、そんな小さな動物から鯨のような大きなほ乳類まで、みんなが

夢を見ているのだ。なんと興味深いことだろう。
深層心理学という分野においては、夢分析という不可思議なものまで存在する。脳で考えていたことが、脳波によって刺激を受けて夢となって無意識に現れたという原理に基づく占いである。ジークムント・フロイトという名の人物が夢分析の古典であるが、彼によれば夢の中の事物は具体的に何かを象徴するものであるということだ。現代人において、そのまま適用するのは無理があるという説が大半だが、夢の自己分析をするガイドブックなども販売されているのを書店で見かけることがある。人々の関心も、それなりにはあるということだろう。というよりも、人間誰しもが自分自身を深く理解できず、より分析し知りたいと思う所以だとも取れる。しかし、不幸なことはそのガイドを開くときには、昨夜見た夢を忘れているのが常であるというのも人間らしい。
そして、二つ目は人間が抱く「夢」だ。それは将来等、未来に向けて発信される。あまりにも大きく非現実的なものは、夜の夢と同じくらいに曖昧だ。しかし、異なる一番の理由は覚醒時にはっきりと意図するということだ。そして、見るのではなく、抱くものである。それが生きるという目標の上での夢だ。生まれてから何回も、節目を迎えるたびに目標は変わるだろう。それは叶う時もあり、諦めることもある。何を持って諦めるかは個人次第。どこまで求め続けるかも個人次第。しかし、夢とは欲望の固まりでもある。膨らめば膨らむほど人は自ら出した糸に足下をすくわれ、そこから抜け出せなくなる場合もある。どうしても目指した形にならなければいけないという強迫観念にかられ、自らを破滅に追い込む場合もある。だが、夢を持たないというのもつまらない。まっすぐに前を見ることは出来ても、上を向くことは出来ないだろう。下を向くことさえあることかもしれない。ちょうどいい範囲を見極め、その中で上手く目標を持ち続けるということが、人間の生きる目的なのかもしれない。その上下の範囲を決めるのは、自分だ。ただ、身の丈に合わない夢を持つことほど、不幸になることはないだろう。

2　再会

うだる暑さの中、鬱蒼と生い茂る森の中をバスも使わずにこの山に登ろうと思ったのは、やはり無謀な賭だったようだ。真夏の太陽が照りつける中、舗装もされていない山道をはき慣れていないシューズで一歩ずつ歩き続ける。やはり、母親の言う通り古い運動靴を履いてくれば良かったと今更ながらに後悔する。風がちっとも吹かないなんて。松田祐子は、額から流れる汗を持参したタオルで拭うと、一人ため息を吐いた。誰か助けてくれる人間がいないかと辺りを見回すも、期待できるものはない。木々に止まって鳴いている蝉と時々のっそりと顔を出す野生の小動物以外に気配もない。こんな夏真っ盛りの時期に、わざわざこんな田舎に来たのも訳があった。祐子の祖母がこの山の頂上付近にある村に住んでいるのだ。祖母に会うために楽しみだったこの山も、不必要に苦しい思いをして登っていると一瞬だけ恨めしくなる。肩にかけていた小ぶりの旅行鞄を地面に置くと、靴ずれで痛む右足のかかとを確認した。思った通り、そこは薄皮が向けて血が滲んでいる。鞄のポケットから絆創膏を一枚取り出して貼り付ける。森が陰となって直射日光は避けられているが、暑さが容赦なく彼女の身体にある水分を奪っていく。鞄をもう一度肩に戻すと、祐子は頬に流れる汗を手の甲で拭った。もう少しのはずだ。登ってきた山道を振り返ると、眼下には町が広がっている。その景色と自分が歩いてきた距離に満足すると、祐子は再び足を動かし始めた。

祐子は、この春に高校を卒業した。まだ懐かしみ帰りたい場所にはなっていないが、それでも三年間を楽しんだことには間違いない。勉強の合間には息抜きとして友達と遊び、大きな夢を持ちそれに向かって邁進した。初めて彼氏が出来て、うかれた夜もあった。日々の生活の忙しさを理由に、長年この山から遠ざかっていたのは間違いない。記憶にあるこの道は、もっと幅があった。目的地までこん

なに歩いた覚えもない。そんな昔の記憶は当てにならないことくらい分かっている。実際、ここは祐子がかつて夏休みを過ごしていた時と何一つ変わっていないはずだ。変わったように見えるのは、祐子が幼かった時の目線で記憶しているからだ。その上、この坂を一人で歩いたことはない。いつも車で移動していたのだから。しかし、その変化が二つの錯覚によるものだとは、この暑さの中で祐子は冷静に考えられなかった。ただ細い道の先を眺めては、辿ってきた道を間違えていないかと首を傾げた。

この三好山は、日本でも十本の指に入るほどの名山と言われている。少し奥に入れば泉がわき出ているし、滅多に見られない動物も生息しているらしい。祐子は、この両親の生まれ故郷であるこの山を、ばばの山と呼んでいた。ここに父方の祖母が住んでいるからだ。祐子のばばが所有しているわけでも、年寄りばかりの山だからではない。住んでいるからだ。母方の祖父母は街生まれであり、祐子の出産と同時に、両親は彼らの近所に家を購入した。その祖父母とは毎日でも会える距離だ。元はと言えば、母親が一人っ子なので両親の面倒を自分で看たいと言い始めての購入だったらしい。そんなことを言っても祖父母は健在であり、身体に異常など今のところ一つもない。高血圧だ、老眼だと騒いではいるが、それは小さな老いの印に過ぎないのだ。都会でいきいきと活動する二人は、今や旅行三昧の優雅な老後を送っている。二人の物怖じしない性格が幸いしたのだろう。祐子の両親も仲がいいほうだ。人並みの苦労はしてきたつもりだが、決して不幸ではない。だからこそ、甘い夢への第一歩を踏み出すことに成功したのだ。

祐子は先月、幼い頃から抱いていた念願の歌手デビューオーディションに合格することが出来た。幼稚園生の時から大勢の前で歌うことが好きだった祐子は、いつしか歌手になることが夢になっていた。小学生になった時には毎日のように夢について話し続け、両親は予定が合うとオーディションに連れて行ってくれた。それから十年近く経った今、やっと所属事務所も決まりかけている。先月一人で行

った都内の会場で、賞は逃したが審査員に来ていたレコード会社の人に声を掛けて貰えたのだ。初めは騙されているのかと思った。しかし、名刺をもらって会社に行き、具体的な話をすることでやっと真実味を帯びてきた。契約まであと一歩というところなのだ。祐子は、その幸せな記憶を思い出しながら汗を拭い、ふくろはぎを拳で叩いた。ボイストレーニングは毎日行っている。それこそ昼夜問わず、家でも声を出して鍛えている。しかし、マラソンは大の苦手で、足など折れてしまいそうなほどに細い。レコード会社の人にも、なぜこんなに細い体からあんなに大きな声量が出るのかと言われ得意な気分になった。それこそが祐子の最大の自慢なのだ。しかし、これはまだ一つの結果に過ぎない。それだけ練習に練習を重ねて努力してきた。学校のテスト勉強など無縁な存在だった。それがさほど大事なことだとはどうしても思えなかったのだ。反対に、オーディション前はほとんど寝ずに歌い続ける夜もあった。喉が千切れるかと思った。親が部屋まで止めに来たこともあった。それでも、祐子にとっては歌うということはそれ以上に大切なことだったのだ。生きている中で記憶にある限り、歌がない時などなかった。歌える場所がないなら、この力が生かせないのならば、声が出ない方がマシだとさえ今では思う。そんな苦労を乗り越えて辿り着いたのが、今回の契約だ。自分のやってきたことは間違ってはいなかった。それが認められた気がして、友達にも自慢して回った。一通り友達に連絡をして回って、初めて気づいたのだ。三好のばばに、自分の成功の第一歩を報告していないということを。

一緒に過ごせない日常を埋めるように、祐子は小学校の夏休みは必ずこの三好に来てばばと過ごした。毎年の四十日近くを全て足してみればかなりの時間だが、過ぎてしまえばあっけない。きっかけがないと、思い出すという小さな動作さえ忘れてしまう。ただ、祐子にとってはそれが虚しいことだと、まだ思えなかった。ばばの顔を思い出した時は過去の光景が一気に蘇る。そして堪らなく会いたくなるのだ。

ばばは、昔から祐子の歌を褒めてくれた。母親は、履歴書も一緒に作ってくれたしオーディションには連れて行ってくれたが、本気で応援している気配はなかった。いつか限界を感じて諦めるのを待っているという目、それが分かっていたからこそ見返してみたかった。両親は、ただの子供の我が儘程度に思っていたのかもしれない。それは決して間違った意見ではないのだろう。その夢が叶う確率が低いからこそ夢中になる。その難しさと挫折を経験しているからこそ大人は反対し冷めた目をする。彼らが大人である故、至極まっとうな意見なのである。だからこそ、いざ高校の進路相談で祐子が歌手になりたいと担任に告げた時、母親が隣で青くなっていたのは明らかで、怒りが湧くよりも笑ってしまった。

その点、ばばは違った。一緒にお風呂に入りながら歌を歌った。長湯をしてのぼせることもあったけれど、それでもいつも真剣に聞いてくれた。数年会わないだけで、その顔は写真の中での映像だけになってしまう。確認しないと輪郭でさえぼやけてしまうのだ。それを後悔する時間も余裕もこれまではなかった。そして思い出した今だからこそ、祐子は遙々やって来たのだ。事務所との契約までに一ヶ月はかかるらしい。祐子はそれまでこの山でゆっくりとするつもりだ。一度契約をすれば、その後には怒濤のスケジュールが組まれるのが分かっているのだから。

すでに疲れ切った重い足を、祐子は賢明に前に押し出した。まるで運動をしない身体は、明日には悲鳴を上げることが確実だろう。最近雨が降っていないせいで、歩くと地面には砂が舞う。身体にまとわりつく湿気と乾燥する喉の奥は、さらに余計に体力を奪う。それなりの量の服を持ってきたのが祟ったに違いない。だるい足に加えて荷物が負担になって仕方ない。ジャンプをするように身体を揺すり、荷物を肩までずり上げる。帰るときは絶対にバスに乗ることを心の中で誓いながら、祐子がため息を吐いたときだった。背後から、車のエンジン音が聞こえてきたのだ。振り返ると、土埃を巻き上げながら白い軽トラックが坂道を上がってくる。運転席にいる男

性の顔を見ると、祐子は両手を振り森の中に響くほどの大声で叫んだ。
「おっちゃーん！」
昼間のこの時間に出来る影は、思わぬほど小さい。その小さな分身も、祐子と一緒にその人物の登場を喜ぶかに地面を動く。車道を塞ぐように祐子が立つと、近づいてくる車はゆっくりとブレーキを踏んでいるのが分かった。クラクションを鳴らすこともなく動きを止めた。と思ったが、最後の瞬間に怒りを吐き出すように、お尻のマフラーから大量の黒煙を吐き出す。相変わらずな車だ。
「おっちゃん！　久しぶり」
祐子は車に出会えたことで気分が高揚し、軽快に運転席へと駆け寄った。そこに座っているゴマ塩頭の男は、困ったように首を傾げてからウィンドウを下げた。車内からは想像以上の冷風が漏れてきて、歩き疲れた祐子には癒されること、この上ない。
「あー、涼しい」
窓のサンに両肘をつき、車体脇に付いているミラーを見ながら汗で乱れた前髪を整える。額の中央に出来ている少しだけ大きめのニキビが、最近の祐子の一番の悩みだ。そんな年頃で仕方がないとはいえ、気になってしまう。そのニキビは、顔から出る汗のせいで今も存在を主張するように膨らみ続けている。これではテレビに出られない。その思いがすぐに口から出る。
「はぁ、これ早く直らないかな。ねぇ、私、綺麗になったでしょ」
運転席で顔をしかめていた男の表情が一変した。祐子の次の言葉は、昔は夏になるとこの男に向けられていたものだった。
「お前……。もしかして、松田んとこの祐子か？」
男は、冷房の中にいるくせに、顔中に汗を掻いている。それが、つい先程まで畑仕事をしていたせいだと、トラックの後ろに積まれた野菜が物語っている。そこに山積みになっているきゅうりを見ると、祐子は水で冷やしてすぐにでもかぶりつきたくなった。スーパーに並んでいるそれとは違い、口の中に広がる繊細な甘みがあって

旨いのだ。
「なによ、おっちゃん。祐子の顔を忘れちゃったの？」
祐子は、きゅうりの他に何が積まれているのかと物色しながら答える。しかし、男は急
に興奮したような声音で一声叫ぶと、祐子の顔をよく見ようと運転
席から身を乗り出した。
それだけでは飽き足りず、土が詰まった爪のある両手で、祐子の顔
をべたべた触ろうとす
る。いくら田舎が懐かしいとはいえ、顔を汚されては堪らない。ぷ
ん、と鼻を掠める土の
匂いから、祐子は身体を引いて逃げた。車の陰から出ると、すぐに
さっきまで戦っていた
太陽の光が顔を攻撃してくる。瞬間、目を瞑った祐子を見て、おっ
ちゃんは再び嬉しそう
に言った。そして、首に巻いている手ぬぐいで、男は自分の頬に流
れる汗をぐいっと拭う。
「逃げるなよ。久しぶりじゃないか。お前、ずっと忙しかったんだ
ってなぁ？　もう、姿
を見せないと思ったら、いきなりこんなべっぴんになって現れたら
驚くじゃないか。うち
のなんてまるでダメだ。まぁ、最近は楽しそうだけどな」
男は、それでもめげずに身体を引く祐子に手を伸ばし、唾を飛ばし
ながら勢いよく話し
続ける。この暑さの中、男の声は聞いているうちに鬱陶しくなる。
確実に他人に話をすることで、パワーを吸い取っているようだ。そ
う、人並み異常に元気すぎるのだ。子供の時はよく遊んで貰ったが、
同じように付き合うと体力を消耗するとばばも昔は言っていた。当
時には分からなかったそれも今では納得出来た。この男にそっくり
な娘の顔を、祐子は思い出す。
「おっちゃん。それよりも早く車に乗せてよ。もう暑くて溶けちゃ

いそう」
祐子は鞄を両腕で抱えると、急いで助手席に回り込みドアを開けた。そこには昼ご飯として食べたであろう弁当箱と水筒が置いてあったが、当たり前のように足下へ落とした。男はそれを見て怒ることなく、自分の手拭いで祐子の汗まで拭こうとする。
「いやっ、大丈夫だってば。はい、出発―」
祐子がそれをあっさりと避けて右手の人差し指を前方に向けて突き出すと、男は慌てたようにアクセルを踏んだ。情景反射だ。こんな単純なところも、祐子達子供にとっては馴染みやすいおっちゃんだった。
「お前が今日来ることは、ばーちゃんも知っているんだろうな?」
祐子は、冷房が入った車内を無視するように窓を開けた。ひんやりと気持ちよく感じた冷風も、直接肌に当たるとすぐに鳥肌が立つ。ここまで登ってきて汗を掻いているからこそ、余計に肌寒くなる。しかし、そんなことをおっちゃんには理解できないようだ。
「あ、おい。暑くなるじゃねぇか」
すぐに隣から文句が飛んでくるが、あっさりと冷房を止めてくれた。そんなところも心地が良い。祐子は、自分の膝に乗せていた鞄を足下に落とすと、窓から身を乗り出した。さっき祐子が落としたおっちゃんの水筒も、山道で車が揺れる度に床で暴れている。窓から出した顔に、歩いている時とは明らかに違う風が右頬を打つ。乱れる髪の毛を、右手で押さえて前方を見た。ここまで来るのに、徒歩だとどれくらいかかったことだろう。こんもりとした森を抜けると、そこに広がっていたのはさらに懐かしい風景だった。そう、帰ってきたのだ。目の前には、数軒の家々が立ち並ぶ村が現れた。車が再びぶるんっと一回唸り声を上げて停止する。この車は祐子がここへ来ていた当時にも乗っていたものだ。あのころから相当年期の入った車だったが、今度ばかりは感謝しかない。

「おっちゃん、ありがとう」
と言うなり早く、帰郷したという沸き上がる興奮を抑えきれず、祐子は助手席を飛び出した。鞄を肩にかけると、先程まで肩に食い込んでいたのが嘘のように軽く感じる。村の些細な思い出の場所を巡りたくて、足の先がウズウズとしてくる。少しだけ楽をした分、体が元気になったようだ。なによりもばばの姿を早く見たかった。
「ほらよ！」
おっちゃんの声に祐子が振り返ると、トラックの荷台に移動した彼が、祐子に向かってきゅうりを投げた。
「おっと」
それを反射的に素手で掴むと、きゅうりの表面にあるトゲが掌を刺激する。小さな痛み
一つも嬉しくて、新鮮な匂いを吸い込むようにきゅうりを鼻に近づけた。
「お前の大好物だろう。洗わなくても食えるぞ」
おっちゃんは、そう言いながら自分の口にも先端のへたを取ることなく放り込んだ。あ
れは痛いはずだ。きゅうりは、まな板の上に塩を振ってゴリゴリと擦り合わせて食べるの
が一番なのだ。トゲが無くなるのと同時に、いい塩梅になる。そう考えてから、祐子はそ
れが都会になじんでしまった自分だけなのかと思い、ふと寂しくなる。だが、そうではな
いことを、次に聞こえた声が肯定してくれた。
「あ、お父さん。そんな風に食べるのはやめなさいって、何回言ったら分かるのよ」
停めた車の陰から現れたのは、祐子にも見覚えのある顔だった。そう、この顔だ。この男をお父さんと呼ぶ時点で、それは一人しかいない。
「あれ？　もしかして……」

現れた少女は、祐子と同じくらいの年齢だった。父親に声を掛けた後、祐子を見て目を見張った。日焼けした黒い肌も、おおきな黒い瞳も、昔と何も変わっていない。祐子よりも高かった身長は、もうほとんど違わなかった。

「夏美でしょ。あたし、分かる？」

「あれ？　祐子！　ばーちゃんの所の祐子でしょ！」

オーディションのためにと、プールや海も我慢して真っ白に作り上げられた祐子の肌とは対照的な色の両手で、彼女は祐子の肩を掴んだ。久しぶりに会っても、彼女は変わらずに笑顔で迎えてくれた。そして、祐子が頷くのを確認するより早く飛びついてきた。感情が高ぶると、彼女はこうして祐子をよく抱きしめた。こうして全身で触れ合う友達は、都会にはいない。祐子も、ここぞとばかりに抱きしめ返す。隣ではぼりぼりと野菜の砕かれる音がしたが、敢えて気にすることはない。身体を離すと、夏美は祐子の顔を覗き込んだ。かれこれ六年振りになるだろうか。

「なに、祐子。すっかり可愛くなったね！　この時期だもん。祭に遊びに来たの？」

目の下にあるそばかすが目立つが、それが彼女のチャームポイントに見えた。太陽の光をまっすぐに受けて、真っ黒の髪が輝いている。この田舎では、祐子のような細い手足や白い肌に魅力はない気がした。

「あのね、ばーちゃんに会いに来たんだ。しばらく会ってないからさ。お祭りに重なったなんて偶然。知らなかったよ。ラッキー」

祐子は、肩に掛かっていた鞄をかけ直す。どこかの家で飼われているのであろう犬が、弱りかけた声で鳴いている。暑さに悲鳴をあげているのだろうか。それでも、山の麓にいたときよりも湿気を感じないのは気のせいだろうか。

「なんだ。知らなかったのか。でも、楽しみにしていてね。もう村中が騒いでいるんだから。結構神楽も出来ているんだよ」

言う側から、なにやら太鼓の音が聞こえてくる。ね？　という顔

で少女が笑った。
「楽しみだよ。夏美、一緒に祭りに行こうね」
「もちろんだよ。あ、もう一人一緒でもいいかな。あとで会わせるね」
「友達？　いいよ。そうだ。ばーちゃんは家にいるかな」
祐子は待ちきれないようにそう言うと、家のある方へと顔を向ける。なんとも気の利かないおっちゃんが車を停めたのは、夏美の自宅前である。気前よく祐子の家の前まで連れて行ってくれればよいのだが、そこがやはりこの男だ。その気が回らない分を、この娘がフォローしているといっても過言ではない。
真っ黒に日焼けをした夏美は、祐子が遊びに来るといつも歓迎してくれてとても仲が良かった。同い年ということも幸いしたが、なによりも肝が据わっているのだ。森の中を冒険するのも、悩みを相談するにも頼りになる。それは、彼女の家庭の事情にもよるものだったが、祐子がそのことについて夏美と話したことはない。というのも、この少女、岩井夏美の母親は、彼女が幼い頃に病死しているのだ。そのため、夏美は成長すると共に、父親の世話を焼くようになり、必然的に周りにまで気を配れるようになったらしい。それ以前は、祐子のばばが幼い夏美の面倒を見たそうで、ここに来ると姉妹のように扱われることもある。
「いると思うよ。さっき裏の畑にいたからね。でも、こんな綺麗になった祐子見たら、ばーちゃんも驚くよ」
やはり親子だ。おっちゃんと同じ事を言った夏美は、祐子の全身を上から下まで舐めるように眺めると、何度も繰り返し頷いた。そして、祐子の肩にあった鞄を半ば強引に受け取ると、
「荷物はこれだけ？」
と付け足す。その男前の仕草に、祐子はどこか気恥ずかしくなる。夏美にはいつも守られてばかりだ。
「ありがとう。今度、歌手デビューが決まりそうなの。だから、ばーちゃんに報告に来たのよ」

驚いた顔をする夏美の横で、祐子は貰ったきゅうりを一口かじる。意外とこのままでもいけるかもしれない。そう思い、勢いよく口の中に詰め込んだ。野菜の甘さと匂いが、心を落ち着かせてくれる。口をもごもごと動かしながら、精一杯息を吸い込んだ。身体が自然に触れて喜んでいるのが分かる。三好山にあるこの村は、過疎化を代表するほどで現在は百人ほどしか住んでいない。寂れてきているのも見て取れるが、子供の時からこれくらいだった気もする。

夏美の家は、山道を上がってきてすぐの所にあり、農家を営んでいる。これといって特殊な土産や工芸があるわけでもなく、特産物があるわけでもない。それが災いして、若者はどんどん都会へと離れていった。祐子の父親もそうだ。農業に就こうとはしなかった。今こうして歩いていても、建っている家の三件に一件は、雨戸が閉まり庭も荒れている。つまり、人が住んでいないのだ。

「ねえ、この家も誰も住んでいないの？」

祐子は、なんとなく気になったので聞いてみただけなのだが、夏美の感情には響いたようだ。足を止めて振りかえると、虚しそうな表情をしたあと頷いた。

「そうだよ。みんなこの村から出ていっちゃったんだ。仕事も少ないし仕方ないよね」

俯きながら声のトーンを落とす彼女に、この村を出る気は無いのかと問いかけたくなる。どうしてここにいるのだ。他の世界を知らないからこそ、ここにいるしかない気がするだけだ、と。その言葉が口から飛び出そうとした時、夏美は顔を上げた。それは、無駄な質問が吹き飛ぶほどの笑顔だった。人にはそれぞれ居場所がある。彼女はそれを分かっているのだ。しかし、それが本心かどうかは分からない。彼女はこんな風に少し無理をするところも変わらないのだ。再びゆっくりと歩き始める。夏美は、祐子のその心の疑問に答えるように言った。

「でも、ここ数日はお祭りで帰ってくる人も多いみたいだからすごく楽しみだな。にぎやかになるよ。この家も、ほら、あっちの家も

ね。売っているわけじゃないみたい。たまに戻ってくるのよ。別荘みたいなものよね。この村も捨てたものじゃないのよ」

村の中は、道には都会のようなゴミがない代わりに雑草だらけである。それを手入れするにも、年寄りばかりで手が回らない。その中で、この夏美は何を思って暮らしているのだろうか。若い時間を無駄にしているとは思わないのか。眩しい太陽の光に目を細めながら、祐子は彼女の後ろ姿を眺めた。都会に行けば、オシャレも出来る。可愛い服も、綺麗な美容院もある。友達と意味もなくぶらぶらと町中を歩き回り、疲れたらカフェで休憩しておしゃべりをする。そんな些細な休日を、夏美は経験したことなどあるのだろうか。幼少時代に遊んだとはいえ、その倍以上の時間を二人は離れて暮らしていたのだ。祖母は家族だ。だが、夏美は違う。再会した瞬間は感情が高ぶった。それでも、少し冷静になれば何を話せばいいかさえ考えてしまう。夏美は、都会に住む自分のことをどう思っているのだ。妬ましいだろうか。道の脇に生えている雑草を見ながらそんなことを考え歩いていると、夏美の声が耳に入る。

「祐子。ほら、着いたよ」

「え？」

その声で顔を上げると、懐かしい家が記憶通りに建っていた。祐子のばばの家。三好のばばの家。それは、今も昔も圧倒的広さがあった。他の空き家とは違い、手入れのされた玄関付近。右にも左にも、カットされて整った松が、門の上をアーチのように飾っている。そこを通ると、玄関までの道の両脇には菜園が並ぶ。おっちゃんが持っていたような、きゅうりや真っ赤なトマト。紫に輝くちょっと曲がったナスや、大きさがバラバラのピーマン。ここにいるだけで、新鮮な物がお腹いっぱい食べられる。近くにいると分からない。遠くに行けば忘れてしまう。しかし、再びそこへ帰った時には、そこの有り難さも懐かしさも思い出せる。そんな小さなことに満足して、菜園を突っ切った祐子が玄関のドアに手を伸ばした時だった。

「祐子か？」

その声に胸がきゅっと痛む。知らずに涙がこみ上げてきた。声のした方を振りかえると、そこには家の記憶とは違い、様変わりした祖母が立っていた。短くカットされた髪の毛は白くなり、腰が随分曲がっている。

「ばあちゃん」

夏美は祐子の鞄を持っているにも関わらず、祖母の手の中にある野菜まで受け取ろうとする。ばばは、振り返った祐子に一瞬驚いた顔をするも、久しぶりだなぁ、と言って笑った。ほとんど入れ歯になってしまったばばが笑う。しも膨れの頬が、丸顔のそれに重なって可愛らしい。口の中に何も入っていないのに、リスのような頬袋を作るのだ。うっかりその頬を手のひらで包みたくなってしまう。ばばは、慣れた手つきで夏美に野菜を渡していく。それを当たり前のように受け取る彼女を見ていると、祐子はどっちが本物の孫だか分からなくなってしまった。かといって、ここで自分が受け取ろうとすることも出来なかった。

「なんだい、この子は。朝、お前のお母さんから急に電話が来たと思ったら、いくら待っても来やしない。来たと思ったら、随分病気みたいな身体してからに」

昔から、この祖母は祐子が痩せていることをこうして嫌がった。おかげで夏はたっぷりとご飯を食べされられ、二学期の入学式を迎える頃には体重はぐんと増えていた。次の年に来ると、また同じことを繰り返す。それは今も変わらないようだ。三好のばばは、好き勝手なことを羅列すると、祐子の脇を通り過ぎて玄関の戸を開ける。ここら辺では、未だに玄関の鍵など締めることはない。夜でさえ網戸を全開にして寝てしまうのだから強者だ。そのばばの後を、夏美、続いて祐子が追った。年がいっている割に歩くスピードは衰えていなかった。玄関に入ると益々懐かしさが蘇り、それと共にお線香の香りが祐子の鼻をくすぐる。押入にしまっておいた物に付くような匂いが、堪らなく安心する。

「ばーちゃん家の匂いだ」

祐子は押入から物を出した時に、いつもこのセリフを使う。だが、今はその家にいるのだ。無性に床に転がりたくなる。廊下を、畳の上を。ゴロゴロと家中を転がって、家に染みついた匂いを自分に移すかのようになじませたい。そうすれば、いなかった時間も取り戻し、すぐにとけ込める気がした。

「祐子。早くおいでよー」

廊下のすぐ左側の部屋に先に入った夏美が、玄関先で鼻をひくつかせている祐子を呼ん

だ。誰かが北海道土産にくれたという、鮭をくわえた姿の木彫りのクマを撫でていた手を

そっとどける。山道を登ってきたことで、靴を脱ぐと足首にまで砂が付いている。両足の

裏を素手で叩くと、靴の上にパラパラと埃のように砂が舞った。風呂場に行って水で洗い

たかったが、見た目が汚れているわけではないのでごまかすことにした。足の裏を交互に

ふくろはぎにこすりつけると、さらに綺麗になった気がした。

「待ってぇ」

夏美の入ったその部屋に行くと、さらに強烈な線香の香りがした。

八畳の和室が、二部

屋続いている。その間はふすまで区切れるようになっているが、普段は開いたままだ。田舎の家ならではの広さだ。ここでは昔、お盆になると近所の人も集まって長いテーブルを並べて食事をした。普段の日は、入ってすぐ手前に仏壇があり、奥では布団を敷いて寝る。都会ならここだけで生活出来そうなスペースだ。仏壇の前には、今もお盆が近いからと様々なフルーツに加え、缶詰やお菓子がぎっしり置かれている。それだけでも一杯なのに、夏美とばばはそこへ野菜まで並べようとしている。それに文句を言うことなく仏壇の前に正座をした祐子は、そのまま手を合わせて目を瞑った。この仏壇にいるのは、祐子があったこともない先祖ばかりだ。それでも、写真

を見ては幼少時代に手を合わせていたので、なぜか知っているような気がする。
「祐子もお線香をあげな」
祐子が目を開けると、ばばがマッチを勢いよく擦ったところだった。ジュッと嫌な音を立てた後、小さな炎が棒の先端で揺れている。その火をろうそくに移すのを眺めながら、祐子は上半身だけ後ろに引いた。祐子は、火が怖いのだ。学校で理科実験が出来るようになった頃は、今と違って争うようにしてマッチに火を付けては消していた。家でタバコを吸う人間もいなかったのでライターもなく、料理のガスコンロは触らせてもらえなかった。火、というものが新鮮だったのだ。
しかし、ある日のことだった。実験中、奪い合うようにしてマッチ箱を獲得した女の子は、勝ち誇った顔でそれに火を付けた。普段よりも乾燥していたのか、その火は大きくなった。実験に利用していた器具のところまで間に合わず、その火は彼女の指に燃え移ったのだ。たったそれだけだ。火事になったわけでも、彼女が火傷したわけでもない。一瞬、指が燃えるように見え、彼女が驚いてマッチ棒をテーブルに放ったに過ぎない。それでも、それ以来祐子がマッチを擦ることはなかった。何も考えずに遊んでいるときはよかった。しかし、最悪の事態が起こりうることを脳裏に刻み込んでしまったのだ。もしも、この仏壇の前でマッチが上手く擦れなかったら。いつもより乾燥して火が大きくなり、祐子の手に燃え移ったら。それに驚いて、慌てて床に落としてしまったら……。全てが仮定に過ぎない。だが、そのまさかで大惨事は起こりうるのだ。すべての事件がそうして起こっていると言っても間違いではない。結局、それならば触らなければいいという結論に辿り着いた。母親は、それまでマッチに火を付ける祐子に文句を言っていたが、いざ火を付けるのを怖がるようになると、それはそれで小言をいう。これくらい出来なくてどうするのだ、と。勝手である。しかし、それでもいいのだ。
祐子は、ばばが火を消したのを確かめると、紫色の線香を手に取

り火を付けた。線香を立てると、簡単に手を合わせる。今度は目を瞑らず、視線は目の前の果物に注ぐ。おいしそうな桃を見ると、口の中に唾液が広がる。甘いあの汁を想像するだけで、我慢できなくなる。祐子はさっと立ち上がると、勢いよく台所へと走った。

「あ、祐子！」

ばばの声が背中から追いかけてくる。

「祐子」

今度は、足音とともに夏美が来たようだ。祐子は台所に来ると、流しに置かれている目標物を発見して掴んだ。桃だ。洗うこともせずに、勢いよく歯を立てる。想像通りの熟れた匂いが、鼻をくすぐる。それを逃がさないように、口の中に桃を詰め込むと深呼吸した。桃の中に住んでいるような気分になれるほど、それは体中を優しく包み込んだ。

「あはは。あんた、変わらないねぇ。いつもそうやって果物を食べていた」

夏美は、笑いながら近づいてくると、同じように桃を手に取り頬張った。人の家の物であろうと、最低限なら気にしない。持ちつ持たれつの世界が、ここは生きている。夏美は、普段からばばを気にしてくれているし、尚更だ。

「ばばは？」

口の端から零れる汁を、手の甲で拭いながら祐子が聞いた。

「ああ。きっとこれから庭の花をいじると思うよ。行く？」

「いい」

祐子は、それを行動で示すとでもいうように椅子を引いて座った。この台所は、大きなテーブルに加えて椅子が六個も並んでいる。食器棚も二つ並んでいるし、冷蔵庫だって大きめだ。食器棚に入っている食器の数の少なさと、使われていない椅子がやけに寂しげだった。夏美が、祐子の隣の椅子に座ると言った。

「祐子、いつまでいられるの？　さっき言っていたじゃない。デビューなんてすごいね。この村の縁者でまさか有名人が出るなんてね」
祐子は桃の芯を流しに放り投げると、汚れた手をテーブルの上にある布巾にこすりつけた。それでもべとべと感は拭えず、数秒苦笑いで両手を眺めた後、祐子は席を立った。
「ん、それはまだ決めていないんだけど。最低でも一週間か十日はいようかなって」
限界までしゃぶりつくすと、夏美もそれをゴミ箱に入れた。綺麗に洗われた手を確認した祐子が、水道の蛇口を止めた時だった。
「ダメじゃよ」
静かに、しかし確実にその一言が台所に響く。それを発したのは、二人のうちのどちらでもなかった。夏美と祐子が振り返ると、台所の入り口にばばが立っていた。その隣には背の低い男もいる。夏美の父親ではないその男に祐子は見覚えがなかったが、夏美は違った。
「前田さん」
夏美は流しの脇で男の名前を呼ぶと、文字通りばばの側へすっ飛んでいった。男は祐子にも会釈をしたが、祐子はそれより、ばばの言っている意味が分からなかった。ばばは大分曲がった背中をさらに丸め、土で汚れた両手を胸の前で握っている。
「ばーちゃん？」
男に軽く会釈を返すと、もう一度聞く。そうではないか。久しぶりに孫が会いに来たのだ。普通ならば、どれほど居ようとも構わないと思うのではないか。それも、新たな一歩を踏み出そうとしているときだ。応援してくれると思っていた。デビューをするその前にゆっくりしなさい、そう言われるはずだったのだ。
「え？　どうして？」
せっかく来たのを拒否されたという心の動揺を隠して、平静を装いながら祐子は聞いた。
「そうだね。最近、ばーちゃんは人がいると眠れないんだよ。お前達の家族もいないし、一人に慣れたんだ。いや、耐えなくちゃいけ

なかった。そうしたら、今度はどうだ。人がいると眠れないんだよ」
「そんな……ばーちゃん」
助けるように夏美を見ると、彼女も不思議そうに顔をしかめている。男は、反対に驚いた顔でばばを見ている。ばばがこんなことを言うのは初めてだ。追い返すつもりなのだろうか。
「嫌だよ。あたし、帰らないから」
次の桃に伸ばしていた手を引っ込めると、祐子は怒ったような顔で言った。しかし、ばばに戦う気はないらしい。膨れ面をする祐子の脇をすっと通ると、蛇口を捻って手を洗う。その後ろ姿を、祐子と夏美が見つめた。水の音だけが部屋に響く。前田は所在なげに部屋の隅に立ったままだ。背の高い夏美に隠れるようにして、ばばを見ているようだ。そんな三人の視線を受け、ばばは口を開いた。だがそれは祐子を納得させるものではなかった。
「勝手にしい。ただ祭りが近いんだ。何があっても、ばーちゃんは知らないからな」
そのばばの言葉のあと、夏美が溜め息を吐いていった。その顔は困ったように笑っている。
「なんだ、ばあちゃん……。まだそんなことを言っているの？　大丈夫だよ、祐子。あんたも知っているでしょ。今年は五十の年なんだって」
夏美は肩を竦めたが、祐子にはどうも心当たりがない。少しだけ首を傾げると、夏美は一気に目を開いた。ばばは、そんな夏美に返事をすることもない。じっと流しの所から所在なげに立ちすくむ男を見つめていた。そのばばの視線は、心配そうでもあり睨み付けているようでもあった。その意味ありげなものに、祐子は問いかける言葉も失っていた。この男は誰だ。祐子がばばと男を交互に見ていると、それにばばが気づいたようだ。ぷいと視線を逸らすと、台所から立ち去っていく。男はばばの後を追って行ってしまった。祐子はその姿を目で追い、二人が見えなくなると同時に視線を夏美へと移した。夏美は手を洗おうと立ち上がりながら言う。

「ねぇ、忘れちゃったの？　蜘蛛の神だよ。今年はそれもあって人が集まるみたい」
蜘蛛の神。そう言われてやっと、裕子も思い出した。簡単に忘れてしまうほど、遠い存在だったその言い伝えのことを。その地域に住んでいる者達だけの間で語り継がれる、怖いほどの伝承を。ただ、別の場所にいる者にとってはすぐに記憶から削がれてしまう。
「あの、生け贄を食べるっていう？」
あの男が誰かを聞くことも忘れ、思わず祐子は笑いそうになってしまった。その伝承は、ばばから幼少時に聞かされた。悪いことをした時、蜘蛛様に食べられちゃうぞ、という脅かしはこの村では当たり前なのだ。そして、その蜘蛛の神と呼ばれる存在のために、五十年に一度復活祭なるものが開かれることも聞いたことがあった。まさか、それが今年だったとは知らなかったのだが……。ばばが、本気でその存在を信じるだけでなく、そのために孫を追い返そうとしているとなると笑ってしまう。神話は神話。伝承は伝承。ホラーはホラーだ。
「そうだよ。若い子の心臓を捧げ者として献上するってやつ。ばーちゃん、そんなこと信じているんだね。私もそのために祐子を避けようとするなんて、初めて知ったよ」
夏美も、困ったような顔で祐子に向かって肩を竦めた。
「はあ……。でも、いいや。勝手にしろって言っていたよね。せっかくここまで来たのに、ばーちゃんの変な信仰に付き合ってなんていられないよ。あー、お祭り楽しみだな。夏美、浴衣着る？」
遊びの話題になれば、話は早い。夏美の顔も一気に色味を帯びた。
「着る着る！　二枚あるから祐子にも貸してあげようか。色白だからピンクとか似合うんじゃないかな。私は、その後にも仕事があるんだけどね」
仕事が何かについて、この時の祐子は聞こうとはしなかった。ばばに返れと言われた衝撃と、夏美に再会した嬉しさ。二人の時間軸は過去で止まっている。一度同じ位置まで引き上げなければならな

い。いくら復活祭と言っても、蜘蛛の神など迷信に過ぎないのは確かだ。だが、この時祐子が言われた通り街に帰っていれば、これから起こる惨劇には出会わなかったのかもしれない。その悪夢を、まだ、誰一人として知るものはいなかった。

3　目撃

夏美が自宅へ戻ってから、祐子は家でゆっくりと過ごすことにした。夏美と話す機会はまだたくさんあるだろう。今は、久しぶりに歩いて張った足を思い切り伸ばしていたかった。家は、二階建ての造りにはなっているものの、上は一部屋しかない。それも今では使われておらず、ただの季節の入れ替わりのための物置としての用途しかないようだった。外は暑いのに風通しのよいこの家は、どこか涼しくて過ごしやすい。家中に風が吹き抜けるようにあちこちに大きな窓があるだけでなく、部屋同士も壁ではなく障子になっている。隠れる方が難しいかもしれない。夏になるとこの家に必ず常備されているサイダーの缶を冷蔵庫から取り出した祐子は、それを持って縁側へと向かった。仏間の前の廊下は南向きにあり、そこは祐子の一番のお気に入りの場所だ。廊下は大きな全身窓ガラスが六枚一続きに連なっている。そのため、廊下から奥の和室まで太陽の光も良く入り、転がっているととても気持ちがいいのだ。これこそが、日だまり、と呼べるだろう。しかし、ばばはそれを嫌う。日の光が入りすぎて、畳の色が変わってしまうらしい。それを防ぐために、ばばは太陽を遮断するかのごとく縁側の前の物干し竿に、これでもかとばかりに洗濯物を干す。天気は晴れ。洗濯日和なので間違ってはいないのだが、祐子にはどこか不満だった。廊下に胡座を掻くと、サイダー缶のプルタブを持ち上げた。缶が冷た過ぎて左右の手で何度も持ち替えたからか、中からは待ちきれなかったとでもいうように泡が吹き出してきた。慌ててそこに、口を付ける。唇を尖らせてその泡を吸うと、ほのかに甘い香りが、口の中に充満しては、溶けるように消えた。少しだけベトベトする手をTシャツの裾で拭う。こういうずぼらな所は、母親譲りだと祐子自信認めるところだ。それを母に言うと、自分ではなくて父親の母親、つまりばばに似ているせいだと言う。言われてみればそういう気もしてくる。ばばは、意

外にずぼらだ。今も縁側から庭先を眺めると、物干し竿の一番端に置かれた服がずり落ちそうになっている。細かい割に、適当なのだ。祐子も、先ほど足を洗うのが面倒くさかったように、今も手を洗うのが煩わしい。時間がたてば気にならなくなるはずだ、と自分に言い聞かせたくなる。いくら可愛い服を着ても、オシャレに時間を費やしても、面倒臭くてついごまかす。それが弱点だと分かっているのだが、どうにも直らないのが性格というものだ。そんなことを考えながら、祐子はサイダーの缶を思い切り傾けた。先ほどの泡とは大違いの、二酸化炭素をふんだんに含んだ液体が、口の中に溢れる。それが、舌や歯や、喉奥を刺激した。少しだけ感じた痛みも一瞬だけで消え、次にはその刺激をさらに求めたくなる。そして、今度は頬が膨れるくらいの量を口の中へ流し込むのだ。一通りそれを楽しんだ頃には、中身は無くなってしまっている。炭酸は実際に飲んだ以上の満腹感をもたらす。空っぽになった缶を床に置くと、祐子はその場に大の字に転がった。温い床と、入り込んでくる少しの風。目を細めるほどに眩しい太陽の光。森の上に浮かぶ白い雲。都会とは全く違う、これだけで新鮮な新しい命が体の中に取り込まれている気がした。祐子は、たまに思うのだ。自分の中には、もう一人の自分がいて、その子が本当の自分なのではないかと。自分は、ただのロボットに過ぎず、脳までも支配したその子に、全てを命令されているのではないかと。そう感じるようになったのは、少し前からのように感じる。でも、こうしていると、また元の自分に戻れるような気がした。この、懐かしくて、それでいて新しい空気のおかげで。

その時だった。一匹の小さな蜘蛛が、寝転がる祐子の顔のすぐそばを酔っぱらったようにふらふらと歩いているのが視界に入った。それは、本当にどこにでもいるような小さな蜘蛛だった。こげ茶色をした八本の手足。大きめの尻。どこに目があるのかさえ分からない。三歩歩くと、スキップするように一回ジャンプする。いつもならば、ティッシュを持ってきてすぐに掴んで外に放り出す。しかし、ここ

はばばの家だ。さっきの夏美の話を思い出した祐子は、捕まえる気にはなれなかった。ここは蜘蛛の領域だと思えてくるのだ。腹這いになると、じっとその小さな生き物を見つめる。そいつは、まるで楽しんでいるかに愉快そうに歩いては飛ぶ。蜘蛛の神……。これにも親玉がいて、神がいるのだろうか。背筋がぞくっと震える。この蜘蛛はどこに帰るのだろう。蜘蛛は、いつもどこからともなくやって来て、糸を張る。蜘蛛の巣があったとしても、蜘蛛がそこにいないことは珍しくない。この蜘蛛も旅行に来ているのだろうか。そんなことを考え、一人吹き出しそうになった。ばばの心配も、蜘蛛の伝承も全てが馬鹿らしくなり、祐子は追い風を作るようにぷうーっと蜘蛛のお尻に向かって息を吹き出した。その風に煽られて、蜘蛛は数十センチほど飛ばされる。そこで、やっと驚いたのか一目散に廊下の向こうへと走っていった。逃げていく蜘蛛を見て、祐子はまた吹き出しそうになった。弱い者いじめをしているようだが、それでもこんな時に小さな優越感が心を支配するのは拭えなかった。自分が助けてあげたんだ、という勝ち誇った気持ちになれる。殺そうと思えば、すぐに握りつぶしてしまうことも出来るのだから。なんだか妙に楽しくなって、ふと窓の外に目をやった。すると、菜園から姿を見せたばばが縁側を見ていた。いや、縁側というより祐子を見ているというべきか。祐子は腹這いになり、顎の下に両手を置いていた。そして、外に顔を向けると、太陽の光が眩しいので必然的に目を細める。それなりに年齢が体に滲み出始めているばばは、目がそこまでいいというわけではないだろう。祐子が気づいているとは思わなかったのかもしれない。いや、確実にそうに違いなかった。そうでなければ、あんな視線を祐子に向けるはずがないのだ。先ほどの話では、ばばは蜘蛛の神を信じているようだった。それを良い悪い、どちらに捕らえているのかは定かではない。しかし今、廊下を見ているばばの顔は、心配を孕んでいるようで、どこか憎しみのこもった視線を向けているのだ。一瞬、祐子の心臓が高鳴る。なぜか、動いてはいけない気がした。ばばの目つきが、それほどま

でに鋭かったのだ。サバンナにいるライオンから身を隠す草食動物のように、祐子はどこかに隠れてしまいたかった。もしも蜘蛛を神として大切に扱っているのならば、今、風を起こして追い払おうとした祐子に嫌悪を感じて当たり前だろう。しかし、かなりの距離がある縁側の向こうから、祐子の顔の側を通っただけの蜘蛛の姿が見えるはずがない。だが反対に、伝承のように女の子の心臓を生け贄とする蜘蛛を、悪い物として捉えていたらどうだろう。そうしたら、蜘蛛自体を毛嫌いするはずだ。たとえそうだとしても同じだ。あそこから蜘蛛が見えるはずがない。知りうる限り、祐子はばばが蜘蛛を殺すのも、大事にする場面も見たことがなかった。それならば、なぜあんな風にこちらを見ていたのだ。もしや、祐子がここを離れている間に、宇宙人が舞い降りて来て、ばばの体を改造したのだろうか。それで、超人的な視力を手に入れたのかもしれない。

「ぷっ……」

祐子は、さらにもう一度吹き出す。そんなこと、あるわけがないではないか。自分の想像力に、祐子は歌手より小説家を目指した方がいいと思えた。おそらく、ばばも太陽の下にいるので、こちらを見たら眩しかったに違いない。そう考えた祐子は、急に体の力が抜け、動くようになった。立ち上がり、網戸に手を掛ける。すると、ばばは祐子が動いた途端、視線を逸らすようにそっぽを向いてしまったのだ。地面にしゃがみ、草をむしり始める。その辺りには、祐子が最後にここを訪れた五年前にはひまわりの花が咲いていた。庭を見渡しても、どこにもそんな花はない。改めて時間の経過を思い知らされる。ばばは、何か怒っているのだろうか。急に不安になってきた。確かに何年も顔を出さず、いきなり泊めて欲しいと来たことは迷惑かもしれない。しかし、昔はあんなにも可愛がってくれたのだ。祐子は、再び地面をいじっているばばに、声を掛ける気には到底なれなかった。

床に置いたサイダーの空き缶を握りしめ、目に浮かんでくるものを必死でごまかそうとした。このまま帰ろうかな、という考えが頭

をよぎる。元気な姿を見られただけでも良かった。しかし、心地の良い廊下でごろごろしていると、祐子はいつの間にか寝入ってしまった。

目覚めた時には、夕日も沈みかけていた。肌寒いはずで、外から吹き込んでくる風は暑さを宥めるためではなく、身体をただ冷やすものに変わっていた。庭に植えられている野菜が、夕日のオレンジを浴びて神秘的に光っている。ばばが焚いているのだろう蚊取り線香の匂いが、自分の体に移った気がしてきゅっと額に皺を寄せる。むっくりと起き上がると、ガラス戸を静かに横に引いて閉めた。台所からは規則正しい包丁のリズム音が聞こえてきた。

くんくんと鼻をひくつかせると、しょうゆの匂いがする。まだ半分閉じてしまいそうな、重い瞼を両手で擦る。ばばの目つきが脳裏を過ぎり、台所へ行こうとする足がなかなか動かない。夏とはいえ、夕方から夜にかけての山は相当冷える。この短い間で少しだけ鼻が詰まったように感じる。むずむずする鼻に集中していると、次にはくしゃみの出そうな気配だ。包丁の小気味良い音を聞きながら、こみ上げてくる前兆に準備する。こんな時、我慢すると出る物も引っ込んでしまう。口元まで上がってくるのをじっと待つ。やがて、無意識のうちに小刻みに息を吸うことを繰り返す。そして、勢いをつけて、祐子は思いきり吐き出した。

「はっくしょん」

出すだけの爽快感は、確実に得られた。今度は鼻の下を触り、鼻水が出ていないことを確認する。と、それまで聞こえていた、包丁の音が急に止んだことに気づく。ばばは、祐子が起きたことに気づいたのだろう。ばばの顔を見ることが余計に躊躇われたが、腹の虫も鳴いている。懐かしい、おいしそうな香りに誘われて祐子は台所へ足を向けた。

ばばは台所以外の電気を付けていなかった。「勿体ない」が口癖の

ばばの行動の一つだ。
いつのまにか夕日は完全に沈み、廊下にも暗い陰が落ちる。しん、と静まる村は、夜の帷を待っていたかのようだ。昼間はあんなにもせわしく鳴いていた蝉たちも、静かに息を潜めている。台所を覗き込むと、ばばは鍋をかき回していた。そうか。だから包丁の音が消えたのか。と、祐子は納得した。祐子が起きたことに気づいて様子を窺ったり、睨むようにして廊下を見ていたわけではないのだ。なぜか、そんな普通のことに安心して、ばばの背後へ回ろうとした。年数の経つ家は、改装をしないとあちこちの床が軋む。一歩足を部屋に入れると、すぐにみしっと音がした。ばばの肩が微かに動いたが、すぐに何事もなかったかのように箸で鍋の中を大きくかき混ぜるのが分かった。
「今日のご飯はなぁんだろー」
その異変に気づいた祐子は、なるべく普通に聞こえるようなトーンを心がけて言った。
わざと足音を立てて近付き、ばばの後ろから鍋を覗き込む。グツグツと音を立てて煮てい
るのは芋だった。ニンジンとタマネギがまな板に並べられ、しょうゆが鍋の脇に置かれ
ているのを見ても、これは祐子の大好物に間違いなかった。
「肉じゃが！」
自分よりも少しだけ低い背の、ばばの頭に向かって言う。
「ほら。起きたのならば、お皿を並べて頂戴。本当に、祐子は寝るのが好きだなぁ。夜、
眠れなくても知らないからな」
ばばが祐子の言葉に反応するまでに秒数が必要だった。その間、祐子は待つしかなかっ
た。心臓が緊張で高鳴る。ただ、グツグツという野菜を煮込む音だけが、二人の間に走る。どうしてこんなにも緊張しなければならないんだ、と考えてからばばの横顔を見る。ばばは、皿を催促するよ

うにちらっと祐子の方を見た。気にすることはない。祐子は一つ頷くと、食器棚へと手を伸ばした。棚を開けようとすると、取っ手のところに一匹の小さな蜘蛛がいる。

「やだ。まただよ」

ふっと息を吹きかけ、床に落とす。蜘蛛は、ばばの方を一瞬振り返ったように見えたが、そそくさと逃げていった。祐子は、蜘蛛がばばに会いに来たのではないかと思うほど、それははっきりと感じたのだ。まだ鍋をかき混ぜているばばに、声を掛ける。

「ねえ、これでいいよね？」

「ああ。早く出してくれよ」

こっちを見ることもないばばに違和感を覚えながらも、青と白で模様づけられた底の深

い小鉢をテーブルに並べる。皿を置いてから、さきほど蜘蛛が歩いていった方を見るも、

もうその姿は跡形もなかった。

それからの時間はあっという間に過ぎた。意外にも、ばばは昼間以降、祐子に帰れとは

一度も言わなかった。祐子が報告する周りで起こったことに耳を傾け、相づちを打った。

デビューが決まったということを話した時、喜んでくれていたのは間違いないだろう。

ご飯を食べてしまえば、夜などすぐに過ぎてしまう。山場を越えたように、祐子はどっ

と疲れた体をお風呂の湯に沈めた。街の自宅の風呂よりも、三倍はあろうほどの湯船。ばばは季節に関わらず、湯船一杯にお湯を張る。祐子が入ると数ミリほどの湯が溢れ出た。モクモクと白い湯気が風呂場に立ちこめる。壁には、銭湯のように絵が描いてある。赤ん坊だった頃、お風呂を嫌った祐子のために、業者を呼んでばばが書かせたそうだ。それが可愛い動物ならまだしも、東海道五十三次だ。線路のようにご当地を巡る地図が描かれている。ばばの趣味だった

としか言いようがない。それでも、そのおかげで祐子は風呂に喜んで入っていたというのだから、自分自身でも驚きだった。ましてや、この風呂に入るたびに地名を聞いたせいで、祐子が初めて言った言葉は「箱根」だったらしい。これは、今でも両親の間で話題になるときがある。覚えさせた本人のばばのいないところで。頭と体を洗って風呂を出ると、すでに布団は敷かれていた。ばばがどうするかと訝っていたが、布団は二つが並べられている。気まずいような、それでいて嬉しいような感情に支配され、一つの布団に滑り込む。ばばは、祐子が出たあとに風呂に入ったようだ。風呂場からは水の音が聞こえる。祐子は鞄を枕元に持ってくると、その中からパックやフェイスマッサージ器、化粧品などの諸々を取り出した。荷物が重いのも、これが原因の一つだ。持ち運べる三面鏡を床の上に置き、コットンにたっぷりと化粧水を染みこませる。額から頬にかけて、鼻の頭から顎の下までを念入りに撫でていく。

「なんだい、そんなに布団の上で散らかして」

祐子が、化粧水を付け終わりマッサージを施したところに、もうばばが上がってきた。

見たことのない美顔マッサージ器に興味を持つばばの頬に、それを押し当てては笑う。パ

ジャマ姿の二人は、それぞれの布団に入った。

電気を消して隣を見ると、ばばはすぐに目を瞑ったようだ。寝息をたててはいないが、

眠りに入る準備は万端のようだ。こうして見ると、昼間庭先から祐子を睨むようにしていたばばなど嘘のようだ。やはりあれは見間違いだったのだ、と祐子は自分に言い聞かせる。風呂にゆっくり沈めた足は、大分楽になった。目を閉じると、祐子は眠りの渦に一気に引き込まれていった。

　数時間経った頃であろうか。初めは、なぜ目が覚めたのかも分からなかった。再び祐子

が目を瞑った時、部屋の隅から微かに音が聞こえた。この音で目覚

めたのか。祐子が目を
開けると、真っ暗な部屋の隅に、ぼんやりと明かりが漏れている。
廊下からの明かりが入
ってきているようだが、まだ夜中のはずだ。誰だろう、といっても
家にいるのは二人だけ
だ。ばばの布団を見ると、そこは予想通り空っぽだ。手を伸ばして
敷き布団を触ると、う
っすらと体温が残っている。何をしているのだろうか。どこかへ行
ったのだろうか。時間
を確かめようと携帯を手で探すが見あたらない。仕方がないので布
団から身体を起こすと、
祐子は明かりの方へと動いた。眠いけれど、気になって眠れない。
具合が悪いとすれば大
変だ。寝苦しいほど暑くもなく、布団から出るのが億劫になるほど
には寒くもなかった。
四つん這いで、畳の上を移動する。フローリングとは違うチクチク
刺さるような痛みを膝
に感じる。畳の目が当たるのだ。なるべく音を立てないようにと戸
の方へと近づく。その
戸は真ん中に薄いガラスが入っているので、そこから向こう側が見
える。向こうからも見
えてしまうのだが、何かあったなら急を要する場合もある。しかし、
小さな不安が祐子の
胸に過ぎる。見てはいけないものが、向こう側に潜んでいるような
予感がする。不可解な
ばばの言動。自分の吐く息でさえも、ばばに聞こえてしまいそうだ。
聞こえたからと言っ
てなんなのだ。攻撃されるわけではあるまい。自分を奮い立たせ、
祐子はガラスの間から
廊下を見ようと体を伸ばした。床に着いている両手が、微かに震え

る。どんどん膝の痛み
も強くなってくる。意識を集中して息を吸う。ガラス戸に自分の顔
が映るほどに近付いた
時、邪魔をするように一匹の蜘蛛がガラスを這っているのが視界に
入った。気持ちが悪い、
また蜘蛛だ。息で吹き飛ばそうとした、その時だった。祐子は、明
かりの向こうに見えた
光景に、危うく悲鳴を漏らしそうになった。慌てて自分の口を両手
で塞ぐものの、目の前
の光景から目が離せない。ばばは、すぐそこにいる。確かにいる。
しかし、厳密に言えば、
それはばばではない。ばばの顔をしているが、その身体は巨大な蜘
蛛になっているのだ。昔よりも小さくなってしまったばばの身体か
ら、その数倍の長さもあるだろう細長い手
足が生えている。蜘蛛の足って何本だっけ。咄嗟にそんなことを考
える祐子の喉元に、吐
き気が急激に襲ってくる。ばばは、一番隅っこの壁にいる。廊下を
揺れ動く小さな物に目
を凝らすと、それはあちこちをうろうろしていた蜘蛛たちがばばの
方へと歩いていく姿だ
った。蟻のように隊列を組み歩いているそれは、まるで操られてい
るように迷いのない足
取りだ。祐子の前を過ぎた小さな蜘蛛も、集合時間に遅れたとでも
思っているのか、転が
るように走って行き、その列に加わる。廊下の隅で行われているそ
の行列に、祐子は恐怖
の次に混乱が舞い降りた。これは、なんの儀式だ。
蜘蛛に姿を変えたばばの手足は、何かを求めるように宙を掻いてい
る。そして、自分の
尻から出ている一筋の糸を取ると、並んで待っている小さな蜘蛛に

手渡していくのだ。そ
の長さを少しずつ増やし、壁に子分達が張っていく。この家中を蜘
蛛の巣にするつもりな
のだろうか。蜘蛛は、なんのために巣を作るのだ。……獲物だ。ば
ばは、自分が巨大蜘蛛
なのを分かっているのだ。子分達に分ける食料として、祐子を被害
に遭わせないように、
帰れと言ったのだろうか。そもそもいつからこうなったのだ。どう
して、ばばはこんな蜘
蛛になってしまったのだ。昔からだったのだろうか。自分も蜘蛛の
孫ということになるの
か。蜘蛛……。八本だ。その足を自在に操り、天井や壁を自由には
いずり回る。いつか手
足が自分にも増えていくのだろうか。このことを祐子の両親は知っ
ているのだろうか。あ
の真っ黒の巨大蜘蛛が、ばばだということを。夢ではない。誰かに
言わなければならない
だろう。いや、誰かに言えば、あの蜘蛛達に始末されてしまうだろ
うか。始末……どうや
ってだ。考えれば考えるほど、頭が混乱していく。パニックになり
そうなのを、深呼吸し
て落ち着こうとする。その間にも、ばばはお尻から糸を吐き出し続
け、満足そうに子分達
に渡していく。
ぼんやりと明かりに照らされ、糸がすでにあちこちに張り巡らされ
ているのが見える。
ばばは、理性をすでに失っているのだろうか。話し掛けたら襲われ
るのか。祐子は、自分
があの蜘蛛に食べられることを想像した。その考えに辿り着いた瞬
間、足は勝手に動いた。

逃げなくては！　瞬時に立ち上がると、腰が抜けていたのか足に力が入らずに布団に倒れ込む。意識を集中して、身体を奮い立たせる。引きずるようにして身体を蜘蛛とは反対へ行こうとする。物音を立てないように動く配慮はなかった。とにかく逃げることが優先事項だったのだ。だが、すぐにそれを後悔することとなった。部屋の隅に置かれていた箪笥に、足をぶつけたのだ。がたん、と音が立ってから、いかに注意力が散漫になっていたかに気づかされる。しまった、と思った時には遅かった。体中に焦りを表す電流が走り抜ける。震える足を抑えて、祐子は布団へと再び戻ろうとした。見なかったことにすればいいではないのか。しかし、気配を感じて戸に視線をやると、そこにはすでに現れていたのだ。視線が合ってしまった。ばばの顔が、戸のガラスからこちらをじっと見ている。

「ひっ……」

小さく漏れる悲鳴を、ぐっと堪える。普段のばばが、戸に嵌っているガラスから部屋の中を覗く訳がない。そんな体勢は、中腰にならなければ不可能だ。あり得るとすれば床拭きをする時だろうが、こんな夜中にそんなことをするはずがない。それにガラスに触っている手足は、紛れもなく人間の物ではなかった。首は消え、顔のすぐ下には丸い身体が膨らんでいる。その胸には光に照らされて黄色の筋が何本か見える。それ以上に長い手足がガラスにへばりつき、八本の手足はすべて胴体の胸の辺りから生え

ている。あれは、まさ
に化け物だ。
どう出るか、その一瞬が戦いだった。もしも、ばばが何もしてこな
かったら、布団に潜
ってしまおうと決める。しかし、もし襲ってきた場合、その時はこ
の家を飛び出すのだ。
祐子は、頭の中でばばの前を通らずに庭へ通じる窓を思い浮かべる。
その間も、二人の視
線は全く動かなかった。その答えが出ないまま、祐子の足が数ミリ
動いてしまった。じっ
と止まっていることは、この場では不可能に近かった。身体が無意
識に危険信号を発し、
逃げたがっている。その瞬間だった。
不幸にも後者が選ばれた。ばばは祐子の身体全体を舐めるように睨
み付け、その細い一
本の手で戸を開けると俊敏な速さで駆け寄ってきた。周りの小蜘蛛
達をはね除ける。ぼん
やりとした灯りを背に、ジャンプするばばの姿が浮かび上がる。そ
れは恐怖その物だった。
あの、見慣れた皺のある手は最早ない。今は、あちこちに動く手足
が祐子を求めて伸びて
くる。口を開けたまま、声が喉の奥に引っ込んでしまい、祐子は悲
鳴を上げることも出来
ない。全身を現したばばのその身体は、顔の下にある胴体だけでな
く、その下に異常に膨
らんだ下半身も持っていた。それが、ばばがジャンプした瞬間に大
きく揺れる。夕飯の量
だとは思えない。何を食べたのだ。あそこには、何が入っているの
だろう。尻からは、未
だに糸を引いている。

ばばが戸を開いてジャンプをした時、祐子もただ腰を抜かしていた訳ではなかった。全身が恐怖で竦み上がっていたが、それでも四つん這いで逃げようとした。出来る限り速く。しかし、それであの魔物に勝てるはずはない。戦うと言っても、どうすればいいのかわからない。たとえ台所へ走って包丁で刺せたとしても、そうなるとばばも死んでしまうのだろうか。祐子が迷ったのがいけなかったのか、巨大蜘蛛は祐子の足に糸を巻き付けたのだ。それが口から吹き出されたのか定かではないが、とにかく巻き付く恐怖感から祐子がはずそうと糸を触ったが、その粘着力は凄まじい。ガムテープや接着剤のような、べたべた感。それが、足からはい上がるようにして腹にまで感じ取れるようになった。部屋は暗く、廊下の灯りもほとんど入ってこない位置。どこに糸がつけられたのかも、はっきりと見えないのだ。恐怖で足の感覚が消えていく。見えないだけでなく、これからどうなるのかも分からない。ぐるぐる巻きにされ、どこかに吊されるのか。食べられるのか。もう自由に進むことはできない。もう駄目なのだろうか。

せめて、ばばに、ばばと言えるのか分からないが、この魔物に命だけは助けて貰えるように願おうではないか。すでに、デビューも決まっている。こんなところで、死んでなるものか！　決心を固めて振り返ると、まっすぐに廊下の灯りが入った。部屋の内部がくっきりと浮かび上がる。それを見ない方が、まだよかったのかもしれない。その強気の行動は、さらに祐子の恐怖を増長する結果となってしまった。その視線の先にあるばばの顔は、今やその面影も無かった。顔中が、大きな口になっていたのだ。まるで祐子を丸飲みするつもりのように迫ってくる。さらに視界に入った祐子の足は、想像以上に糸が巻かれて白くなっている。それは、まるで繭のようだ。と、すぐに自分の体が引きずられるのが分かる。布団や畳をがむしゃらに掴んだが、それ以上の力で吸い込まれてしまう。爪の間に、ほつれた畳の先端が刺さる。あの口に入ったらどうなるのだ。噛ま

れるのか、丸飲みか。
「いやあああああ！！」
突如湧いたのは、恐怖が呼び寄せた叫びだった。微かに蜘蛛の口の中のなま暖かさを足に感じた瞬間、祐子の意識は途切れていった。

4　恐怖

目が覚めると、そこは明るかった。祐子は、目が覚めたこと自体に驚いた。いつもはそこでゴロゴロと時間を潰すのにもかかわらず、今朝は一瞬で布団の上に跳ね上がった。嘘だ。一番にそう思った。布団は、昨夜祐子が寝たときよりも多少乱れている。枕はあらぬ方向へ飛んでいるし、掛けていたタオルケットは布団にかすりもしていない。朝から気温が上昇しているようだ。その暑さのせいで、着ていたパジャマの前がはだけている。その半分脱げ掛けたパジャマから、半袖のTシャツに着替えながら、祐子は隣に敷いてあったはずのばばの布団を見た。もちろん、そこにばばの姿はない。布団はきちんと畳まれて押入に戻されている。部屋には何一つ変化がないようだ。朝一番に線香もあげられている。あんなにも祐子を恐怖へ陥れた蜘蛛の糸さえも見当たらない。

「あれは……夢？」

額に手をやると、うっすらと汗が滲む。この気温のせいだけだろうか。上下の着替えが終わると、簡単に布団を畳む。部屋には、昨日と同じように太陽の光が差し込み、洗面所のほうからは、ごうんごうんと洗濯機の稼動する音が聞こえてくる。何気ない日常の始まりに過ぎない光景だ。それなのに、ばばの顔を見るのが怖くて仕方がない。どう考えてもしっくりこない。あんなにもはっきりと足を掴まれた感触は残っている。畳の上に這うと、祐子は昨夜の恐怖の形跡がないかを探そうとした。蜘蛛の足、せめて吐き出されていた糸でもあれば、確証が得られるのに。それを続ける暇もなく、背後から声が掛けられた。

「何をやっているんだい」

這っていた身体がびくっと強張り、祐子は振り向くことを一瞬迷った。その声の主は明らかだ。だが、その本体がばばだとは限らないではないか。またもや蜘蛛だったらどうしようか。意を決しそろ

そろと入り口に目をやると、そんな不安はかき消されることとなった。ばばの顔の下にあるのは、手足も人間だ。腹から手足が生えることも、その下に異常に膨らんだ部分があるわけではない。ほっと息を漏らすと同時に、どこか馬鹿らしくなった。

そんなこと、あるわけがない。分かっていることではないか。この小さな村に来て、肝試し気分でも味わうつもりだったというのか。そんなのまっぴらごめんだ。床から起きあがると、祐子はばばに駆け寄る。鼻の下に掻いた汗を、指先で拭いながら問う。

「おはよ。ねぇ、ばばって蜘蛛、好き？」

ばばは一瞬目を大きく見開いたが、すぐに鼻の頭に皺を寄せた。手に持っている箒が、やけに大きく見える。

「なんだい、急に」

最初に声を掛けてきた時よりも、若干上擦っている気がした。やはり、なにかあるのだろうか。祐子がじっとばばの目を見つめると、彼女も初めこそ見返してきたが、すぐに逸らされてしまった。箒で廊下を掃き始めるばばは、もう祐子を見ることはない。

「蜘蛛なんて、本当は嫌いだよ。でも、あれはゴキブリや小さな虫も食べてくれるから、あながち邪魔にも出来ないさ。それにここら辺では、蜘蛛は神様だからね。祐子も蜘蛛を外へ放り出すのはいいけど、殺すんじゃないよ」

ばばは、さも興味のない素振りで言い放ち、箒を壁に立て掛ける。廊下に持ってきていた掃除機の尻からコードを引き伸ばすと、仏間のコンセントに差し込んだ。

蜘蛛を殺すんじゃないよ。

その一言が、祐子の頭の中で木霊する。それは、昨夜のように自分に手を貸してくれる

子分達を始末するな、と暗に意図しているのだろうか。祐子は、ばばが掃除機を持ち上げて尻を向けた途端、そこに隠されているものはないかと手を伸ばした。服を脱げば、蜘蛛なのかもしれない。手で確かめたくなったのだ。それが一番簡単で可能な方法だった。

「ひゃあ」
祐子が尻に触れた途端、ばばは気の抜けた声を漏らした。当然と言えば、当然の反応だろう。
「あ、柔らかい」
祐子が触ると、ばばの尻は若者の柔らかさとは種類が違うものの、確かに人間のそれだった。蜘蛛の尻など触ったことがないが、祐子の記憶にある昨夜の蜘蛛は、固そうな体に覆われていた。それとは違う。恥ずかしかったのか勘に触ったのか、ばばは掃除機の吸い込み口を祐子に向けると電源をいれた。
「変なことをするんじゃないよ！」
そう怒鳴るように嗄れ声で叫ぶと、ういいんと祐子の服に掃除機を当てようとする。
「やだ！　やめてー」
こんなのは冗談だと分かっている。しかし、その行動に昨夜駆け寄ってきた、ばばの形相を思い出す。祐子は、本気で嫌がる振りをしながら、走ってその場を後にした。
「朝ご飯、ちゃんと食べるんだよ」
廊下に出ると、背後からばばの声が追いかけてくる。それには無言で応戦しながら、祐
子は足の裏に冷たい感触を残す廊下を走った。今日は、あちこちの窓が開け放ってあるが、
昨日と違って少しも風が入ってこない。じっとりとした湿気が、祐子の寝汗とは違いすぐ
に吹き出してくる。今日は過ごし辛くなりそうだが、都会よりマシだと思い直す。
「ばーちゃーん」
祐子が台所まで来ると、縁側の方から夏美の父親であるおっちゃんの声が聞こえた。こ
こは、車がないと日常生活の消耗品も確保できない。おっちゃんは、こうして昔からある

程度の日数をおいては、ばばに必要な物がないか聞いてくるのだ。
その親切もおっちゃん
が山を下ったところにある、割と安く生活用品が手に入る店の手伝
いをすることに所以す
る。祐子も、小さい頃にはその買い出しによく付いていったものだ。
ここではそんなこと
が当たり前なのだ。
都会に出て、すっかりこんな光景忘れてしまっていた。おっちゃん
の呼び声に応じて、
ばばの掃除機の音が止まった。自分が行く必要はないだろうと、祐
子はテーブルに載って
いる卵焼きを口に放り込んだ。冷蔵庫を開けて、牛乳をコップへと
思い切り注ぐ。喉を鳴
らして胃に流し込んでいると、縁側からボソボソと話す声が聞こえ
てきた。その声は思い
の外小さく、内容までは聞こえない。祐子は、足音を殺して縁側へ
と続く廊下に顔を出し
た。そして、わざとすぐそばの食器棚の扉を大きく開ける音を出す。
台所で活動している
と強調するためだ。そして、すぐに耳を澄ませた。神経を尖らすと、
それは途切れ途切れ
に耳に入った。ばばの声に対して、おっちゃんも焦るように答えて
いる。
「ばあちゃん、それはないって。大丈夫だ。あの子には分からない
よ」
「あの子は鋭い子だよ。傷ついてほしくないんだ。昨夜のことを思
い出されると、困るだ
ろう？　ここにいるというならば、それなりにどうにかしなければ
ならないだろう」
そう聞き取れた言葉を最後に、さらに声は小さくなっていった。ど

ういうことだ。昨夜
のこととは。やはりあれは夢ではないのだろうか。ばばが、夏美のおっちゃんにまで相談しているのか。二人の関係性が憚れる。ばばがあの巨大蜘蛛になっていたとしたら、おっちゃんは……子分の蜘蛛にでもなっているのだろうか。
「あ、早いじゃん」
縁側に意識を集中していた祐子は、夏美が勝手口の扉を開けて台所を覗いているのに気づかなかった。彼女は、自分の父親がばばと同じように蜘蛛の魔物に取り憑かれてしまっているということを知っているのだろうか。祐子は、持っていた牛乳を全て口の中へ流し込むと、夏美に近付いた。コップを流しへ置き、靴を履いたままの夏美を凝視する。五十センチほど祐子のいる位置が高いせいで、腰をかがめて顔を寄せる。ばば達に話を聞かれるわけにはいかない。
「夏美。話があるの。ちょっと来て」
耳元で囁くと、祐子は夏美の腕を掴んだ。彼女は、訳が分からないというように眉を潜めながらも、大人しく付いてきた。祐子は家の裏庭まで来ると、夏美の手を離す。昨日は聞こえた蝉の声が、今朝になれば雨も降っていないのに聞こえないのもなにか関連があるのだろうか。夏美は、手を離したものの無言の祐子を訝しげに見た。祐子が彼女をよく見ると、その手には大きな皿に入ったおかずを持っているではないか。お裾分けに来てくれたのだろう。すっかり板に付いたエプロン姿に見入っていると、本人から横やりが入った。
「祐子。あんた凄い顔色悪いよ？　大丈夫なの？」
菜園で俯く祐子の顔を、覗きこんでくる夏美。
「夏美、ねえ笑わない？」
真剣な顔をして祐子が聞くと、唇を尖らせながら夏美はすぐに何度か頷いた。縁側から
は、まだ二人の話し声が聞こえる。ここは危険かもしれない。
「ちょっとこっちへ来て」
祐子は家の門を出ると、そのまま夏美の家を目指した。三十メー

トルほどの距離を駆け足で向かう。夏美の家の駐車場で軽トラックの後ろの影に隠れるようにして座ると、付いてきた夏美を手招きで呼び寄せる。ここまで来れば大丈夫だろう。
「ねぇ、祐子ってば」
夏美がすぐに話しかけようとするのを、祐子は片手を上げて止めた。今の会話や昨夜の
出来事を、まずは一気に口から放り出してしまいたいのだ。夏美の手の上で、おかずが皿
の端に寄っている。
「待って。あのね……。顔色が悪いのは大丈夫、気にしないで。それよりね」
「ねぇ、でも……」
「待って。夏美の話も後で聞くから。それより」
さらに強く祐子が制すと、まだ視線を動かしたままの夏美も、軽く頷いた。
「……あのね」
座り込んだはいいものの、言葉を待たれると今度は話しづらくなる。簡単に信じてくれ
るような話でもない。しかし、これ以上黙っているわけにもいかない。夏美はこの行動を
訝っているし、ばばに気づかれるかもしれない。また夏美に遮られるのも面倒だ。祐子は
意を決し口を開いた。信じてくれなくてもいい。本当にあれを見たのだから。
「実はね、ばばって、蜘蛛に取り憑かれている。そんなこと、あると思う？」
言っている側から、祐子は自分の頭を殴りたい衝動に駆られた。そんなこと、他人に言
われて信じられるというのか。口に出したことで、余計にそれは夢のような話だと思えた。

隣の夏美を見ると、なるほど想像通りの顔だ。目玉は落ちてしまうのではないかと思うほど開いているのに、口元がほんのり笑いを堪えている。歯が下唇を噛んでいる。それを離せば吹き出してしまうというのが見て取れた。軽く息を吸った夏美は、それでも努力の賜か、口を開いても笑いは漏らさなかった。代わりに、小さく疑問の音を出す。

「へ？」

その反応を予想していた祐子は、夏美のおかげで少しだけ現実に引き戻された気がした。

自分の口元も緩めると、大きく息を吐き出して言う。

「そうだよね。おかしいよね」

嫌味っぽくはならないように、努めて明るく返す。しかし、祐子が自分で思うほど頬は

は上がらなかった。引きつった笑顔にしかなっていない。祐子を傷つけたと思ったのだろ

うか。夏美は、慌てて手の中の皿を地面に置くと、祐子の顔を覗き込んで笑った。今度は、慰めるような笑みで。

「何？　ごめんごめん。教えて。ばばが蜘蛛ってそれ、夢？　蜘蛛がどうしたの。昨日さ、

お祭りの変な話をしたから、脳が覚えていたのかもね」

そんなはずはない。しかし、祐子にはそう言われても否定出来なかった。ゆっくりと頷

く。そう、自分を信じ込ませるために。そして、再び口を開く。

「あのね、昨日の夜目が覚めたら、ばばが隣の布団にいなかったの。

それで、廊下に気配

があって覗いたの。そうしたら……」

「ばーちゃんがいた？」

「そう。それは、ばばだけど、ばばじゃなかった。顔はね、ばばだったんだよ。でもね、
身体が蜘蛛だったの」
祐子は、夏美の目を見てはっきりと告げる。ごまかすこともなく、真実を話す。それを
受けた夏美は、一瞬目を見開いて祐子を見つめ返すと、次の瞬間には両手で口元を押さえた。そして、思い切り吹き出す。
「あはははは！！……っと、ごめん」
しばらく声高らかに笑ってから、夏美は急いでそれを引っ込めた。今度は、また気まずそうに肩を竦める。夢の恐怖は共有できない。人間は夢だけではなく、現実の世界の恐怖も同じ立場にならなければなかなか理解してあげることなど難しいのだ。
「もういいよ。却ってすっきりするから。でも、その蜘蛛が妙にリアルだったんだよね。最初はね、体が固まった。だって、ばばのお尻から蜘蛛の糸が出ていて、それを小さな……普通の大きさの蜘蛛が、家に張り巡らせていくの」
ここまで来ると、興味を持ったのか夏美も真剣な顔をする。話しながら、祐子は昨夜のばばを思い出して両腕に鳥肌が立った。
「でね、怖くなっちゃって。布団に隠れようか家を飛び出そうか迷ったんだ。思い出すだけでも足が震える。逃げようとして箪笥の端に足をぶつけてね、音が鳴ったんだ。それで、振り返ったらばばがあたしの方を見ていて……。目が、合ったんだよ……。それで蜘蛛の細い足で戸を開けて、物凄い勢いで走って……ううん、飛ぶようにして向かってきたの」
夏美は、もう祐子の話を区切ろうとはしないようだ。だが、祐子は話しながら、彼女がどんな表情をしていてどんな風に思っているかなど考える余裕はなかった。もう止められない。恐怖は少しでも吐き出せば楽になるかもしれない。
「でもね、それだけじゃないの。ばばは、あたしの両足を糸で……ぐるぐると巻き付けたんだ。あたし動けなくなって、藻掻き続けた。

それで、生暖かい息のようなものを感じてあたしの両足を見ると、ばばが飲み込もうとしていたの。で、思わず叫んだわ。……それで、目が覚めた」

そこでやっと祐子が夏美を見ると、彼女はあんぐりと口を開けていた。

「これで終わりよ」

どう話を締めればいいのか分からずに、祐子はもう一言付け足した。夢は口に出すと叶わないという。それでは、口に出せば本当に夢なのではないか。迷信だろうと言っても、なんとなく気が晴れた。ふっと息を吐き出すと、まるで夜の会談話を終えたような気になる。祐子は、地面に置いたままの皿に目をやった。その中には、こぶの煮付けが入っている。どうして、田舎は暑い時期さえも煮物を食べるのだろう、と昨夜のおかずを思い出しながらも、朝ご飯も中途半端な祐子のお腹は減っている。つい、匂いに誘われるように手を伸ばすと、夏美はそれを止めなかった。いや、祐子のそんな行動など見ていなかったのだ。夏美の視線の先には、地面しかない。こぶを口に放りこんだ祐子が、無言の彼女の顔を見て、初めてそこで違和感を持った。さっきまで笑っていた夏美の顔が、人の顔色を心配していた彼女自身の顔色がどんどん青ざめていくのだ。脅かすつもりだったのではない。むしろ最初の通り、笑い飛ばしてくれればよかった。そんな顔をされると、祐子の不安は余計に煽られた。

「……な、なに？」

どこか戸惑いがちに問いかける。彼女がどこを見ているかを探ろうともせず、祐子はもう一つのこぶに手を伸ばす。もう一つ。もう一つ。止まらなくなったその手を動かしていると、皿の上は空っぽになってしまった。その時、夏美の低い声が降ってきた。それは、想像以上に怯えているようだ。

「祐子、今朝着替えるときに気づかなかった？」

なんのことだろう、と思い首を傾げる。口からは、こぶの先端が飛び出している。

「あんたのその足。両足に同じように痕が付いているよ。見覚えないの？」
そう言われてはっと息を飲んだ祐子は、自分の両足を見た。そこまで気づかなかったのだ。しかし、見てみれば間違いなかった。昨夜、ばばの吐き出した糸が巻き付いた足首に、縛られたような痕があるのだ。部屋に落ちている糸を探すよりも確かに、自分の身体に証拠が残っていることに信じられなかった。そういえば、足首が一番締められたように痛かった。あまりの驚きで、せっかく味わっていたこぶが逆流しそうになり慌てて飲み下す。そして、何度か咳き込んだあと、祐子は改めて自分の両足を見つめた。白い肌に浮かび上がった赤い線。それは気味の悪いほど綺麗に刻まれていた。
「……それ、本当に夢？」
夏美の一言が、昨夜の恐怖を押し戻す。ここまではっきりとした証拠があるなんて。ごくりと唾を飲み込むと、夏美の顔を正面から見つめる。急に聞こえたエンジン音に二人がびくっと身体を奮わせ振り返ると、一台の乗用車が駐車場の脇を通り過ぎていった。改めて耳を澄ませ、近くに誰もいないだろうことを確認してから、祐子は言った。両手で、両足の赤い線のついたくるぶしを握りしめる。
「これ……。夜、あの糸が巻かれていたところだ。それじゃあ、ばばは……本当に蜘蛛に？」
祐子は、震えそうな声を必死で押さえる。現実もなくて、早く都会に帰りたくなってきた。このままだと、祖母に殺されてしまうではないのだろうか。ばばは、蜘蛛の神の心配をしていたわけではないのだ。自分が孫を殺してしまうかもしれないという恐怖に戦いていたのではないのだろうか。
「待って。さっき、うちの父親もいたよね……。お父さんは、ばーちゃんと毎日のように話しているけどそんなこと一言も……」
祐子は、先ほどの一言も思い出す。夏美は、これを信じるだろうか。いや、知らせておくべきなのだ。もしもばばが暴走すれば、夏美の身も危ない。夏美のこの態度を見れば、もしかして夏美の父親

がもう蜘蛛の世界に引きずり込まれていたとしても、彼女はまだ平気だろう。ましてや、夏美の父親からすれば娘を守りたくて当然ではないだろうか。下手をしたら、ばばの身が危ないかもしれない。いや……。答えの出ない問題をいったりきたりとしながら、祐子はついに口を開いた。

「あのね、さっき二人が話していたことをチラッと聞いちゃったんだ。ばばとおっっちゃんが……昨日の夜のことについて。あたしが覚えているとかいないとか……。だから、つまりね。もしかしたら、おっちゃんも蜘蛛……」

「やめて！」

その声音は、明らかに嫌悪感を示したものだった。祐子の興奮が、一気に冷めていく。

同じように恐怖を共有する……というわけにはやはりいかないようだ。夏美は目を瞑り、両耳を押さえていた。

「ごめん……」

しかし、祐子が謝ると少しだけその表情は和らいだ。

「ううん……。いいの。私も煽っちゃったし。その足、ちゃんと湿布でもした方がいいよ」

「うん……」

目を背けたくなって当たり前だ。祐子の足首を見て、信じてくれるかも知れないと期待を持ったのが間違っていた。祐子もばばが蜘蛛だと信じられないように、夏美も受け入れることなど出来ないだろう。祐子が足首に視線を落とすと、夏美が祐子の背中をさすって言った。

「祐子、そんなのは夢だって。ばーちゃんも父さんも、何か別のことを話していたのかもしれないし」

そんなはずはない。しかし、今はもう言っても無理だろう。夏美は、先程よりもうんと力の籠もった声で付け加える。

「確かにね、昨日の夜中、父さんは出かけていったんだ。いきなり電話が鳴って、私は二階の自分の部屋にいたから誰と話しているの

かも分からなかった。私に声を掛けずに飛び出していったし、それほど大事なことだと思わなかった。ほら、ここら辺って最近野生の動物が畑を荒らすのよ。それで、連絡が来ると見回りに行くこともたまにあるから。だから大丈夫。父さんが蜘蛛だって？　笑っちゃうよ、そんなこと。きつい靴下でも履いていたんじゃないの？」

そういう夏美の、顔に笑みはなかった。そして、祐子の方に顔も向いてはいない。それでも、もうこの話題を追求出来る空気ではなかった。

「行こうよ」

「うん……」

二人が、それぞれに納得の鞭を打って立ち上がろうとした時だった。

「おおーい！　夏美！」

それは、ばばでもおっちゃんでもない声だった。祐子がその声に振り返ると、そこに現れたのは、夏美同様、真っ黒に日焼けした男の姿だった。祐子の隣にいる夏美の姿を見て、満面の笑みを浮かべる。その頬には、はっきりとえくぼが出来ている。それが、男の黒い短髪によく似合っている。背は高い割に、小さな子供のようなあどけなさが残る。女にとっても、えくぼは生まれ持たない限り一生得ることのできない羨ましいものでもある。男にとっては、それが可愛い、と言われる部品になるのならば欠点ともなりうる。それでもその男のえくぼは、祐子が見る限り彼の顔をさらに魅力的なものにしていた。そして、それはどこか見覚えのあるものだった。

「友樹！　何よ、あんた仕事はどうしたのよ！」

夏美は、祐子の側から立ち上がり、男に向かって大股で近づくと、親が子供を叱るように、頭上に拳を作った。しかし、男の視線に気づいたのかその手をゆっくりと下げていく。男は、一瞬夏美の拳にびくっと反応したものの、後ろにいる祐子に気づくと目を見開いたのだ。

「仕事は今日休みだって。それよりも」
「ああ、友樹。分かる？　祐子だよ。私も、昨日久しぶりに会ったんだけどね」
男は、夏美が紹介しようと祐子に向けて手を向けたが、それを振り切るようにして近づくと、いきなり抱きしめた。
「ちょっと！　友樹！」
感動の再会への包容にだったのだろうが、それでも女二人は悲鳴にならない声を上げた。
祐子は驚きの悲鳴だったが、夏美はどうやら違うようだ。祐子から、友樹の肩越しに見えた夏美の顔は、蜘蛛の話をした時以上に引きつっていた。それでも友樹は祐子を放しはしなかった。
「俺、俺だよ。覚えている？　祐子ちゃん。坂本友樹！　いや、やっぱり可愛くなったな！」
祐子がいきなりの歓迎にびっくりしていると、それを引きはがしたのは夏美だった。
「友樹！　祐子もびっくりしているでしょ！」
祐子は、気づかぬ間に赤くなった顔を、背けるように下を向いた。
「祐子？　友樹だよ。昔よく遊んだでしょう。分かる？」
夏美が、そんな祐子の顔を下から覗き込んでくる。じっとりと湿った空気が、祐子の顔をさらに赤くさせる。男の人に抱きしめられるのが初めてのわけではない。それでも、この男は昔から祐子をドキドキさせた。
「忘れちゃっているかな。昔、夏休みに遊びに来ると夏美と三人で遊んだだろう？　それにしても、祐子ちゃん凄く細いな。俺の半分くらいしかないんじゃないか？　大丈夫なのかよ。もうその腕なんて折れちゃいそうだ。田舎の女は逞しくてだめだからなあ」

友樹は、そう言い終わらないうちに、夏美に右耳を引っ張られて小さく呻いた。夏美の
身長が高いので、二人の背はそれほど違わない。やせ形の友樹に対して、女の子の割には
がっしりとしている夏美は、似たような雰囲気がある。そしてなにより、二人の息のあっ
た掛け合いが親密さを表していた。言い合う二人に向けて、遠慮がちに祐子は言った。
「友くん、だよね。覚えているよ」
暑いから、という風を装って手で顔を仰ぐ。まさか、こんなに早く会えるとは思ってい
なかった。どこかで期待していなかったとしたら嘘になる。分からないわけがないのだ。
この男は、祐子の初恋の相手なのだから。それを表すように、祐子の声は若干高くなる。
それに気づいたのか、夏美が祐子の方を見たのが視界に入った。祐子は、その視線に少し
だけ敵意を感じた。
「友樹。祐子はね、歌手デビューが決まったんだって！　それで、忙しくなる前にばーち
ゃんに会いに来たんだよ。あんたもサイン貰っておきなよ」
夏美は、友樹の肩に自分の腕を回すと、じゃれるように言った。その姿を見て、祐子は
心臓を抓られたように痛んだ。昨夜、足首を縛られたような感覚が再度襲う。そして、友樹も夏美に何を言うこともない。二人の間では、それは自然な好意なのだと物語っていた。
「ええ！　本当かよ。そうか、だからそんなに細いんだな。凄いな。おめでとう。そういえば、昔から歌も上手かったよな。でも、どっちかというと、俺はモデルのほうが向いていると思うけど」
　確かに、祐子もモデルを志す気持ちがなかったといえば嘘になる。

しかし、ただ歩き回るお人形から歌手への転換よりも、歌でデビューして様子を見てからモデルに手を出すという方が、有効に生き残れると思えた。モデルの会社に履歴書を作成して送っていた母親にその考えを話した時は驚かれたものである。なにせ、それを言った時の祐子の年齢は若干十一歳。世間の子供達は、両親が持ってくるお金がどれほどの苦労をして得たものかさえ分かっていないのがほとんどだ。ましてや、現在の子供は以前より将来に対して敏感だとはいえ、それでも自分がどうやって生き残っていくかなど詳細には想像しない。せいぜい目標とする職業を言うか、どうなれるかを調べるほどで止まるだろう。なったあとのことを考えている者など、一握りもいない。まずは一つの目標を達成することで充分なのだ。他人と比べて自分の秀でた所を探し、狭い競争世界の中で自分の価値の必要性を問うことなど、本当ならば十数年あとにするべきことだ。いや、大学を卒業する前に就職活動をするときでさえ、なかなか明確なそれを見出し、意見することは難しい。夕食時、家族の団らん中に箸を進めている両親に向かって放った祐子のその決意は、初めて両親を奮起させた。それまでも、夢に向かって真剣に練習する祐子の姿を応援していたが、そこまで本気だとは思っていなかったのだろう。結局高校の面談の時までそれは確固たるものではなかったが、より積極的に支援してくれるようになったのだ。実際、祐子が夢を掴む一歩となった歌手コンテストの情報を持ってきたのも両親だった。彼らは、自分の才能を信じるしかない娘に変わって、出来る限りのことをしてくれた。事務所と契約の話しになった際も、そのプロポーションを生かしてモデルやグラビアアイドルの話も出た。大人を相手に、しかも念願の事務所を相手に緊張で固まる祐子に変わって、はっきりとそれを断ってくれたのも母親だ。それも、相手に嫌な思いをさせないように、慎重に。有り難かった。しかし、そんな祐子だ。これから大人の世界で戦わなければいけない。それも、望んでいくのだから弱音は吐かないと決めている。友樹に言われると、モデルも惜しかったな、という考えがちらついたが、祐子

はその思いを断ち切るように首を左右に振った。
「あのね、祐子はモデルじゃなくて歌手。あんた、どうせ変な想像しているんでしょ」
「お前、何を言っているんだよ。俺たちの久しぶりの再会！　はい。お前、邪魔」
　いーっと口を両端に引きながら、友樹はしっっしっと手を振る。そんなことをしたら、姉御肌の夏美が黙っているわけがない。夏美の拳が飛ぶかと思いきや、意外にも夏美は頬を膨らませたのだ。真っ黒に日焼けして、長身。体格も良く、性格もおおざっぱ。そんなことをしても、お世辞にも可愛いとは言い難い。そんな行動を初めて目の当たりにして祐子が驚いていると、さらに友樹が意外な言葉を口にした。
「あーあ、かわいいな。ほれ、じゃあ祭りは三人で行こうか」
　祐子は、初めはその言葉が自分に向けられたと思った。しかし、それは確かに夏美に向けられていた。自分とさほど変わらない身長の夏美の頭を、友樹は優しく撫でる。それを嬉しそうにされるがままの夏美。まただ。二人の間に流れる空気は、もう子供の頃とは違ったものになっている。自分が知らない夏美の顔。仕草。どれもが見たことがなく、見たくもなかった。急に苛立ちがこみ上げる。それを隠すように努力して、祐子は口を開いた。
「ねえ、もしかして二人って」
　この暑さなのに、どうしてか祐子の背筋に冷たいものが走った。風も吹いていない。これは、悪寒だ。
「あ、俺たち付き合っているんだよ」
またもや、意外にも祐子の問いに答えたのは友樹だった。夏美は、恥ずかしそうにはに
かんでいる。それが、裕子にとっては癪だった。ここにもまた自分の知らない世界がある。
勝手に口が動く。
「ああ、そうなんだ。いいね、お似合いだよ」

自分でもわからないほど、内心心臓は破裂しそうなほど高鳴っていた。友樹はそれに気
付かないのか、さらに余計な事を言う。
「ごめんなァ、俺。昔は祐子ちゃんのこと好きだったんだぜ？　もう夏が来るのが毎年楽
しみでね。ある時から急に来なくなったよな。俺、三日三晩枕を濡らしたものさ。あの時
の俺、かわいいよな」
「何馬鹿なことを言っているのよ！　かわいくなんてないんだから！」
すぐに夏美がムキになったように返す。だが、言葉とは裏腹にその顔は幸せそうだった。
自分が失ったものが、そこにはあった。確かに、昔はよく三人で遊んでいた。そして、祐
子は友樹が好きだった。しかし、そんなことは昔の話だ。裕子自身も分かっている。だか
らお願い。心臓、静かになってよ。半分怒りをこめて、自分の胸に頼み込む。今にもそれ
は口から飛び出して来そうだ。
「ねえ、祐子も街に彼氏がいるんじゃないの？　そんだけ可愛いんだもん。こんな猿より、
かっこいいのがいっぱいいるでしょ」
そうだ、それも一理あるのだ。裕子は、この二人を羨む立場ではない。
「うん……。実は、あたしも彼氏がいるんだ」
それは強がりではない。祐子には、嘘でもなく彼氏はいる。もしもこうして二人に宣言をされなかったら黙っていたかもしれない。だが、事実を告げたくなったのは、見栄かもしれない。自分だけが寂しい独り者で、夢だけ叶えても虚しい思いにかられる。本当ならばこれは裕子にとって今思い出したくない人物だ。それでも隠して無

理をするならば、さらに幸せだと見せたほうが自分の価値も上がる気がした。くだらない。数分も経てばそう思えるのに、人の前に立つと無駄なプライドが邪魔をする。
「やっぱりねぇ。いないはずがないよ！　友樹、こういうことだから、諦めなさい」
　夏美は満足そうに笑うと、隣にいる友樹に向かって舌を出した。つられて祐子も笑う。この瞬間だけ笑っていられればいい。これで振り返って顔が見えないとき、たとえその顔が怒っていても泣いていても、人に見せる顔が笑っていればいい。そうやって裕子はここまで来た。三人で笑っているこの瞬間、ほっと安堵が押し寄せるのだ。それもくだらないとまた分かっていながら……。
「それじゃあさ、祭りの準備を見に行こうぜ」
　友樹の誘いに、夏美も手を叩いて喜んでいる。祐子の家に持っていこうとしていた皿は、もう夏美の手を離れ、おっちゃんの車の荷台で転がっていた。
幾ばくかの焦燥感を胸に抱きながら、祐子は脳裏にちらつく一人の男の顔を思い浮かべて頷いた。今、ばばと顔を合わせるのは嫌だった。せめて、もう少し昨夜のことは夢だったと確信したい。
「ねぇ、祐子の彼氏ってどんな人？　同じ年？　それとも年上？」
　夏美は友樹と並んで歩いているが、後ろにいる裕子を振り返りながら言った。蜘蛛の祭りは毎年山の一番てっぺんにある神社で行われる。ということは、祭りに行くのに山に登らねばいけないのだ。無論道は出来ているが、それは決してコンクリートが敷かれた楽なものではない。息が多少なりとも上がってしまう。その質問は、祐子が帰りたくなってきた時に振られたものだった。再び、一人の男の顔が脳裏を過ぎる。山道のせいだけではなく息苦しくなる。
「あ、うん、そう。同い年なの。あたしと同じくアーティストを目指しているんだ」
　裕子は曖昧に頷く。返事をすることよりも、足下にいくつも這っている根っこに躓かないように歩くので必死だ。せっかくの靴も今

ではドロが付いている。
「へえ、それってやっぱり髪を赤く染めたりしているの？　デビューも決まっているの？もしかして、もう芸能人？」
祐子は、夏美のとぎれのない質問に幾分か腹が立った。自分は慣れた道のりかもしれないが、祐子にとっては本当に久しぶりの道なのだ。それに、昨夜の原因不明の足首負傷もある。それを気遣う様子さえも、夏美は見せないのだ。裕子があんなにも怯えていたのを忘れてしまったのか。友樹に会えればそれでいいのか。
　すべてを夏美にぶつけてしまいたかった。だが、それだけではないのだ。もうだめだ。一気にあの男の顔が脳裏に蘇った。祐子の微妙な神経が反応したのは、その彼氏の話題だったのかもしれない。祐子の相手、大介は彼女と同じように夢を追っている少年だ。初めて会ったのはやはりオーディション会場だった。そして、祐子よりも色んな経験がある彼は、同い年とは思えないほど大人びて見え、祐子が好きになるのに時間はかからなかった。思いがけないことに、大介も祐子を一目で気に入ってくれていたようなので、付き合うようになるにも問題はなかった。ただ、それからが問題だったのだ。同じ夢を持っている以上、感情は近いものが常に存在していた。安心感もあった。
　しかし、彼は肝心なところで必要な思いやりを持ってはいなかったのである。それさえも初めは気付かなかったし、我慢すればいいと思っていた。決定的なことが起こったのは数週間ほど前のことだった。大介が、祐子に言った言葉を、彼女は一生忘れないだろう。それを思い出しかけて、また悔しくて唇を小さく噛む。誰にもうち明けず、こっそりと浮かべた涙は、今も祐子の心に迷いとなって漂っている。もう、信用できない。そう分かっているのに、どうして突き放すことができないのだろう。スキ、なのだと思った。彼がいたから、自分はここまで来ることが出来たのだと思う。ただ、本当に心からそう思っているのか、それとも自分に思いこませようとしているのかは、まだ分からなかった。思い出すのは、怒りと同時に

恋しい気持ちがあるのだから。触りたい、会いたいと思う。それならば、好きだということにならないのか。誰とだって、付き合えば苦しいことや悲しいこと、腹立たしいことなどが存在する。数えていたらキリがない。どの恋だって続かない。そう考えると、あんな不満は小さなことに過ぎない気がしてくるのだ。許しても、いいだろう、と。

「祐子？　どうしたの？」

なかなか返事をしない祐子に業を煮やしたのか、夏美がかけ足で後ろへ走ってきて声を

かけた。はっと顔を上げた祐子は、それまでただ一点を睨んでいたことに気づく。それを、

汗で前髪を濡らしながら、夏美が心配そうに見ていた。彼女の黒い肌を見て、裕子は日焼

け止めを塗っていないことを思い出す。こうなっては、デビューに影響するだろうか。日

に焼けないように、また顔を下げる。前髪が陰になって、少しは防げるはずだ。

「ああ、ごめん。ちょっと寒気がするだけ。……なんだっけ？」

なーんだ、よかった。と夏美が小さく呟く。彼女は後ろ歩きなのに、上手に根っこを避

けて歩く。まるで後ろに目があるようだ。そういえば、と祐子は思った。蜘蛛は背後から近づいてきた者にも敏感に気づく。普通の大きさならば、どこが顔かなど確かめる暇などないうちにどこかへ消えるか、始末されてしまう。しかし、昨日のばばは、背後にいた祐子の所作を敏感に感じ取っていた。それは、この夏美の歩き方も同様ではないか。ばばが、蜘蛛の化け物に支配されているかもしれないと言ったとき、夏美は確かに驚いていたはずだ。それはもしかして、ばばの正体を祐子がこんなにも早く当てたことに驚いたのではないか。おっちゃんの様子もおかしかった。急に電話をうけると家から消えたというのも嘘くさい。もしかして、夏美もあの蜘蛛の一

味として活動していたのではないか……？　目の前の友達にさえも、どことなく湧いた恐怖感。どこまで騙されているのだ。考えるだけで、祐子の歩くスピードは遅くなり、止まりかけてしまう。すると、夏美は笑顔で近づいてきて、祐子の片腕を支えるように掴んだのだ。思わずそれを突っぱねそうになって、自分を押しとどめる。あれは、夢だったと、祐子が考え直したと思ってもらわなければ、自分の身が危ないかもしれない。ザッザッと、しばらくは靴が土を蹴る音が響く。蝉の声は、やはり聞こえない。それがないだけで、こんなにも何かが物足りないのだから、人間は季節に生かされているのだということが、よく沁みる。

「おーい。早く来いよ」

先を一人で歩いていた友樹が、目的地に着く最後の石段の上から叫んでいる。やっとここまで来た。十五分は歩いただろうか。神社への最後の仕上げだ。山道が、一つの石段へと続く。五十段ほどであろうか。昔は、よくここでも遊んだ。階段でじゃんけんに勝った人がその文字の分だけ上っていくのだ。グーがグリコのおまけ。チョキがチョコレート。パーがパイナップルだ。裕子には、未だにこの遊びでなぜこの言葉が選ばれたのかを不思議に思う。いつ習ったでもないその遊びで、三人はよく階段を昇っては降りた。都会も田舎も関係ない遊び。その石段は、昔はあんなにも長く見えたのに、今では小さな寂れた石にしか見えない。あちこちに苔が生えているのは、周りが森に囲われていて日が入らないせいであるが、それでも気味が悪い。友樹のところへと駆け上がっていく夏美の後ろ姿を見上げながら、祐子が階段に足をかけた時だった。ゴーンと、大きく鐘が鳴った。その大きさは、何かが爆発したのではないかと勘違いするほどのものだった。それが鐘の音だと分かったのは、幾中にも重なった木霊のような響きと、友樹が興奮したように、始まったぞ、と叫んだからだった。夏美も、そんな友樹の腕に駆け寄ってしがみつく。本当に友樹のことを好きなのだろうことが、表情から窺える。零れそうな笑顔。思わず目を背ける。それと同時に、鐘の音に驚い

たのだろう、何羽もの鳥が一斉に鳴き声を上げて飛び立った。木々にぶつかる羽音が、裕子を責めるように耳を劈く。
その時だった。石段を中程まで来た祐子のつむじの辺りに滴が落ちてきた。空を飛び交う鳥たちが排泄物を落としたのかと思った。しかし、すぐにそれは勘違いだと分かった。その滴はつむじだけではなく、額、頬と濡らしていく。数秒後には、それは大量に注ぐにわか雨となってしまった。夏美が悲鳴のような声を漏らし、友樹が祐子を呼ぶ。雨から身を守るため、三人はすぐに社へと走った。それは、一瞬で走り寄って来た豪雨だった。慌てて屋根の下に入り込んだ時には、すでに目の前は大粒の雨で前が見えないほどだった。隣で話しかけてくる夏美の声も、雨音に飲み込まれてしまう。こういうところは、祐子のほうが頑丈に出来ていた。小さい頃から夢を持ち、強くいなければならないとどこかで思っていたからかもしれない。夏美の強さは、家族を守り、大事な者を守る強さだ。反対に、祐子の強さといえば、一人でいる時にも何に対しても度胸を持つことだった。今まで飛んでいたはずの、鳥の鳴き声はもう聞こえない。耳を塞いでしまいたくなる雨の音の中、すぐ近くで男達の笑い声が聞こえた。
数人の男達が、半袖姿のままで雨の中を三人の方へ走ってきたのだ。すでに頭からバケツの水を被ったようにずぶぬれだ。雨の勢いを内心怖がる祐子をよそに、男達はまるで喜んでいるように豪快に笑う。下駄を履いているが、それはむしろ転んでしまう材料に思えた。祐子は、もう自分はこの地に住んでいたことを、体が忘れていると思った。こんなにも様々なことに拒否反応を示しているのだから。
「あれ。夏美と友樹じゃねぇか！」
先頭を走ってきた年配の男が、三人を見つけて言った。夏美の声が聞こえなかったこと
が嘘のように男の声がする。雨に負けないような大声だ。それに気づいて他の方向へ行こ
うとしていた後ろの二人も、年配の男の後を追うように付いてきた。

六人が、社の下で雨
宿りだ。この年配の男は、この間祐子が山に来た時に、ばばの家に来た時に会っている。夏美が妙に仲良くしているようだったが、祐子はこの小男の名前を思い出せなかった。
「前田さん！　練習していたの？」
夏美が、男に負けないような大声で返す。そうだ、前田だ。祐子は胸の前で軽く手を打
ち、友樹が男に向かって軽く頭を下げた。前田と呼ばれたその男は、一瞬友樹に視線を走
らせ、次に祐子を見た。分かっているが、こう全身を上から下まで
なぞるように見られる
と、嫌な気分だ。こういう小さい村であるほど縄張り意識は高く、
そして知らない人間を
受け入れにくい。体が、一気に固くなる。この間も、祐子に声を掛
けてはくれなかった。
それに気づいた夏美が助け船を出す。
「ほら、祐子。この間、ばーちゃんの所でも会ったでしょ。前田さん、覚えている？　あ
んたが、向こう側の川が増水して溺れたときに、助けてくれた人い
たでしょ」
「あ」
よく見れば、その丸い顔に祐子も見覚えがあった。記憶にある顔に、
かなりの皺が足さ
れていることを除けば、だ。なによりも彼の腕には、祐子を助けた
時に流木で傷つけた十センチほどの長さもある傷が深く刻まれてい
る。
「あれ、もしかして……」
　そのヒントと傷を見聞きして確信を持った。目の前に、水に流さ
れる光景が浮かぶ。助けを求めて口を開くも、入ってくるのは水ば
かり。それを吐き出そうとするも、大量すぎて飲み込んでしまう。

藻掻いて岸まで行こうにも、足は引きずられるように重くて動かない。もうダメだ、そう思い意識も薄れかかった時、目の前に浮かんだのはこの顔だった。心の中で助けを求めたのは、両親の顔だった。しかし、両親が現れたのは夜になってからだ。それまでは、この顔が側にいてくれた。大雨が降ったあとに川で遊んだことを叱ってくれたのもこの人だ。抱え上げられて水から上がった時、流れてきた流木から自分の身を呈して守ってくれたのも両親ではなかった。

「あの、おじさん？」

名前など忘れてしまっていた。小学生の時は、ここに来てもほとんどばばの家か夏美と友樹と遊んでばかりいた。声を掛けてくる大人もいたけれど、ほとんどがただの「おじさん」「おばさん」で片づいたのだ。

「お、思い出してくれたか。この間はどうもな」

普通に話して聞こえる雨音ではないので、こんなにも久しぶりの再会でも怒鳴り声なのに笑ってしまう。それでも、どこか嬉しかった。こうして自分の存在を覚えてくれている人がいるというだけで、ここに来て良かったと思えた。今まで、夢に向かってまっしぐらに走ってきた。色んな人に出会い、話を聞いた。でも、それはやはり安らげる物ではなかった。なぜ、こんなにもほっとするのだろう。

「ほら、早くこの中に入ろうよ。風まで吹いてきたよ」

今や雨だけでなく、夏美の言葉通り強い風までが吹き始めた。ごうごうと山が泣いている

るような音が辺りに響く。地面にはいつの間にか水だまりが出来ているが、その側から雨

が落ち、土が混じり泥水だらけになる。帰りは、来た時よりもっと大変そうだ。そう思い

ながら、祐子は夏美を初め、数人が吸い込まれるように入っていった境内の中へと付いて

いった。中には、想像以上になにも存在していなかった。仏像や神輿も置かれているが、

それは大して場所を取っていない。ほとんど手入れをされていないのか、あちこちが埃をかぶっている。祭りも近い。それなのに、こんなにも準備不足で大丈夫かと若干心配になるほどだ。

「夏美ちゃん、ほらこっちにおいで。ここに座るんだよ」

先に入っていた前田が、中から夏美に呼びかける。やはり、長年村にいなかった祐子よりも、夏美らしい。ちやほやされるとは思っていなかったが、多少のジェラシー感が胸に湧く。幼少時代は、こんな時声をかけられるのは自分だったはずなのだ。前田の方へ歩いていく、夏美の後ろ姿を恨めしく見つめる。山の向こうからはゴロゴロと雷の音まで聞こえる。夏になると、どこも夕立ばかりで嫌になる。ため息をつきかけた時だった。一瞬の稲妻が社の中を照らした。その光で、夏美の肩に一本の糸が付いているのが見えた。すぐに大地を震わす程の雷鳴が轟き、社の中に悲鳴が上がる。だが、祐子はそれどころではなかった。夏美の肩にある糸が気になって仕方がなかった。それは透明というほど綺麗ではなく、目立つほど確かなものではなかった。しかし、昨夜祐子が恐怖を感じたものに間違いなかった。声を上げそうになるのを我慢して、その頑丈そうな糸に目を凝らそうとした。

雨が降っていたのだ。肩も少しは濡れている。それなのに、その糸は乾いた絹のように一本輝いて見えた。雨に濡れても平気なのか……。それとも、今ここに入ってから付着した

のだろうか。どっちだ。
「おい、祐子。どうした？　濡れただろう、これで拭けよ」
そう声をかけられて祐子が振り向くと、そこにはタオルを持って笑う友樹がいた。ちら
り、と夏美が振り返るのを視界におさめる。しかし、前田達が彼女のことを離さないよう
だ。台座のようなところに座らせて、祭りの知識をひけらかしている。ふふん、と鼻白む
と祐子は友樹に笑い返した。そして、その手からタオルを受け取る。
「ありがと。でも、よくこんなの持っていたね。助かっちゃった。足も痛いし」
友樹の手に軽く触れると、彼は驚いたように祐子を見た。夏美にも、あまり触れてなど
いないのだろうか。都会の男ならば、自らべたべた触ってくるというのに、これがまた新
鮮な気分になる。
「あ、ああ。ここらへん山だからさ。天候が不順なんだよ。って、覚えてない？　小さい
頃も三人で遊んでいて雨が降るとここに隠れたんだよ」
不思議と、子供の頃の記憶をたぐりよせても祐子は覚えてはいなかった。困った表情を
作り、首を傾げる。足が冷えないようにと濡れた靴を脱いだ。
「そうなんだ。それにしても、すごいね。雨」
友樹が入り口のドア側の床に座り込んだので、祐子もそれに倣ってしゃがんだ。下もズ
ボンなので汚れる心配はあるものの、恥ずかしがる必要はない。なるべく男の目線でかわ
いらしく見えるように足を組んで座ると、祐子は軽く友樹の腕に触れた。その腕は逞しく、
昔の折れそうなそれではなかった。思わず勝手に手が伸びていた、

というのが正しいかも
しれない。
「そ、そうだな」
もぞもぞと胡座をかきながら、友樹は額をかいた。背中に鋭い視線を感じる。それが、
雨音に重なって、少しだけ圧迫感が増すと同時に、どこか興奮してくる。友樹にこれ以上触れば、夏美はどうするだろう。さきほどの蜘蛛の糸も気になる。あれはなんだ。この村全体が蜘蛛に操られている気がしてきた。
「ねぇ、夏美ってさ。蜘蛛のこと、スキだっけ？」
惚けた表情で外の雨を見つめる友樹に、祐子は言った。なるべく耳に唇を近づけて。話しかけた途端、友樹の耳がみるみる赤く染まっていく。
「え？」
ぱっと祐子の方へ顔を向けると、今度は唇がつきそうなほどに近い。祐子には思い通りだったが、友樹は咄嗟に身を引いた。奥では、前田達数人の笑い声が響き、祐子達には見向きもしないようだ。
「だから蜘蛛、だよ。蜘蛛」
わざともう一度上半身を寄せる。友樹は、そんな祐子の行動に気づかない作戦に出たの
か、さも不思議そうな顔をした。もう一度額を掻いている。その手が小刻みに震えている
のを、祐子は見逃さなかった。
「さぁ？　どうだろう。苦手じゃないけど、スキでもないと思うけど。なんで？」
「あ、さっきね。夏美の肩に蜘蛛の糸が綺麗に引っかかっていたよ。ずっと気がつかなか
ったの。それにこの祭りも蜘蛛でしょう？　村の人って蜘蛛に関心があったりするのかと
思って」

夏美の体から出てきたという憶測は、さすがに言えなかった。すると、友樹の視線が宙を移動した。少しだけ声が大きくなる。
「ああ。じゃあそこの蜘蛛の巣に引っかかったんだろ」
そう言う友樹の指す方には、壁に数十センチの蜘蛛の巣が張っている。微かにそれは壊れていて、誰かの肩に引っかかっていてもおかしくはない。しかし、その糸は、彼女の肩にあったのとは違うように見える。
「ねぇ、夏美が蜘蛛かもしれないよ」
祐子が、口角が上がりそうなのを堪えて友樹の耳元で囁くと、彼は一瞬驚いたが、次には声を出して笑った。雷鳴が響き渡るのと、友樹の笑い声が重なる。もしも、ここに一人で置き去りにされていたらどれだけ心細かっただろう。「あの男」ならそれくらい平気でする。だが、今祐子は一人ではない。雷の音を忘れさせてくれるほど近くに、友樹がいる。
忘れていた記憶のピースが、また一つ戻されていく。友樹の笑ったえくぼに、再び手を伸ばしたくなる。
「あはは！　蜘蛛って、夏美が？……確かに乗り移っているかもな」
「え……？」
まさかの返答だ。大きく声を上げて笑った友樹が、すぐに真顔になって言った。普段近くにいるだろう友樹も、異変を感じているということか。それならば話が早い。もし、友樹がまだ安全のラインにいるのならば、二人で逃げるというのも理想ではないか。あまりにもうまい展開に、祐子の声が上擦る。

「や……ぱり？　そうだよね……」
今度は友樹が顔を寄せてくる。それに祐子が心を奮わせた時、友樹の顔に笑顔が戻った。
祐子の鼻の頭を人差し指で軽く押して言う。そこには、夏美との間に匂わせる親密さは消
えていた。たとえ話していても、夏美の話題。祐子と友樹、二人の間に共通点はもはや見
つけられないのだ。
「そうさ。だって、今回の捧げ者が夏美なんだからな。多少乗り移ってもの不思議じゃない
さ！」
空気を壊されたようで、展開に困惑する祐子に、再び嫌な話題が降ってきた。捧げ者。
蜘蛛の伝承を聞いた時に、確か話してくれた由緒ある役柄のことか。
神妙な顔の祐子を遮るように、友樹がまた笑う。
「え？……捧げ者？」
きょとんとした祐子の肩に重い物が乗った。首だけ動かして見ると、そこには夏美の顔があった。彼女は、わざとらしいくらいの笑顔を友樹に向けている。
「ねえ、二人で何を話しているの！」
もしかして、話を聞かれていたかと一瞬慌てたが、夏美は内容まで聞こえなかったようだ。いつの間にか、雨の音が収まってきている。祐子がどう答えようかと考えていると、すぐに友樹が答えた。
「いや、お前が蜘蛛の女ってことだよ」
友樹はこともなげに言うと、にっかりと笑う。一瞬顔をしかめた夏美は、話の内容を察したのか友樹の胸を軽く叩いて言った。
「前田ちゃんが呼んでいる。あんた、神輿かつぐんでしょ」
そう言うと、友樹の背中を奥へと押した。
「おお、忘れていたぜ」
友樹はぺろりと舌を出すと、祐子の方も見ずに駆け足で行ってしま

う。彼が歩いたとこ
ろが、床の埃を消して足跡を残す。帰ったら、昨日のように洗わず
にごまかせないな、と
祐子は足の裏を見た。案の定、かなり汚れている。その作業は、夏
美と顔を合わせない口
実でもあったのだが、彼女には通じなかったようだ。
「蜘蛛の女って、友樹も馬鹿だよね。話聞いちゃった？」
　その話し方には、鋭いトゲがあった。高見から見下ろされている
ようなそれに、祐子も
落ち着いた声を出すように努める。友樹が入ってきてから、二人の
間には線が引かれたよ
うによそよそしくなった。友樹と付き合っていることを主張したい
夏美は、祐子と線を引
きたがる。しかし、同性という区別に置かれては、祐子と夏美が同
じテリトリーに属する
のだ。線が引かれるのは、友樹の間にだ。だが、はっきりさせたい
こともある。まさか、
夏美があれに選ばれたというのか。
「夏美、蜘蛛の捧げ者って？　まさか、あの……」
「そう。そんなことも忘れちゃった？　村の娘の心臓を奉るのよ。
でも、別にただの儀式
的なものよ。ただ、祭りの夜一晩だけ社の前に置かれた台座に寝て
ればいいだけよ」
再び、祐子の胸がぎゅっと縮まる。蜘蛛の捧げ者は、村の娘が捧げ
られる。それは村の
人間によって選ばれるのだ。近年村の人口、富に若者は減少してい
る。その中で選ばれる
のだから、その年代が少なければ少ないほど確率は高くなる。だが、
その儀式が行われる
のは五十年に一度。その由緒あるものに、目の前の夏美が選ばれた

というのだ。また、自
分の手に入らないものを、夏美は持っている。
「夏美。何年も会っていなかったから仕方がないんだけど。あたしに何か隠し事、してない？」
恐る恐る問いかけると、夏美は首を傾げて言った。
「隠し事ね。……どんなこと？」
聞き返すそれに、先ほどまでの覇気はない。とぼけているのか、本当なのか。
「なんか変化があったみたい。自分で気づいているの？」
蜘蛛の糸が、キラキラとその肩で主張するように光っている。祐子はその一点を見つめた。夏美は、もしかしたら、線を飛び越えて向こう側にいってしまったのかもしれない。
どうすれば確認できるのか。
「祐子。変わったのはあんたの方だよ。私こそ分からないと思う？」
「……なによ。なんのことよ。」
二人の間の空気が張りつめる。しとしとと降る雨の音と前田達の騒ぐ声が邪魔だ。稲妻
が、夏美の視線をより鋭いものへと変える。祐子の喉で唾が止まる。それを意識して飲み
下すと、夏美が意を決したように口を開いた。芸能界という道を選んだ自分は、人と違う
生き方をする覚悟を決めたつもりだ。それは、周りと境界線ができることだと分かってい
た。それでも、自分を信じてくれる人間は変わらないと思った。自分でも気づかないうち
に態度に出てしまっていたのだろうか。今、目の前にある視線は、昔悪いことをすると母
親のように小言を言った夏美の目だ。

「おおーい。夏美！」
今度は友樹が夏美を呼ぶ。いつの間にか、祐子が呼ばれることなどなくなっていたのだ。
お客、として帰ってきたこの村で、居場所がなくなっていることにまた、心がちくりと痛む。街で生まれたことも、ここに遊びに来ていたことも後悔していない。夢を掴むなら都会でなくては駄目だった。それを手に入れ、初めから持っていたものまでも維持したいというのは我が儘なことなのか。願わなければいけないものなのか。
たった一日前に感じた、帰ってきたという安心感は煙のように消えてしまった。夏美が友樹に笑顔で頷くと、祐子の側で立ち上がった。そして、その顔を崩すことなく祐子の耳元へ寄せる。
「お願いだから、友樹に余計なことはしないでよね」
はっとしてその顔を見ると、目が笑ってはいなかった。足下から冷気がはい上がってくるようだ。雨で濡れた服が、肌にまとわりつく。それを指でつまむようにして肌から離しながら、祐子は自分がお祭りに参加するべきか迷った。壁に寄りかかり、奥の数人を見る。夏美が台座に座り、彼女の頭を愛おしげに友樹が撫でている。そして、その周りを囲むように数人の男達。誰も、祐子の方を見ない。無性に胸が苦しくなった。しかし、悲しいはずなのに、目元を触っても涙は出ていなかった。奥の人間には気づかれないように、そっと扉を開ける。意外にもすんなりと開くそれは、音もせずに静かだった。するりと体を外へ出すと、雨足も先ほどよりはマシになっている。傘もない。タオルも中に置いてきてしまった。一瞬迷ったが、雨の降る地面へと、一歩足を下ろす。もうすでに心もびしょ濡れだ。今更外見がどうなろうと、いくら醜くなろうと関係なかった。むしろ、とことん濡れてしまえば何かが吹っ切れる気もして試したくなる。この虚しさをどうすればいいのだ。どんなに喉を守ろうと必死になってきたかも、ここでは無意味だ。歌などそれほど必要ではなかったのかもしれない。祐子は、ただ、一人来た道を無言で下った。そのあとを、誰かが追ってきてくれることもなかった。

5　死

雨に濡れて帰った祐子を、ばばは慌てることなく迎え入れた。そして、何も聞こうとはしなかった。温かく迎えられたが、全てを見透かされているようで、その後は体が震えた。雨に濡れた寒さからだけではない。蛛の一匹一匹がばばの子分で、全ての行動を報告されているような気になったのだ。あり得ない、たとえそう思っていたとしても。

祐子が戻った時には、夏美のおっちゃんの姿も家からは消えていたが、それでも彼を怪しむ気持ちは消えることがなかった。むしろ、夏美の態度や蜘蛛の糸を考えると、さらに気味が悪くなったといっても過言ではない。友樹は夏美の味方であろう。祐子は、頼る人間がいなくなってしまったような孤独感と寂寥感に蝕まれていくのを感じた。ご飯を食べていても、その味を感じられない。常に緊張しているからか、口は渇く気がするし、妙な不安感が心を支配する。暑苦しい午後、縁側で寝そべっていても、ばばの姿が庭を横切るといきなりそれは押し寄せるのだ。自分でもコントロール出来ずそれは襲ってくる。このままではおかしくなってしまうのではないか。自分の身に危険が及ぶ前に、自分の精神に異常を来してしまうのではないかと心配になる。そして、それがさらにばばの目的ではないかと思ってしまう。こうして、精神がいかれてしまうのを期待されているのではないかと考え、恐怖心にかられる。そしてその数秒後には、ばばがなぜそんなことをするのか、と馬鹿馬鹿しくなって収束を迎える。蜘蛛に取り憑かれているからか。そんな気持ちの振り幅が、どんどん大きくなるたびに、どっと疲れるのだ。その一連の作業の後には、必ず心臓は大きく脈打ち、体温の上昇も感じられるほどだった。この症状を抑えるためにも、一刻も早く家に戻りたかった。祐子は、祭りが終わった次の日にはすぐに山を下りるつもりでいた。その時の祐子は、これから悲惨な事件に巻き込まれていく

とは考えるよしもなかった。
祭りの前日、祐子は昼食を食べ終わると一人二階へと向かった。夏美とは、あの社での一件以来顔を合わせていない。友樹の自宅も知っているが、彼は仕事に行っていることだろう。それ以外にここで同世代の友達はいなかった。森へ一人で遊びに行くこともない。家でばばと始終顔を合わせていても息が苦しくなる。居場所に困った祐子は、二階の物置で時間を潰すことにしたのだ。物置なら、祐子の私物も置いてあるはずだ。アルバムや使用していた小物を眺めて昔を思い出そうとした。少しでもその時の気持ちが蘇れば終わり良く街へ帰れる気がした。やはりせっかく会いに来たのだ。楽しい思い出を作って帰りたい。階段は一番日が当たらず、家の中で一番薄暗い。新興住宅街の一軒家が持つような真新しい蛍光灯とはほど遠い、薄暗がりの電球がぶらさがっている。一段上る度に床が軋み、家が古いのか、自分の体重のせいかを疑問に思う。一番上まで行き、ずっと締めっきりだった雨戸を少しだけ開けると、一階ほどではないがそれなりに明るくなった。ばばは年を取るに連れて二階に行くことを億劫がるようになった。腰と肘が痛いせいだが、おかげで二階一体の匂いがなんとなく籠もっている。周りが家のことを助けてくれるとはいっても、夏美はここまでは来ないのだろう。網戸にすると、今日は涼しい風が入ってきた。その窓からは、あの社も見える。すでにやぐらが組み立てられ、見かけない顔が家の前を通ったりする。額にあったニキビも、昨日の夜風呂に入る時には消えていた。それを確認するように額に手をやると、祐子は一部屋しかない部屋の襖を開けた。そこは想像した通り雑然としており、祐子は部屋から放たれる、饐えた臭いに鼻を摘んだ。そのまま足を踏み入れれば、体中がかゆくなりそうだ。ポケットにいれておいた靴下を履くと足は蒸れるが仕方がない。虫に刺されるよりはマシだろう。部屋に入ると、そこには思い出のものがたくさんあった。小さいときの祐子が写真立ての中で笑っていたり、初めてここに泊まった夜、眠れない祐子にばばがくれたクマの人形もある。他にも子供用の椅

子や、おもちゃの電話、空の金魚鉢などが所狭しと置かれている。その一つ一つを見ていると、いかにばばが祐子を飽きさせないようにと手を尽くしていたかが窺える。手に取るには憚れる。思い出に浸るには、ばばと一緒がよかった。ばばも夏美も隣にいない今、一人でそれで懐かしむ気持ちはない。なぜここに来たのかと言えば、単に暇つぶし。それだけだ。いや、そう思いたいのだ。頭ではそう思っているのに、心は悲鳴を上げる。左胸の辺りを誰かに押されているように息苦しい。思い切り息を吸い込み、頬に手を当てて自分を落ち着かせようとする。ぎゅっと目を瞑り、今度は大きく息を吐き出す。それだけで少し気分は良くなった。

壁際の本棚を見ると、そこにも祐子の昔読んだ絵本が並べられている。海外のものから日本のものまで。こんな森の中の村に住むと、街の自宅のリビングで読むよりドキドキした。七人のこびとがやって来るのではないか。森の奥では、豚がオオカミに食べられないようにと家を造っているのではないか。そんな妄想を楽しむことが出来たのだ。そんな小さい頃の自分を思いだしてクスリと笑うと、本棚の一番上の段にある古ぼけた図鑑が目に入る。—昆虫図鑑だ。先程までの気持ちはどこへやら、自然にそれに手が伸びた。真っ黒な革表紙に、仰々しいまでの金色で題名が飾られている。祐子の記憶にある限り、こんな物は目に入れたことがない。大抵の物は、表紙にトンボや蝉、カブトムシの絵が書かれているがそれもない。本を取り出すと棚から埃が舞った。本自体も埃を被って白くなっている。それを人差し指でなぞるように触ると、指先には埃の固まりが乗った。ふーっと息をかけると、表紙がそれなりに綺麗になる。おかげで本は触れる状態になったかに見えたが、舞った埃のせいで何度か咽せる。くしゃみが出そうになるのを、鼻を摘んで抑えた。こんなところでくしゃみをしたら余計にほこりっぽくなるのは必至だ。しばらくして収まった確信を得てから、祐子は再び本に手をかけた。ゆっくりと表紙を捲る。それは普通のハードカバーの表紙の三倍はありそうな厚さで、その一枚だけでもかなりの重さがあった。実に

図鑑だけでも赤ちゃん一人分は優にあるかもしれない。本の外見は多少黄ばみがあるものの、開いてみればそれなりに綺麗なものだった。一度も開いたことがないのではないかと思うほど、紙は白く手を切りそうなほどだ。実際、誰も見たことがないのかもしれないと、祐子は思った。昔から祐子は虫が嫌いだし、唯一興味がないのが昆虫採集だ。カブトムシやトンボなどはまだ近くに寄れるが、蛇や蛙の類は以ての外だ。たとえ絵や写真でさえ、目に入れれば寒気がするほどだ。ページを捲っていると、祐子が苦手とするその部類が否応もなく次から次へと現れた。げっと声を漏らすも、祐子はふと思いついたことがあった。昆虫図鑑ということは蜘蛛についても載っているだろうか。もしも人を呪う蜘蛛でもいるならば、それは毒蜘蛛なのか。ばばの身体には黄色い線が入っていた。あれは模様だろう。

蜘蛛の目次を見ると、その種類は膨大だ。絵で確かめるのは避けたい所だが仕方がない。覚悟を決め、ページの右下にある数字で、蜘蛛の場所を確かめる。蜘蛛についてなど調べる必要などないが、気になってしまう。もしかすれば対処法があるかもしれない。そうなれば、あの小さい蜘蛛達も家に入って来ないように出来るかもしれないと思った。一石二鳥。そう思って勢いづいた行動も、次の瞬間には後悔した。ページのあちこちに様々な蜘蛛が並び、じっと祐子を睨み付けているようだ。その視線に嫌悪感を残しながらも、祐子も負けじと見つめ返す。それは大人が読む専門書に近い形の内容で、蜘蛛の姿はやけに大きいくせに、説明書きが小さい。目を凝らして文字を追いながら、出来るだけ蜘蛛の全体像を捕らえないようにする。何個かの写真を見ているうちに、腹部の模様が似ている蜘蛛がいた。

「ジョロウグモ……」

名前だけは知っている。しばらく見ているとだんだん目が慣れてきたのか、目を逸らさなくても平気になってきた。ジョロウグモの腹部の模様は、見れば見るほどばばの腹にあったものとそっくりだ。

その弱味を探そうと、身体の構造について書かれている部分に目を付けた。理科の授業では、ここまで詳しく教えてくれない。せいぜい蜘蛛の足が何本でそれはどこから生えているものなのか、くらいだ。その図鑑には、それ以上の事が書かれている。祐子は食い入るように読み込んでいく。だが、一文を読むごとにその中の一つの単語に悩まされることにもなる。

―日常的に虫といわれる蜘蛛は、節足動物門六脚亜門に属する昆虫とは全く別の部類に属するものである。

「六脚亜門？」

この単語にぶつかり、一番後ろに書かれた目次に行き、六脚で検索する。それについて書かれているページへ飛び、その意味を知る。

「あー、昆虫の足が六本ある部類ね」

納得するように一人呟いてから、その先へと進む。

―昆虫との主な区別は脚の数が八本であること。頭部と胸部の境界が明確ではないこと。触角を欠くことなどが挙げられる。身体は六節の頭胸部と節が癒合した袋状の腹部からなり、両者は細い腹柄によって繋がる。

ここまで来ると、それを確認するように写真を見た。確かにその顔は異様に小さくて、胸に目が生えているようなものだ。可愛いとはほど遠く、その滅多にない気味の悪さが人々に忌み嫌われやすい所以のような気がしてくる。思わずその顔だけを人差し指を当てて隠してみると、なにやら大分印象が変わった。やはり、顔がいけないのだ。そういえば、あの時のばばもそうだった。胸と顔に首は見当たらなかった。それよりも尻の膨らみに目がいったことを思い出す。あれは何が入っていたのだろう。そして、祐子を飲み込むときに見せたあの大きな口と鋭い牙のようなもの。糸で脚を固められたあと、飲み込まれていく自分の下半身を見ながら、恐怖に戦いた。その光景を思い出して、ぶるっと身体を震わせる。一瞬でばばへの恐怖が蘇り、この家を立ち去りたい思いに駆られる。それでもそんな自分を抑え込み、祐子は自分に言い聞かせるのだ。今街へ帰れば、

早く帰った両親が不審に思う。蜘蛛が追いかけてくるかもしれない。それならば祭りが終わるのを待つのが得策なのだ、と。

―前体部には四対の歩脚と一対の触肢、口には鎌状になった部分もある。頭部には八つの目が二列に並んでおり、その配列や位置は分類状重要な特徴となっている。網を張らずに生活する蜘蛛では、そのいくつかが大きくなっていることもある。紫外線を見ることも可能。

「げっ。紫外線も見られるって？　目が八つもあるの？　うえー」

だが、その目があるからこそ、ばばはあんなにも早く祐子が目覚めたことに気づいたのかもしれないと納得する。そして、その次の腹部についての記載事項がさらに祐子を納得させる結果となった。

―腹部は外見上の体節がなく、外骨格は柔らかめで、全体的に袋状になっている。腹部の裏面前方には、一対の書肺という呼吸器官があり、その間に生殖腺が開いている。腹部後端には数対の出糸突起がある。その後ろに肛門と続く。これは普通の蜘蛛の場合であり、キムラグモ類など下等な蜘蛛類では若干の違いがある。

そこまでを読んで、祐子は自分の腹部に手を当てた。あのとき、ばばの腹部から尻にかけては異様に膨らんでいた。おそらく普通の蜘蛛の部類に分類されるもので、あそこには肺があったというのだろうか。この説明通りだとすると、ばばは蜘蛛になった時には構造上の点からしても人間の身体を失っているということだ。そうなれば、なぜ顔だけがばばのままだったのだろうか。いや、あの口の中は人間の物ではない。全てを乗っ取られる寸前なのかもしれない。どうすれば助けてあげられるのか。そして祐子自身の身を守れるのかとヒントを求める。そして次の欄へ目を移す。

―心臓は細長く腹部背面にあって、前の端からは前行動脈、両側には側腹動脈、後ろへは尾行動脈が出る。心臓の側面には心門があり、ここから体腔を流れる血液が取り込まれる仕組みになる。心門は普通の蜘蛛なら三対、心臓の周囲にはさらに対をなす心靱帯があり、これが心臓の動きに関係していると研究されている。

これ以上は無理だった。読めば読むほど頭の中の線がからまり、言葉だけの羅列で理解が出来ない。祐子は一旦本を閉じると、頭の中を整理した。つまり、肺も心臓も腹部にあるのだ。もしも何かが起こった場合は腹部を攻撃すればいいということだ。全ての重要な器官はそこにある。それだけが分かっただけでも充分だった。それから数行は、まだ蜘蛛の身体の構造について述べていて、さらに難しい言葉が並んでいた。これ以上その構造を知って蜘蛛博士になるつもりなど到底ない祐子は、その細かい字を飛ばしてペラペラとページを捲った。一番気味が悪かったのは、蜘蛛の解剖された図だった。これでは子供になど見せられるはずがない。もう一ページ捲ると、今度は簡単な図とともに蜘蛛の習性についてが載っていた。基本的に蜘蛛は陸上の動物であること。ほとんどの蜘蛛類が単独性で、それは肉食性によるものだということだった。肉食、という単語に祐子は鳥肌が立った。

その肉食というのも、自分と同じ大きさのものなら食べてしまうというのだ。ばばと祐子の大きさはさほど違わず、それもあり得る話だ。ただ、耕作地圏においては、それ故に重宝されているという。人家の内外にも多くの種類が生息し、衛生害虫という、主にハエや蚊、ダニ、ゴキブリなどを補食させるのだ。これを理解している人は、居宅や身の回りに蜘蛛が見られても気にすることはないことが多いようだ。それなら、この地域にも言えることだ。住人は穀物を作っているし、益虫を気にしているように見えない。祐子が蜘蛛を気味悪いと思うのは街で生活していて、常にテレビで害虫と扱われる虫の殺虫剤を見て、忌み嫌う周りの大人を見て育ったからだ。あの数本の脚を交互に動かし、一瞬で壁と物の隙間に入り込む速さのせいだ。こうして調べてみれば、毒蜘蛛などはあの有名なタランチュラや近年日本でも取り沙汰されるセアカゴケグモくらいで、ほとんど無害だ。むしろ、人間が無理矢理捕まえようとしなければ、蜘蛛の方から逃げるようだ。言ってみれば、蜘蛛より多く夏に身近にいる蚊のほうが、いつでも人を刺すし、病気を持っている確率もあ

る。よっぽど危険である。
　随分長い間蜘蛛を見続けていたせいか、顔を上げると後頭部を引っ張られるようにふらついた。本を棚へと戻し、埃のついた両手を軽く叩く。そして本を読んだことで少しだけ滅入った気分を晴らそうと、窓越しへ近付く。先程と全く変わらない天気が太陽の光を寄越す。その光を顔に浴びていると、無意識に溜め息が漏れた。こんなことをして何になるのだ。急に虚しくなって、外へ飛び出したくなる。こんな家の中にいるから、マイナスなことを考えるのだ。ばばがまた蜘蛛になるとは限らないではないか。それは慰めにもならない考えだったが、少しでも自分を欺きたかった。知らぬ振りをしていたかった。ばばがここへ来ることはないだろうから、祐子がこの図鑑を読んだことを知られる恐れはないだろう。おそらく、この夏の間は。祐子は、そんな全ての感情を振り払うようにその部屋を後にした。社にはやぐらが出来ているが、そこには近付きたくない。それならば、少しだけ山を下ってみようか。たしか、少し森に入ったところに小川があったはずだ。そこで夕涼みでもしよう。祐子はその考えに満足すると、一人鼻歌を歌いながら階段を下りた。階段の天井からは、一匹の小さな蜘蛛がじっと祐子を見下ろしていた。
「ばーちゃん、俺なら大丈夫だって」
　祐子が一階に下りると、なにやら声が聞こえた。耳を澄まして聞いて見ると、それは覚えのある声だった。そう、ついこの間社で聞いたばかりだ。階段の陰から身を隠して玄関の方を窺うと、そこにはあの前田が立っていた。まただ、あの男はなぜ祐子の家に頻繁に訪れるのだろう。
「だけどあんた、顔色も悪いじゃないか」
　ばばは、前田の顔を覗き込むようにしながら言う。そして、まるで自分の子供にするように額に手を当てたのだ。まさか老女が中年の男にする行動とは思えないだろう。見ている祐子にも寒気が走った。あの二人、どういう関係だというのだ。さっと顔を引っ込めると、高鳴る心臓を押さえにかかる。

「ちょっとやめてくれよ。とにかく心配ないんだ。きっと無事に終わるよ」
前田の声が後から追いかけてきた。暗がりの中、祐子は二人の関係を考えていた。無事に終わるというのは、あの儀式についてなのだろうか。なぜ、ばばがあんなにも心配しているのだ。ばばは、祐子が来た日も以上に反応していた。そして、思い出して見ればあの時も前田のことを異様な目つきで見ていたではないか。そうだ。あの二人は儀式でなんらかの結びがあるに違いない。だが、それは何だというのだ。前田は、祐子にとっても名前を忘れてしまうほどの存在で、ただ同じ村に住んでいる住民というだけだ。祐子の父親の幼なじみとも聞いたことがない。若干前田の方が年上だろう。ばばがここに一人でいる時、助けてくれているのだろうか。いや、それならば夏美の父親のほうが身近な存在であるはずだ。その男に対しても、ばばはあんな風には接しない。それ以上に何があるのだ。訝しげにもう一度そっと顔を出すと、二人は玄関に下りていた。ばばもサンダルを履いて、前田の背中をそっと押すようにして二人で外へ出ていった。玄関のドアが閉まると、家の中は再び静かな空気が溢れる。
「何よ。何が起こっているっていうの」
祐子は、一人汗ばむ拳を握りしめ、その場にしばらく立ちつくした。

＊

夏美は、朝から一通りの家事をこなした。普段から、夏美の一日は目まぐるしい。父親を起こして布団を畳み、朝ご飯を食べさせる。それでも眠そうに目を擦る子供のような男の尻を叩いて仕事に追い出す。そのあとは、食べた食器を洗い、家の中に掃除機をかける。洗濯機を回し、玄関を掃く。それだけでも午前中が潰されてしまう。季節事の衣服の入れ替えや、普段出来ない場所の掃除、父親に弁当

を届けて、帰ってきたら洗濯物を取り込んで、夕飯を作る。汗だくで帰ってきた父親の風呂の準備をして、夕飯を食べさせて、また片づける。愚痴を聞いてあげる時も、肩を揉んであげる夜もある。そうして一日、一ヶ月、一年はあっという間に終わるのだ。

こんな生活を、不満に思ったことはあまりない。生まれてすぐ母親は死んだと聞かされ、家を切り盛りするのは当然だと教えられた。危なっかしい父親も心配だし、今まで助けてくれた祐子のばーちゃんに恩返しもしたかった。都会にそれほど興味もなかったし、将来に大きな夢など抱かなかった。平凡で幸せな家庭を持てればそれだけで満足だと思えた。この村で生まれ、その土地で死ぬ。何代繰り返されてきたことを、自分を引き継ぐだけだと思っていた。山の麓の学校へ下りていた頃は、周りが進路だ、上京だと騒ぐのを見て羨ましく思った時もそれなりにはある。だが、バスに乗って山の上まで帰ってくると、自然とその考えは忘れてしまうのだ。お前の住む場所はここだ、と山に言われている気がした。そうすると、コンクリートの上を歩くことさえ苦痛に思えてしまう。だから、これでよかったのだ。

「おい。夏美―」

ベランダで洗濯物を干していると、家の庭から友樹がこっちを見上げていた。夏美は自分の手に持っている下着を、危うく落としそうになって慌てた。友樹に見えないように背中に隠し、叫び返す。

「どうしたの。友樹、あんた仕事はー？」

その夏美の返答に、一瞬しかめ面をしたあと友樹がまた叫び返す。その私服の姿を見ても仕事はあるはずだ。

「抜けて来たんだってー。こっちに用事があったからさ」

そういう彼はニヤッと笑った後、くいっと口元で手を動かす。その意味はすぐに分かった。夏美はベランダから身を乗り出すと、玄関の方を人差し指で差した。友樹は一つ頷くと、そそくさとそっちへ消えていった。完全にその姿が見えなくなると、夏美は背中に隠していた下着をベランダの隅に干す。その周りをバスタオルで囲み、

見えなくした。腰元に付けていたエプロンをはずすと、階段を下りる。一階の居間に戻った時には、友樹がすでにお茶を入れていた。
「お、干し終わったのか？　今日はいい天気だからすぐ乾くんじゃないか？　今お茶入れてるから座れよ」
　友樹が言っていたのは、一杯お茶を飲ませろ、という合図だったのだ。昼間仕事の合間を縫って、時々こうして遊びに来る。いつでも会える距離にいるのに、この男は必要以上に寂しがり屋だ。こたつの上でポットから急須にお湯を注ぐ彼の手元を見ながら、夏美はその寂しがり屋の男に言った。
「ねぇ、友樹ってさぁ、村を出たいとは思わなかったの？」
　そう聞くと、友樹は一瞬驚いた顔でお茶を注いでいた手を止めた。数秒してから、ゆっくりと夏美の方を見て首を傾げる。
「何、お前。急に？」
　その真っ直ぐな視線に、今度は夏美が目を逸らす。自分がここにいることを、誰かに認めてもらいが為に彼に聞いたことは、内心夏美自身にも分かっていた。街の祐子が久しぶりにやって来た。その余りの可愛い姿に、一瞬羨ましさを覚えたことは嘘ではない。だが、父も友樹もここにいる。自分がここで必要とされている。ここが居るべき場所なのだ。それを確かめたかった。
「だって祐子、見たでしょ？　あの子昔から綺麗だったけど、あんなに細くもなかったし自信も持っていなかったじゃない。夢を持って、一生懸命生きているとああなるんだなって思ったんだ。私は、この村で生活していてこのまま年をとっていければ幸せだと思う。でも、友樹は男の人だし、でっかい野望があるなら街へ行きたくなるときもあるのかなぁって……」
　夏美が話している途中から、友樹は興味がなさそうにお茶を注ぐ手を再開した。最後はどんどん小さくなっていくその声が途切れると、友樹は下唇を突き出した。
「で？　俺に何か野望を持てってこと？」
　自分の不安を話すとき、上手く伝えられないことが多い。相手を

傷つけないようにと言葉を選ぶと、余計に誤解させることもある。かといって、不安な気持ちを全面に出すのはいくら昔からの知り合いだとはいえ、小さなプライドが邪魔をする。それが、普段強気にやっていれば余計だ。案の定、夏美の言いたいことは友樹に伝わらない。だからといって、祐子と同じくらいここにいる自分が輝いていると、友樹に認めて欲しいとは言えない。その自分の中で上手く言えない苛立ちと葛藤が焦りを起こす。話の意図を汲み取ってくれない友樹にまで苛立ってしまう。それを自分の中に押し殺し、宥める表情を取った。

「そうじゃないの。友樹があんな風になりたいっていうのなら止める気はない。でもね、そうだったら、ちょっと寂しいなぁって……」

ここまで本心に近付けば、友樹は分かってくれる。そう思った。そして、その通りになる。友樹も自分が祐子と比べられ、田舎に引っ込んでいる情けない男だと言われていると思ったのだろう。だが、そうではないことが伝わったはずだ。

「何を言っているんだよ。俺はここにいたいんだよ。お前もそうだろう？」

「友樹……」

夏美が頷くと、友樹もえくぼを作って笑う。二人でお茶を一口啜ると、自然と身体が寄り添った。並んで座りお茶を飲む。こんなに落ち着く環境は他にない。

「それにしても、祐子ちゃんは別世界の人って感じだよなぁ。デビューだぜ？　そんなものは漫画の中の話って思っていたよ」

友樹は一杯目のお茶を飲み干すと、再び急須に手を伸ばした。ポットからお湯を注ぐも、それは中身が少なくなったことを主張するように醜い音を出した。夏美が無言で席を立つ。この家には、すでに昔から遊びに来る友樹専用のカップがあるほどだ。その特大のカップのせいでお湯が無くなるのも早い。夏美の父親は、友樹に対しても何も言わない。恋人だと気づいているのかもしれないし、友達だと思っているかもしれない。だが、たとえ付き合っているのが分

かっても、さほど問題ではない。むしろ父親は喜ぶだろうと思えた。
「そうだねー。昔から歌っていたよね、よくさ。ばーちゃん家の庭で歌っている声が、うちまで聞こえてきたもん」
夏美はやかんに水道水を流し込みながら答える。その間に、流しに飛び散っている水滴を布巾で拭う。包丁を水切りからどかし、乾いたザルと一緒に片づける。友樹が未だにポットからお湯を注ごうと粘っているのが窺える。ああいう子供っぽいところは、夏美の父親にそっくりだ。
「昔、山の麓でカラオケ大会があったのを覚えているか？　俺たちがまだ小学三年くらいだったかなぁ。俺が準決勝までいったって、祐子ちゃんが夏に来た時に言ったんだよな。そうしたらあの子が怒っちゃって。なんで私に言ってくれなかったの！　って。ここまで来て大会に出たかったって言うんだからな。あの根性がなくちゃな」
そういえばそんなこともあった。賞状を見せびらかす友樹に、祐子は来て早々パンチを食らわせたのだ。なぜ教えてくれなかったのか、と叫び泣いた。その頃から友樹が好きだった夏美は、祐子が来る夏は毎日ハラハラして憂鬱だった。いつの間にか、夏という季節が祐子と結びつき夏までも嫌いになった時期もある。そして自分の名前にも入っている夏の漢字も嫌った。祐子は散々明るく笑い、夏美と友樹を連れ回し、ばばに甘えて街へと帰っていく。すると祐子がいなくなった途端、友樹は元気を失っていた。寂しくて夜には枕を濡らしていることくらい、腫れた瞼を見れば一目瞭然だった。そんな友樹に元気を出して欲しくて、夏美は夏休みが終わると急に元気になった。元気になって友樹を励ましたいのと、祐子が帰って嬉しかったのだ。そんな夏美の本心に、どこまで友樹が気づいていたのかは定かではない。それでも、夏美のおかげで数週間も経てば友樹も元通りになった。
長年の積み重ねがあってこそ、二人はここまで来られたのだ。夏美はこれでよかったと思っている。
「そうだね。私もこれから何か探そうかな。趣味とか、ずっと続け

られるもの」
夏美がそう返事をした時、やかんのお湯が沸騰した。蓋の隙間を縫うように湯気が出て、沸いたことを知らせる甲高い音が響く。ガスを止めてやかんを持つと、友樹の待つ部屋へと戻る。そこでは、急須の蓋をあけて友樹が待っている。ポットに入れ終わり、残りをその急須へと入れる。
「それに復活祭の祭りも、祐子はばーちゃんと行くってさ」
あの社で別れて以来、夏美は祐子に会っていない。もちろん祭りの相談などしていない。だが、あの時友樹に近付く祐子を見て、三人で祭りに行く気持ちなど萎んでしまった。彼女は友樹に間違いなく迫ろうとしていた。それだけはさせてはならないのだ。唯一の救いは、祐子の仕掛けたことに友樹が好意を示さなかったことだ。それでも不安にはなる。もしかして友樹も心の隅では祐子と祭りに行きたいのではないかと思い、ちらとその顔を盗み見る。意外にも彼は残念そうではなかった。夏美に向け軽く肩を竦めてみせると、その視線はすぐに急須へ向けられた。
「そうか。……おおっと、ストップ。ストップ」
お湯が溢れそうになったのを、友樹が止める。
「夏美。これ以上たくさん飲むと、トイレに行きたくなっちゃうって」
そう言いながらも、友樹はその全ての湯を急須から自分のカップへ注いだ。沸かしたての湯は、もうもうと湯気を立て、すぐには口に運べそうにない。それに向かって息を吹きかける友樹を見て、夏美は祐子の夢よりも自分の現在の方が幸せだと思った。
それからも散々と茶を飲み続けた友樹が、やっと重い腰を上げたのはそれから三十分も経ってからだった。地元の企業に滑り込んだ友樹は、理由をつけては山の上まで戻ってくる。そんな融通が利くのはおそらく地元の人間だからだろう。二回もトイレに行った友樹を、半ば強引に家から追い出した。うっかりすると夕方まで居座られそうだ。寄り道をしないように、会社に戻る時に通る、夏美の父

親への弁当を手渡す。
「えー。また俺がおっちゃんに弁当持っていくの？　ここに来たことがばれちゃうじゃん」
夏美の手からそれを嫌がる素振りを見せるのも毎度のことだ。それでも友樹はしっかりと弁当を持って車で山を下りていった。
確かに、祐子の夢はでかいだろう。しかし、自分は一度もなりたいと思ったこともない。
―夏美ちゃん。おうちのことをしっかり出来るようになって、お父さんの面倒を見てあげるんだよ。
母親の背中を追いかけるように、夏美は祐子のばばの後を追った。洗濯をする時も、ご飯の支度をしている最中も。ばばは、自分の足下にまとわりつく夏美に毎日のようにそう言い聞かせた。小さい頃は人形を抱きながらそれを聞き、いつしか手の中にあるものはばばを助ける物へと変わっていった。時には野菜であり、洗剤だった。スコップだったり、箒を使って真似をした。今から思えば、それは洗脳だった。それに疑問を抱くことのないように育てられたのかもしれない。だが、ばーちゃんを恨む気持ちは一ミリたりともない。それは、今山を下っていた男が側に居てくれることが一番の理由に違いなかった。そう、自分が幸せだと夏美は思えるのだ。夏美は微かに微笑むと、次の部屋を掃除するためハタキを手に取って向かった。

＊

こんなに泣いているのに、誰も抱き上げてくれない。お腹が減った。お尻が濡れて気持ちが悪い。もう少し大きい声を張り上げてみよう。喉が千切れるくらいの声を出し、手足をばたつかせる。それでも、誰も来てくれない。朝日が昇ってから、その家にはいつもと違う空気がある。
「早く、早く来て！　あの子が誰かに殺されたんだって」
いつも乳をくれる母親が、目の前を走っていく。その後を、父親

が追いかけていった。
「そんな……。捧げ者だからって、そんなことがあるのか！」
その叫び声をあげた主が、振り返ることはなかった。
あらん限りの声を張り上げて、とうとう泣き疲れた頃、両親は家に戻ってきた。もう一人、自分の子供がいることを忘れてしまっているようなうつろな目、そして疲れ果てた身体。
「あんた……。あの子は、あの子は……」
母親は、両手で顔を覆って鳴き声を漏らす。泣きたいのはこっちだ。しかし、もうその声を出す元気もなかった。その母親の肩を抱き、父親は呟くように言った。
「あの子は、村中の不幸を救ってくれたんだ。捧げる時から、覚悟している必要があったんだ」
その言葉に、母親の泣き声が大きくなる。しかし、その両親の言葉が、ここで待ち続けていた赤子に理解出来るはずもなかった。ただ、その二人の姿をじっと見つめているしかなかったのだ。

＊

お囃子が木霊を呼ぶように山に響く。こんもりと繁った森の上を、小さなこびとが祭
だ祭りだと騒いでいるように風が吹く。ばばに不信感を募らせ、神社で別れてから夏美とも顔を合わせることがなかった。意図的に祐子が避けていたともいえるが、実際今の時期は畑が忙しく、夏美も家業にいそしんでいるようだった。自分の細くて色白な腕を眺めながら、祐子はやはり農家で育たなかったことの優越感に浸っていた。この炎天下の中、ずっと舌を向いて作業をするなど信じられない。海に行った時には日焼け止めでカバーできるものも、毎日ではそうもいかない。季節が変わる時に、皮がぺろりと剥けるあの痛がゆさを味わうことなど子供のすることだと思った。
やはり、自分は都会の子供なのだ。もう、寂しくなどない。自分

の居場所はここではないのだと、祐子は言い聞かせる。今度いつ来るかは分からない。でも、その時までにさらに幸せになっていようと思った。夏美に、負けないくらい。
「祐子。お前、黄色と青とどっちの浴衣にするんだね」
ぼんやりとした目で、しかし確実な決意をしていた祐子の耳に、ばばの声が聞こえた。
縁側の壁に寄りかかっていた祐子が部屋を振りかえると、そこにはふたつの浴衣を抱えたばばが立っていた。腰は曲がっているが、醸し出すオーラは変わらない。自分で準備をしない孫に、少々苛々しているのが読みとれる。しかし、これも楽しんでいるといえるのかもしれない。そんな姿にふっと心が緩む。
「ばーちゃん、あたし青がいい」
ひんやりとした床に立ち上がると、ばばの左手にある方を指さす。この何日かをかけて、ばばが背丈を調節してくれたのは知っている。だからこそ、せめて祭りには出てから帰ろうと思ったのだ。
「今日の夜、夏美と行くのか？」
浴衣を祐子に渡し、ばばはタオルや帯を箪笥から出している。実家の母親ではこうはいかない。浴衣を着るにも一苦労だ。その点において、ばばは全てをまかせておける安心感がある。
「んー。分からない。夏美ってさ、なんか変わったよね」
祐子は、浴衣を着せてくれようとするばばに身を委ねながら、そっとその顔色を窺う。
もしも夏美までが毒牙にかかっていたら、何かしらの反応があるはずだ。しかし、祐子の胸元で作業をしているばばに、一向に変化は

見られない。むしろ、ただ突っ立っている祐子のお尻を軽く叩くと、半回転するように促す。
「なんだい、あの子は何も変わっておりゃせんよ。お前の方が変わったんじゃないのかい。祐子、お前の体に。気持ちだけじゃない、体にも変化があったんじゃないのかい」
心臓を鷲づかみされたような気がした。そして、次には腹部がぎゅっと締め付けられる。
ばばの顔を、さらに盗み見た。が、未だに祐子の方など見ない。
「……え？」
　着々と作業を進めるばばは、一瞬祐子の鞄へと視線を走らせた。その目つきに、さらにどきっとする。ばばに、自分の秘密をもう一つ知られているようだ。再度腹部に痛みが走る。女として、罪を犯した印。だが、あの薬はばばの目の前で飲んでいない。
「ちょっと、髪留めを探してくるよ」
ばばが、手を止めて言った。祐子はばばを目だけで見送ると、到着した日に置いたまま
の鞄へと駆け寄った。大きめのボストンバック。その脇に付いている小脇のポケットのチ
ャックを静かに開く。その間も、ばばが戻ってくる気配がないことに神経をとぎすませて
確認する。見られてはいけない。いや、これが何かは分からないだろうが、それでも万一
薬を飲んでいると知られたら何を言われるか。頭痛だと言ってもいいのだが、そうそう咳
や熱もないのに飲むことは出来ないだろう。ポケットの中に手を滑り込ませると、ほっと
息を付く。確かに、それは存在していた。錠剤で、あといくつあるだろう。数える暇はな
かった。ひた、ひた、とばばの足音が聞こえたと思ったら、すぐに姿を現したのだ。一瞬、

ばばの顔が鞄へ向き、祐子の手を覗き込んだようだ。しかし、祐子は立ち上がり、出来る
だけそこから離れようとしていた。
「なにをうろちょろしているんだい。紐が取れたらやり直しなんだよ」
ばばは面倒くさそうにそう言うと、祐子の腰で取れかけている紐を引っ張った。重心が
後ろへよろめく。そのおかげで祐子の足が絡まり、予想以上に倒れてしまいかけた。右、
左、右。賢明に足を持ち直し、壁に手を付く。床に散らばっているものも踏まないように
気を付けると、注意が散漫になった。そして、祐子の手の中にあった一つの粒が、床の上
へと転がった。最後に、祐子はしなだれかかるように壁に寄りかかった。それは一瞬のこ
とだったが、まるでスローモーションを見ているようで、ばばは怒るかと思いきや一瞬吹
き出したのだ。
「あんたは！　おてんばだね。もう」
そう言ってから祐子のお尻をもう一度叩く。
「ちょっと待って」
ばばが、焦る祐子の声に目を丸くしている隙に、祐子は一直線へ薬を拾った。この錠剤
は、今、手放せない。親にも、そしてばばにも言えない。ましてや、これから明るい世界
へ旅立とうとしている祐子にとっては、致命的な薬なのだ。そう、彼氏と祐子だけの秘密
だ。薬を握りしめ、ばばにされるがままになった。薬を見るたびに、数週間前のことが思
い出される。祐子は自分の腹部に手を当てた。そこには、祐子の罪

の証が存在していた目
に見えることはない。しかし、心には消えることのない深い傷が刻まれていた。
三週間半前。
とあるファーストフード店のカウンターで、祐子は震える手を押さえながら、隣にいる
男の答えを待っていた。答えは分かっていた。それでも、男の口から聞くのを待っていたのだ。そうすれば決心が鈍ることなどないと思えたからだ。たとえそれが残酷で自分が傷ついても、嘘をついて優しくされるよりマシだ。
「……ごめん」
　思った通りだ。あまりにも筋書き通りで笑ってしまいそうになる。店内のざわめきも、今では流れるＢＧＭの音楽も、耳障りでしかない。いっそ、もっと騒いでほしい。そうすれば、男の声も聞こえなかったのかもしれないのに。
「うん。分かっている」
祐子は、手の震えをおさえて目の前の紙コップにたっぷりと注がれているジュースに口
をつけた。いやに喉が渇く。これは緊張からか。それとも、この男に対する嫌悪感か。
「いや、でもさ。俺もこれからだし。お前も、そうだろう？　いや、お前の方が、産んだ
ら困るだろう？」
「産む」その言葉が聞こえたのか、隣に座っている女の子達の会話が止まったように感
じる。聞き耳をたてているのか。もしそうならば、そんな言葉をこんなところで軽々と発しないで欲しい。あとから、この情報が漏れても困る。祐子は、そう思っても言葉に出せない苛立ちに、さらに手が震えた。
「もう……いい」

「もういいって……。納得してくれなくちゃ、困るだろう。あとで何かいいがかりつけるなよ」
男の言った言葉にどんどん震えが大きくなる。口に運んでいたコップをテーブルに戻す。
持っていたら、零してしまいそうだ。それか、男に浴びせてしまうかも知れない。いっそそれも魅力的だったが、今は大事な問題があった。
「じゃあ、下ろしてきたら連絡して。うちの薬あげるから」
一緒に来て。そんな簡単な言葉さえも言えない。そんなにも短い言葉が、口元まで来てるのに引っ込んでしまう。何を恐れるというのだ。この男など怖くない。世間か。親か。それならば、一番不安に感じている自分をどう大切にしてあげればいいのだろうか。それでも、祐子が出した言葉は、あられもないほど強気だった。
「わかったってば」
十代でこんなことは親に言えるはずもない。夢を諦めきれるわけがない。迂闊。そんな二文字では消えない。
「じゃあ、なんか俺変なこと聞いて気分悪いから、もう帰るわ」
男は、それだけ言うと祐子の隣から去っていった。男の座っていたスツールが、寂しげにクルクルと回っている。その後は、どうしたのか自分でも覚えていない。どうやって家まで帰ったのか。それから数日は何を食べたのかも覚えていない。ただ、一人で耐えたのだ。そして、許されないことをした。祐子も、妊娠が分かった時は、嬉しいという気持ちは起こらずに困惑しかなかった。快楽だけを求めて、男のすることにたいして咎めなかったのも認める。だからといって、どうして、今なのだ。なぜ、自分なのだ。それしか、考えられなかった。結局、病院へは一人で行った。そのあと、男に連絡すると悪びれた様子もなかったのに驚いた。
「これ、飲んだほうがいいよ」
そう言ってくれたのは、いくつかの錠剤だった。
「子供を下ろすと内臓が痛むだろう？」

誰のせいだ。まだ、こんな歳なのに。
「俺の家、産婦人科だから詳しいんだ」
それならば、なぜ彼女である自分をこんな目に遭わせたのだ。親にばれるからと、自分の家の病院に来るなといった分際で。
「これ飲めば、不妊症にもならないんだぜ」
信じる必要など、確証など、何一つない。それでも、祐子は今、それを飲んでいる。多少の頻脈とふらつきは副作用だとも聞かされている。あの男とは、別れたい。でも、本当に別れる自信はなかった。まだ、若造と言われる歳でも、どんなにひどいことをされても、それでもまだどこかで祐子は男のことが好きだった。夏美が、あの優しい友樹を手に入れたことが悔しかった。自分の、汚れた身体が悲しかった。こんなこと、誰にもいえやしない。夏美の顔を思い浮かべる。蜘蛛の捧げとして、今夜一晩山にいる夏美と、祐子はやはり一緒に遊びに行く気分にはなれなかった。二人の間の距離は、三好の山よりも高く立ちはだかってしまったのかもしれない。準備を終えて家を出ると、すでに辺りは暗くなっている。いつもはその中を山に登るとは考えられないが、今日はあの神社までの道の両脇にぼんやりと灯る提灯が一定の間隔で置かれている。祐子のばばの家の周りにも数件の家が建ち並び、彼らの家の玄関にもいつもより灯りが多くつけられている。いつもはこんもりとした山が、今日は全体に蛍光灯がつけられたように華やかだ。まるで不思議な世界と繋がっているといわれても信じてしまいそうなほど幻想的であった。そこを、一人からん、ころんと下駄を弾ませる。周りにいる人々も、両端に並ぶ露店に目を奪われ、祐子が一人で歩いていることなど気にもとめない。わたあめ、りんご飴、射的。金魚すくいですくった魚を、嬉しそうに手にぶらさげている女の子。キャラクターのお面をつけて元気に走り回る男の子。それをほほえましそうに眺める年寄り達。たとえ、友達と一緒に回らなくとも、祭りもこうして楽しめるのだ。同世代と笑い合うのばかりが遊びではない。
祐子は、一番近くにある店で砂糖のついたカステラを買うと、袋

からひとつ取り出して口の中に放り込んだ。唾液でカステラが数秒でシュッと小さくなる。それと同時に、口の中いっぱいに甘い香りが広がる。一つが消えてしまうと、すぐにもう一つへ手が伸びる。数回繰り返し、親指と人差し指についた砂糖を、舐めとる。それがまた、十分に甘くてうまい。人のざわめきに流され、祐子が神社にたどり着いた時には、すでに盆踊りが開始されていた。やぐらの上でマイクを持ち、声高々に場を仕切っているのは、あの前田だ。この村も過疎化されているので子供は本当に少ないはずだ。しかし、田舎に帰ってきた大人達が連れてきたのであろう幼い子供が慣れない仕草で円を作り踊っている。この数日で人が集まって来ているのは明らかだった。祐子は、やぐらの上にいる前田に手を挙げて挨拶すると、その輪の中に入った。周りが小さい子供だからか、多少みんなが見ている気がする。しかし、人前に出るのに慣れている祐子は、さほど気にならなかった。むしろ、もっと自分を見て欲しいと思ったくらいだ。前田も、祐子が手を挙げたことには気づかなかったようだが、それでも嬉しそうにしゃべり続けている。お決まりの音楽に乗せて、身体が動く。いつもより軽く感じる。空気までもが澄んでいて、身体にまとわりついた汚れが落ちた気がした。こんな小さな祭りだと、知らない人も話しかけてくれる。そして、都会より怪しい人物も少ない。安心して受け答えをしたりしていると、時間が経つのはあっという間だった。特にこれと言ってやったものはない。適当に食べて、適当に話した。うろうろ歩いて、わくわく出来た。それで充分だった。これで、またいつかこの祭りにくれるときがあればいいのだった。だんだんと人気はなくなっていき、祐子も帰ろうとしうた時だった。何時に帰って来いなどとはいわれていないが、ばばが心配するのは分かっている。あとで小言を言われるのなら、ゆっくり風呂にでも入りたかった。足を家の方角へと向け、帰ろうとした。そこで、これから本物の祭りが始まることに気づいた。そう、蜘蛛の捧げ者だ。白装束を着た夏美が、友樹に引かれて社へと歩いていくのが目に入ったのだ。

「そうだ。一晩いるんだっけ」
夏美のことはもう忘れたいと思いながらも、彼女がどう捧げられるのか気にならない訳ではない。まだ人もちらほらいるところから見ても、もう少しだけなら帰らなくても大丈夫だと自分に言い聞かせる。祐子は、二人の後を静かに追った。昼間よりも、そして先ほど盆踊りを踊っていた時よりも風が強くなってきた。それまではなんとも思わなかった肌に、鳥肌が立つ。浴衣の胸元のすきまが妙に心許なくて、祐子は微かにその間をたぐり寄せた。落ちている葉を踏む音が響くことが気になるが、それも風でそよぐ木々の葉音がかき消してくれる。
「やあ。待っていたよ。五十年に一度。この役を出来る夏美ちゃんは大当たりだよ。村に女の子もほとんどいないからね。って、あ、これはいけねぇ」
社の裏では、夏美と友樹、そして前田達が揃っているようだ。祐子は一番太い木の幹の後ろに隠れると、様子を窺うように少しだけ顔を出した。ここはもう灯りもなく、祐子が声を発しない限り気づかれることもないだろう。隠れる必要もないが、それでも祐子が顔を合わせたくなかった。大人は、前田の他にも数人いるようで、その中の二人が足下を照らすように提灯を持参している。それでも、声はしっかりと聞こえた。
「もー。それじゃあ、他に女の子がいたら、私じゃなかったってこと？」
祐子は、男に絡むようなふざけた声を出す夏美など知らない。彼女はいつでも、しっかりとした母親のような存在だった。
「ほら。夏美。馬鹿なこと言ってないで、社に入れよ。俺も少しここにいてやるからよ」
「ああ、友くん。それはダメだよ。それだと、神が自分だけのものだって思わないだろう」
夏美が心配なのだろう。友樹は薄着に身を包んだ彼女に優しく微笑みかける。しかし、それを遮ったのは前田だった。チッチッチと、

友樹の顔の前で人差し指を小刻みに振る。
「大丈夫よ。ただこの社の中にいればいいのよ。布団だってある。こんな田舎でわざわざ何もされないわよ。なんかあったら、ね。警報を鳴らすから」
夏美が、心配そうに見下ろす友樹の頬を両手で挟んだ。そして、周りの大人達がからかうようにヤジの声を出す。そんな光景から祐子は目が離せなかった。あんなにも幸せそうに、そして安心しきっている夏美を少しだけ怖がらせてやりたくなったのだ。どうせただ一晩ここにいるだけだ。それならば、多少怖い思いをしたほうが記念になるだろう。闇は、男達の手にある灯りがいなくなると、すぐに追いかけてきた。最後まで友樹は心配そうに夏美に話しかけていたが、大人に手を引っ張られるようにして連れて行かれた。夏美も、社の中ですることもないのか真っ暗だ。用意されているという布団に入っているのかもしれない。男達が引き上げるのと同時に、夏美は中へ入ったままだ。出てくることはないだろう。さっきまで聞こえていた表の方からの声も、数分もすると何も聞こえなくなった。どうやって脅かしてやろうかと考えながら、人の気配がないことを確かめる。祐子は、少々の寒さに両腕を撫でながら、胸の内で興奮した。一歩、一歩と社へと近づいていく。こうして夜に近づくと、昼間はなんとも思わないのに不気味でしかない。周りの森からは、ここぞとばかりに虫が鳴いている。その声に背中を押されるようにして社の入り口へ足をかけた。声を漏らさないようにと、無意識に息を止めてしまう。木の床に当たって下駄の音がするので、地面で脱いでおく。ひんやりとした土が足の裏を刺激するが、それがどこか心地よい。扉の前に立つと、祐子は拳を作って扉を三回叩いた。少し軽めに。こん、こん、こん……。そして、足音を忍ばせ、出来るだけ早く一番近くの柱に姿を隠す。数秒後、横になっていたのだろう、少し髪の毛が乱れた夏美が扉から顔を出した。
「だれ……？」
不安そうなその声を聞いて、祐子は笑い声が漏れそうになるのを

我慢した。両手で口を押さえる。肩が、笑いを表しひくひくと上下する。キョロキョロと数回左右を確かめた夏美は、首を傾げて再び中へと戻っていった。

よし、もう一度。足音を忍ばせ、もう一度扉の前へ行く。こん、こん、こん……。今度は、柱まで行かずに扉の脇に待機だ。そして、夏美が近づいてくる気配を感じた。今度は、勢いよく扉が開かれる。

夏美が顔を出したところを首っ玉を両手で掴んだ。冗談だった。しかし、そんなことを知るよしもない夏美は、恐怖にかられたのか目玉をひんむいた。あまりの怖さで悲鳴は出なかったようで、それは祐子にとって幸いなことだった。悲鳴を聞きつけた人間が戻ってくるかもしれない。そうなれば、怒られるに決まっている。一瞬恐怖を浮かべる顔をした夏美も、すぐに脇にいる祐子に気づいた。それが驚き、呆れ、最後に怒りへと変化していく。その感情を写しだす表情はとてもリアルで、最後に祐子は我慢出来ずに吹き出した。

「……祐子！　あんた、何をしているの！」

そう叫ばれた声は、ずっと我慢していたものを全て吐き出すほど大きなものだった。

顔が緩んでいた祐子も慌てて、一気に周囲を見渡した。そして、夏美の背中を押して社の中へと入る。祐子の予定では、笑ってもらえるとは思っていなかったが、ここまで驚かれるとも思っていなかった。

「ちょっと……、中で話そう！」

祐子が夏美を引っ張って中まで行くと、夏美も呆れたようにため息を吐き、そして布団

の上に座った。せっかく真っ白の衣装を着ていても、彼女の座りかたが胡座なのだから儀

式もなにもあったものではない。本当にこんなことをして意味があるのかと思う。しかし、

言い伝えで五十年に一度こうしなかった時に、その年から疫病が流行ったらしい。迷信と

いえばそれまでだが、縋って損はないというところだろう。今は、こうしてむしろ自由になったほうだと言う。いればいいのだから。
「で？　あんたは、何をしに来たわけ。ばぁちゃんが心配しているんじゃない？」
夏美は布団の上で言ったが、祐子は二度目に入るそこの中をうろついていた。数日前よりも明らかに綺麗になっている。ここは一年中で掃除をするのはもしかしたら夏だけなのかもしれない。一通りフラフラと見ると、祐子も布団の脇に座った。考えてみれば話すことなど、ほとんどないのだ。数日前の別れも褒められるものではないし、ましてや女の性を全面に押し出し合ったあとには気まずくて当然だ。
「うん、帰るよ。ちょっと夏美が心配になって来てみただけ。でも、それ凄いね」
祐子の指さす先には、夏美の枕元に短剣があった。
「あぁ。一応儀式の一環らしいよ。使うこともないだろうけど。何かあったら警報も鳴らせるしね。これで」
と、スイッチのようなものを見せる。
「ふーん。ねぇ、夏美って夢はある？」
祐子は、そのスイッチになど目もくれずに聞いた。今、祐子が夏美に勝てるとしたらこれしかない。どれだけ真剣に生きてきたのか。それが、同年代の間でも差をつける。そして、それが生きる証となり、自分の価値である。さらにその上をいく、どんな夢を持つかで、自分のほうが上だと確かめたかった。祐子の思惑通り、夏美は布団の上で困ったよう

に視線を天井へ向けた。
「何、突然。夢……？　普通に家庭を持って、子供を産んで……」
夏美が話している途中で、祐子は顔がにやけてきた。それに気づいた夏美が、咎めるよ
うに見て言葉を止める。所詮、夏美の夢は平凡なのだ。祐子は、それが面白くて仕方がな
かった。自分より頑張っている人間など、この村にはいない。
「なに？」
「ううん。なんか普通だよね、昔から。夏美ってさ。もっと、こう何か、目指すものはな
いの？」
明らかに馬鹿にしたような口調になってしまいそうなのを、必死で押さえる。それでも、
祐子が何を言いたいのかは伝わったようだ。夏美は小さく溜め息を吐いたあと、笑いなが
ら言った。しかし、それは戦いを挑む口調でもなく嫌味のない笑顔だった。
「うん。祐子は凄いよね。デビューするんでしょう？　もう私と話しても面白くなくなっ
てしまうかもね。でも、私は友樹といて結婚出来れば幸せ。それでいいの。」
挑発したつもりが、夏美にはちくりとも通じなかった。一瞬で、余裕だった気持ちがしぼ
む。そして、「結婚」という言葉が妙に苛つかせる。どうすればいい。どうすれば、彼女
よりも自分が価値のある人間だと実感出来るというのだ。もう持ち駒はないに等しい。祐
子は、夏美に負けないほどの笑顔を作り、オーバーに両手を広げて言った。その顔は、夏
美から見れば、悪あがきをする子供の顔でしかない。

「ねぇ、あたしたちまだ若いんだよ？　そんなの早いって。結婚？　馬鹿馬鹿しい。夢を見つけなよ。楽しいよ」
夏美は、そんな祐子の言葉を確かに受け止め、そして受け流す。
「そうだね……。でも、私の幸せは、私で決める。でも、祐子のことは私たちで応援しているから」
……私たち。友樹と夏美。そこに入れない自分が悔しい。どうして夏美は「羨ましい」とは言ってくれないのだろう。
祐子の、感情のスイッチが入る。ぶちこわしてやりたい。どうせ次にいつ会うのか分からないのだ。ここでめちゃくちゃに言って、夏美を傷つけてやりたくなる。そして彼女の歪んだ顔を見たのを最後に、この村から帰ろうと思った。
その時だった。扉の外で何か音がしたのだ。部屋の中も暗いので、もちろん外が見えるわけではない。社の中でさえぼんやりと分かる程度だ。しかし、たしかに足音のようなものが聞こえた。二人の間に緊張が走る。
「祐子？」
先程のようにまだ悪戯をしていると、夏美は思ったのだ。その問いかけに、祐子はゆっくりとかぶりを振る。ここへは一人で来たし、前田や友樹は山を下っていった。残るは、誰だ。
「ううん。一人だったし、誰もいなかった……はず」
祐子が答えた瞬間、扉がゆっくりと開かれた。その影がゆっくりと浮かび上がる。手のひらに何かを感じて見ると、一匹の蜘蛛だった。どこにいたのだろう。そういえば、夏美のことを疑っていたのだ。小さな蜘蛛を反射的に払いのけて扉の方を見ると、また蜘蛛だ。しかも、それはとても大きいものだった。長い八本の足が、一本、また一本と足が社の中へ入ってくる。その長さは胴体に行き着くまでに一メートルはありそうだ。祐子の記憶が蘇る。慌てて祐子が夏美の手を取ると、彼女も祐子を見返している。
「なに？」

「夏美！　あれだよ！　昨日の夜見た奴」
　そして、それは再びゆっくりを顔を出したのだ。長い手足を全て社の中に入れると、にょきっと顔が現れた。それはお尻の方から入ってきたようで、床のそこらじゅうに白い糸がすでに撒かれている。
「ばぁちゃん……」
夏美が呼んだ通り、それは祐子のばばだった。そして、昨夜祐子が見た通り巨大な蜘蛛
だった。
「夏美。そうだけど、あれは、ばあちゃんじゃないの。逃げよう！」
祐子は一気にパニックになり、夏美の枕元にある短剣を掴んだ。そして、そのさやを引
き抜くと、夏美の手を掴む。
「ちょっと！　祐子、待ってよ！」
夏美が慌てる間にも、蜘蛛のばばは近づいてくる。ゆっくりと獲物を選ぶように二人を
見つめながら。やはりばばは蜘蛛になっていたのだ。呪われているのか取り憑かれている
のかは、この際問題ではない。蜘蛛のばばは、昔からの言い伝え通り、捧げ者を喰いに来
た。早く家に帰ればよかった。そうすれば、こんな巻き添えを食うことはなかったかもし
れない。だが、もう覚悟を決めるしかないのだ。祐子は短剣を振りかざして、夏美の手を
取ったままばばに向かって走って行った。うまく切り抜けられればいいのだが、これしか
手だてはない。ただ、祐子は刀で何かを傷つけたことなどない。しかも相手の手足の長さ
を考えると、心臓をひとつきにするなど無理な話だ。結果、祐子はそれを出来るだけ夢中
に振り回した。社の中が、一気に戦場へ変わる。

「ちょっ……祐子……」
夏美が呟くように声を発しているが、彼女を守るためにも祐子はそれを振り回した。たとえ険悪な雰囲気となっていようとも、夏美は夏美だ。祐子は、ただやみくもに突き進んだ。扉までも数メートルのはずが、数キロにも感じられる。祐子の短剣を避けるように、ばばの蜘蛛は足をちょろちょろと動かして避ける。しかし、確かにその足を斬りつける感触も祐子は分かった。あとは、逃げられればいい。
「夏美！　行くよ！」
一瞬の隙を見て祐子が彼女の方を振りかえると、夏美は恐怖の表情ですくみ上がっていた。まさか、捧げ者として来たものの、本当に喰われるとは思っていなかったのだから当たり前だ。ただ祐子の方を見て悲しそうに首を横に振っている。チッと舌打ちをして祐子が夏美の方へ行こうとすると、蜘蛛のばばが、一瞬先に動いた。夏美の方へ飛びかかる。
「きゃー！」
夏美の叫び声が響く。そして、あの夜祐子をそうしたように、蜘蛛は夏美の足から身体を吸い込もうとしているのだ。歯も鋭いのが見て取れた。暗闇の中で、短剣と同じくらいに光っている。助けなくては！　祐子は咄嗟に夏美の方へ戻ると、蜘蛛の身体へ短剣を再び振り上げた。蜘蛛が、敏感に祐子の方を振り向く。構わない、構っていられるか！　夏美がすぐそばでしゃがみ、祐子を見上げている。祐子は一気にそれを振り下ろした。そし

て、同時に意識は遠のいていった。

6　死体

目が覚めた時、それは突然だったが、祐子は自宅に居た。そして、布団の中で震えていたのだ。再び朝日が昇っているようだ。布団から顔だけ出た祐子を、気持ちがいいほどの温い光が照らしている。一晩経ってしまったのだ。日はまた昇り、蜘蛛が逃げる時間だ。昨夜、祐子はまた大きな化け蜘蛛を見た。その映像が祐子の脳裏に蘇ってきた瞬間、彼女は布団をはね除け飛び起きた。心臓がドキドキと脈うつ。昨夜、短剣を振り下ろしたところまでしか記憶がない。どうやって戻ってきたのだろう。そして、自分は、あの蜘蛛を倒せたのだろうか。夏美を救えたのだろうか。祭りは、どうなったのだろう。あまりの惨劇と精神を集中したせいで、祐子は意識をうしなってしまったのだ。なんと情けないことか。

不安が過ぎる胸を押さえ、祐子が布団から出ようとすると、そこに現れたのは、ばばだった。彼女の顔色は青白く、いつもよりさらに腰が曲がっている気がした。そして、一筋の笑みもなかった。静かに祐子の枕元に座ると、震える祐子の両手を、彼女も自分の両手で包み込み、言った。

「祐子。夏美は死んだよ」

「え……？」

半ば想像していた言葉にそれほどの驚きはない。むしろ、確信に変わった落胆が心に渦巻く。それでいて、あんなにも非現実的な出来事をどこかすんなりと受け入れている自分がいる。

「夏美のことを……、どうして襲ったの？　ばばが、食べちゃったの？」

祐子が絞り出すような声で尋ねると、ばばは静かに首を横に振った。

「ねぇ、でもあたし……見たんだよ？」

ばばは、ただ無言で首を振り続ける。その目には、次第にうっすらと涙の膜が張る。
「違うんだよ。違うんじゃ。祐子、お前は、お前の見たことを誰にも言ってはいけないよ。
そうして、早く家に帰りなさい。やっぱり、すぐに帰すべきだった。こんなことは、お前
は……」
「ばあちゃん……」
不思議と、ばばに恐怖は湧いてこなかった。祐子には、夏美が殺された瞬間の記憶がぽ
っかりと抜けている。それが、よかったのかもしれない。ばばは、捧げ者として夏美を受
け取ったのだ。どうしてばばが、蜘蛛の神の代理を受ける役目に担われたのか。聞きたい
けれど、それは知らなくていいことにも思えた。そのために、蜘蛛の神が舞い降りたのだ
と思えば、納得出来そうな気がする。夏美を食らえば、もう用事がないのではないか。あ
と五十年後の復活祭まで、蜘蛛は出てこない。そして、ばばの身体は、もうばばのものだ。
そうに違いのだ。確認して否定されるのが怖い。祐子は、頷くしかなかった。
「誰にも言わないよ。ばーちゃんは昨日社に来たよね。それが、必要なことだったのなら、
あたしはそれでいい。知りたい気持ちもある。でも、世の中知らなくて良いこともたくさ
んあるんだよね。あたしも、もう子供じゃないんだよ」
祐子は、包まれた両手を放すと、ばばの目をまっすぐに見つめた。
それでも、ばばは何
も話そうとはしてくれなかった。ただ、覚悟を決めたように頷くと、

今まで聞いたことの
ないほど弱々しい声で言ったのだ。そう、祐子はもう子供ではない。
これからは、二人で
共通の罪を背負って生きていくのだ。昔から、ばーちゃんはいつも
祐子に優しくしてくれ
た。今度は、自分がその役目を負う番なのだ。遠く離れた都会にい
る孫の心配までさせる
わけにはいかない。
「祐子。大丈夫。お前は強い子だ。夢もある。若さもある。自分を
強く持つんだよ」
ばばのいわんとすることがよく分からず、祐子は首を傾げた。それ
でも、ばばに見つめ
られ、ゆっくりと頷く。ばばは、夢もなく自分を見失ったから蜘蛛
に取り憑かれたのだろ
うか。そしてそれを納得しているというのか。それでも、祐子はた
だ頷いた。昨夜のこと
を思い出すと、まだ身体は火照る。意識を失ったせいか、身体も重
い。それでも、心は元
気だ。そう思えた。
「あたしは大丈夫だよ。ばーちゃんは……大丈夫？」
ここに、ばば一人残してはいけないと思った。祐子は、元の生活に
戻り、温かい家族に
囲まれて過ごせるだろう。しかし、ばばはまた一人で、ここで寂し
くご飯を食べるのか。
夏美を殺したという罪悪感をしょって、ここで周りの目を気にして
生きていくのか……。
両親に話して、ばばも一緒に住めないかと提案してみようと、祐子
は一人心に決めた。そ
れよりも、ばばが殺したとはばれないだろうか。食べられた夏美は
どうなったのだろう。

気になることばかりだ。
「祐子、早く帰りなさい」
「わかった……。じゃあ、ちょっと友樹と話をしたいから、そうしたら帰るよ。それでいいでしょう？」
ばばは、祐子が帰ると決めたことに安心したようで、それ以上追求しようとはしなかった。祐子もそれ以上聞かないことに決めた。ばばが、友達を殺した話など聞きたくもない。
「祐子。それならば早く済ましてしまいな。あと、社には近寄るんじゃないよ」
「……分かった」
ばばは、蜘蛛に扱われるという大役をこなしたのだ。祐子はそう思うことにした。そうとなれば、友樹に会いに行こう。祐子は、布団から出ると、それを片づけて着替えることにした。
「それじゃあ、ご飯をたくさん食べるんだよ」
夏美が死んだのにご飯というのもおかしいではないか。そう思うも、祐子を気遣っているのだろう。曖昧に頷いたまま、鞄の中から着替えを出そうとした時だった。不意に、ばばの着物の袖から腕が見えた。そして、そこには無数の傷が刻まれているのが目に入ったのだ。
「……っ！」
祐子は、はっと息を飲み、そしてばばの腕に飛びついた。その袖をまくり、そっと触れる。ばばは、抵抗しようともしなかった。そこにあるのは、肉が減り、ほとんど皮で出来ているようなばばの腕だ。そこに、かすり傷とも言えるものがたくさんある。血は出ていないが、みみず腫れのようになっており痛々しい。昨夜、祐子がつけた傷だろうか。化け物を倒すためだったとはいえ、結局はばばが

傷ついている。やはり、心臓を一突きになどしなくてよかったのだ。ほっと安堵の息が漏れる。だが、短剣が蜘蛛を倒す前に、蜘蛛は夏美を食らったというのか。その代わり、今ばばは生きている。蜘蛛を殺すわけにはいかなかったのだ。いや、不可能だったのだろう。祐子は、さっさと着替えを済ませると、食欲がないので飲み物だけ飲むことにした。なんだか当分は物を食べたくはない。アイドルたるものいかに痩せていても問題はないはずだ。ダイエットの一環くらいでいいだろう。祐子は、夏美の喪に服す意味合いもこめて、持ってきた服の中で一番暗い色を選んだ。家を出ると、なんだか肌寒さが残っている。昨日までは少し歩けば汗が噴き出るようだったのに、今日はシャツを一枚余分に羽織りたいくらいだ。ばばには社に近付くなと言われた。それでも、足は勝手に山道を登っていく。確かめずにはいられないのだ。夏美は死んだ。ばばには聞くつもりはない。この目で、その惨劇を見たいとも思わない。それでもこうして警官ややうじうまの間を縫って歩けば、少しでもその状況を知ることが出来ると思った。社に着く大分前から、すでにそこは警官でごったがえしていた。祭りの時でさえ、こんなにも警官の姿はなかった。普段、こんな山まで登ってくることなどないほどの人数が、社より数十メートル手前から並んでいるのだ。その向こうには規制線も張られているようで、一切近寄れない。むしろ辺に近づくと怪しまれるだろう。昨夜の出来事を体験している身だからこそ、変に意識して挙動不審になってしまいそうだ。

……あたし、どこもおかしくないよね。

一番手前にいた警官にじろりと睨まれた祐子は、咄嗟に自分の両手、服などに視線を走らせた。それが、よくなかった。その警官は、自分の腰にある警棒に手をふれながら祐子の方へと足を踏み出した。来る、そう思うと身構えてしまった。何を聞かれるのだ、やはりここへ来るべきではなかったか。そう思った時だった。

「祐子！」

その声に顔を上げると、警官の後ろから駆け寄ってきたのは、真っ

青な顔をした友樹だ
った。一度も家に戻っていないのか昨夜と同じ服装をしている。細身のジーンズに寒さ対
策にパーカーを羽織っている。それだけを見れば、都会にいるオシャレな男子と何ら変わ
りがない。頭に乗っけている一昔前に流行った野球帽が、その全てを台無しにしていた。
「あ……友樹」
祐子にとっては、逃げる手段だった。警官も、友樹の顔を見つけると少しだけ安心した
顔をして元の位置へと無言で戻った。野次馬ではないと分かったのか。様子を見るためな
のか。その警官の後ろ姿を視界に納めながら、祐子は友樹の右腕にしがみついた。
数日前のように、彼はそれを放そうとはしなかった。その安堵感で、一瞬夏美が死んだ
ことを忘れそうになる。しかし、小刻みに震える友樹の手のひらが、祐子の腕を掴み返し
てきた時、祐子は我に返った。友樹は、今何も考えられないだろう。ショックを受けてい
るどころか、立っていることさえやっとのようだ。祐子が、しっかりしなければならない。
どうして夏美が死んだのか、そのことを知っているのも祐子だけだろう。ここで、うっか
りミスをしてばばを窮地に追い込むことには出来ない。だが、口はそれを伝えたくてムズ
ムズした。ばばは、恐らく祐子のこの性格を知り尽くしているので、社に近付くなと警告
したのだ。祐子が黙っていられないと分かっているのだろう。
「友樹、向こうで少し休もうよ」

返事もすることがない彼の腕を静かに掴むと、祐子は顔を覗き込むようにして一歩踏み
出す。彼もあらがうことなく足を出すので、ほっとした。規制線を避けるように、あちこ
ちに立っている人をかいくぐる。向かった先は、昨夜露店が並び、やぐらが立っていた広
場だ。事件の騒ぎのおかげで、翌日早朝から解体されるはずの店全てがそのまま残ってい
る。だが、田舎のいいところはゴミを全て綺麗にまとめられているので変な臭いなどは全
くない。わたあめ、と看板が掲げられている店の、店員用に置かれた丸い椅子に祐子は友
樹を座らせた。祐子も、隣の店から別の椅子を運んできて腰掛ける。その間数秒、友樹は
気分が悪そうに口元を抑え続けていた。
「……大丈夫？　なんか飲む？」
暑さのせいではない。森の上では、カラスがいつも以上に泣きわめき飛び回っている。
奴らは都会のゴミを漁る。田舎にいるものは、動物の死骸や人間の落としたものを食らう。
もしかして、すでに夏美の遺体があるのを目ざとくみつけて狙っているのではないか。ど
こかが旨そうだと物色しているのではないか。死体から目を離す瞬間に食いついてくるの
ではないか。想像して、祐子は友樹に負けないくらい気分が悪くなった。どこかで吐けな
いかと、周囲を見渡す。森に入れば問題ないだろうが、友樹にそんな失態を見せたくはな
いので必死で込み上がってくるものを飲み下した。すると、友樹は弱々しい声音で呟いた。

「俺、見ちゃったよ。夏美の死体……」
「え……」
その言葉に吐き気も一瞬だけ吹っ飛んだ。すぐに彼への心配が沸き上がる。死体、とはどこまで見たのだ。祐子は気を失っていたため、夏美がどうなったのかは分からない。足がないのか。首がもげているのか。目玉をくりぬかれているのか。あの蜘蛛ならば全てが可能だろう。友樹も、吐き気を堪えるように、一度大きく息を吸った。
「昨日、祭りのあとあれから友樹はすぐに帰ったの？」
祐子が友樹に近づき、背中をさすりながら聞くと、彼はぐるりと力無く後ろを振り向いた。その視線の中に、疑問が光る。
「祐子、お前も祭り来ていた？　会わなかったよな。あれからって言うことは、お前は俺たちのことを見ていたのか？」
はっと唾を飲み込む。ごくり、と喉がなった。陰から、一部始終を見ていたとは言えない。
「あ……ああ。見かけたの。帰る時にね。夏美が真っ白の服を着ていて、友樹が隣にいたよ。社に向かっているみたいで、声をかけても邪魔かと思ったからすぐ帰ったんだけどね」
まさか、あの後に社に入ってばばの蜘蛛に襲われたなど、口が裂けても言えない。友樹は納得した様子で頷いた。
「そうだったんだ。邪魔、とか言うなよ。でも、夏美の死体は首が……首が、ほとんど取れかかっていて……」

想像しただけで、さきほど飲み下したものがせり上がってきそうだ。友樹が真っ青な顔
をしているのも当たり前だ。ただ、祐子からそれを詳しく聞く気にはなれない。しかし、
友樹は誰かに聞いてほしかったのだ。そして、その役は今祐子しかいない。うらめしそう
に祐子を一瞥した後、友樹は苦しそうに口を開いた。彼も祐子が聞きたくないことくらい
分かっているだろう。それでも、自分の中に留めておくことができないのだ。
「何か動物の……牙のようなもので食いちぎられたようだった」
「牙……。もしかして、第一発見者って」
祐子の問いに、友樹が悔しそうに頷いた。
「……俺だよ。最後に見たのも、最初に見つけたのも、俺だ。夏美が……笑って大丈夫っ
て言うから、俺。こんなことになるなら何を言われても、おっちゃん達に腕を折られても
側にいるんだった」
「そんな……。そんなこと出来なかったでしょう？　友樹が自分を責めることはないんだ
よ。大丈夫。全部吐き出せばいいよ」
祐子は、涙をこらえて唇をかみしめている友樹を胸の中へと導いた。彼は、大人しく祐
子の胸に自分の顔をおさめた。そして、宥めるように頭を撫でられて安心したのか、次第
に涙をこすりつけるようにと祐子の胸に自分の顔を押しつけてきた。
「大丈夫だよ。大丈夫」
言い聞かせるように、何度も何度も繰り返しそう呟いた。すると、荒い息を吐いていた
友樹の呼吸もだんだん緩やかになっていくのが分かった。もう少し

だ。祐子がそう思った
時、背後から野太い声が飛んできた。それは、せっかく祐子が作り上げた空気を台無しにするには充分だった。必要以上に靴を土に擦るような音を立てて向かってくる。
「君たち。第一発見者というのは本当かね」
二人が振り返ると、そこにいたのは恰幅のいい男性だった。ほとんど真っ白になっている頭を撫でながら、友樹を見ている。祐子が返事をしようと口を開けたが、彼のあまりの腹のでっぱりに言葉が詰まり、視線が腹に集中する。それは子豚が一匹腹におさまっているのではないかと思うほど膨らんでいた。男は祐子の視線に気づいたのか、その腹を今度は撫でた。息を大きく吸う音が祐子に聞こえたかと思うと、友樹が答えた。
「はい。俺ですけど」
「そうか。君が、あの前田さんに知らせて、彼が通報したんだね？」
彼の言葉に祐子が後ろを向くと、離れたところにある別の露店の中で、前田も警察と話をしているようだ。その顔色も友樹と勝負出来るほどの青ざめかただった。祐子は第一発見者ではないというのは、大きく男の気を逸らしたようだ。今度はいくら祐子が視線を送っても、彼の視界に自分が入っているとは思えなかった。友樹は、その男の視線を一心に受けて頷いた。
「そうです」
「君は、なぜ今日ここに来たのかな？　後かたづけかな？」
その響く声は、お腹以上に存在感を示した。たとえ何もしていなく

とも、彼の目つき、
腹、そしてその声があれば誰でもすくみ上がってしまいそうだ。もしも罪を犯していたな
らば、真っ先に白状してしまうかもしれない。祐子は、咄嗟に目を逸らしてしまったが、
すぐにその行動が失敗だったのではと思った。しかし、今更もういちど視線を合わす気分
にはなれなかった。目が泳いでしまう。それをこの男だけでなく、友樹に悟られるのが嫌
だった。
「被害者の女の子が、彼女なんです。彼女が捧げ物になっていたので、僕が朝一番で迎え
に来る約束をしていました。ドアを開けたら、彼女はもう」
せっかくおさめたはずの感情が、また膨れあがった。友樹はすがるように祐子の腕を掴
み、男がちらっとその行動に視線を送る。念のため、と言って警察手帳を出すと、確認するように前田の方を振りかえる。刑事は、自分のことを細川だと名乗った。名前とは意図せず体型と正反対だ。
「そうか。あれほど捧げ者なんぞくだらないものはやめろと言ったのを聞かないからだ。よし、じゃあ君。悲しいだろうが、あの方と同じく話を聞かせてもらえるかな」
そして、祐子の方を、チラリと見る。お前は何だ、といわんばかりだ。祐子はすぐに答える。
「私は、彼女の幼なじみでした。と言っても、普段はここに住んでいないので、祭りに遊びに来ただけなんですけど。でも……」
男は、まだ何かを訴えようとする祐子の顔の前に片手を出すと、それを止めた。鼻の前に突きつけられたそれからは、意外にも香水の香りがする。
「分かった。君だけ、さぁ行こう。歩けるかな？」
男は友樹の腕を半ば強引に掴む。引きずられるように立ち上がった

友樹は、まだ少しだけ潤んだ瞳で祐子を見ると、素直に彼に同行するようだ。まだ彼と話したいことはある。

「あの、友樹は」

関係ない。そう言いたいけれど、口からその言葉は出てこない。もし、ばばが捕まることにでもなったら、自分の未来に影響しかねない。ぐっと拳を作り、それを血が出るかと思うほど握りしめる。

「戻ったら電話するよ」

その一言を最後に、友樹はもう振り返らなかった。

＊

足に力が入らない。後ろで祐子が見つめているのが分かっても、友樹は振り向く気力さえなかった。どうしてこんなことになったのだろうか。昨夜、あそこで夏美の手を離さなければよかったのだろうか。

朝方、迎えに行くのはもっと遅くてもよかった。しかし、いくらただの伝統とはいえ、心配になって来てみた。今思えば、虫の知らせだったのだ。社は昨夜と同じように建っていた。地震があったわけでも火事の知らせを受けたわけではないのだ、当たり前だろう。そこに、社が存在するというだけで、まずはほっと胸をなで下ろす。朝日は顔を見せたばかり。布団の中で、夏美はまだ転がっているだろうか。むふふ、と嫌らしい笑いをしてから、ごほん、と咳を一つした。だが、その笑みもつかの間、扉に手をかけると鼻を刺すような臭いがした。一瞬手を止めその正体を探ろうと首を一周回してから、見えない中へとまっすぐ顔を向けた。嫌な予感がした。

そして次の瞬間、それを思い切り引き開けたのだ。彼の目に飛び込んできたのは、のど元をざっくりと切られ、辺り一面に血をまき散らして死んでいる夏美の姿だった。助けを求めようとしていたのか、うつぶせになったその胴体から、扉のほうへとまっすぐに右手

が伸びている。両目がしっかりと開いており、扉を睨み付けている。その姿を見た瞬間、声の発し方が分からなくなった。喉が詰まり、息が出来なくなった。夏美の目がしっかりと友樹を捉えていた。

「ひっ……」

腰の力が抜ける、とはまさにあの時のことだ。四つん這いになり、動物のような格好で社から這い出ると、絡まる足を必死で言い聞かせながら前田がいる公民館に走った。何かあった時にと、みんなで泊まっていたのだ。夏美も警報を持っていたはずだ。何かあればそれを鳴らせと言っていた。なぜ彼女はそれを使わなかったのだ。何事かを喚き散らして公民館に飛び込んだ友樹を見て、前田は飛び起きた。しどろもどろで事の成り行きを説明すると、前田までもが動揺した。受話器を上げて警察に電話をしようとも、警察が何番かを忘れてあたふたとする。数人がその騒ぎで目を覚まし、前田の代わりに電話を奪い取って連絡を入れた。その一部始終を見ながらも、友樹は一切動けずに床に踞っていた。無力だ。生き返らせることも、警察に連絡を取るということも自分では出来なかった。ただ、こみ上げる後悔と戦うばかり。なぜ、という疑問を繰り返すばかり。確かなことは一つだけ。夏美は死んだのだ。

「少しは落ち着いたかな？」

その声にハッとして友樹が俯いていた顔を上げると、目の前にはここへ連れてきた刑事、細川の顔があった。初めは友樹を容疑者のように扱っていたこの男も、話をしていくうちにその誤解は解けていったようだ。今では、梅こぶ茶が机の上で湯気をたてている。

「ええ。少しは。結局、夏美が死んだ原因は」

前田も同じように車で山を下り、この警察署に連れてこられた。友樹同様、今も別の部屋で取り調べをうけているはずだ。二人ともこのまま無罪放免になると先程この男は言っていた。

「詳しくは解剖が終わらないと分からないけど、とにかく首が裂かれていた。失血死だね」

今はもう圧迫感をこの男から感じない。夏美の死体を思い出すと、それだけで息が苦しくなるが、彼女が死んだのだということは理解できるようになった。少しだけ申し訳なさそうに、刑事は続けた。

「ただ、うーん。まぁ、何か分かれば君にも連絡を入れるし、今日は帰って良いよ。夏美さんのお父さんもさっき来てね。彼はまだ時間がかかりそうだ。君は、一緒に来た前田さんと帰るんだろう。向こうも終わるだろうから。さ、これを飲んで」

まだ手を付けていない湯飲みをすっと押し出してきた。不思議な気分だった。夏美の遺体があるここを離れたくないような、疲れを休めるために早く自宅に帰りたいような気分だ。そうだ。きっと祐子も心配しているだろう。夏美の父親は、彼女の遺体に付き添っていたが、我を失って泣き叫んでいた。今は、会えない方が良かった。励ます自信も、謝る勇気も出ない。友樹でさえ、誰かに謝って欲しいくらいだ。両手で湯飲みを掴むと、手のひらにほんのりと温かさが伝わる。口元に持っていくと、梅の匂いが鼻をくすぐる。そういえば、朝から何も食べていない。気分が悪くなることを恐れながら湯飲みに口を付ける。一口流し込むと、それは静かに胃へと流れていった。口の中が想像以上に乾いていたことに気づく。だが、さらにもう一口飲む気にはなれなかった。ふっと息を吐き出す。今日初めて息をした気がする。それほど、目まぐるしかった。ひとつだけ備えられた窓は閉められたままだが、そこから差し込む光は数十分ほど前から消えていた。ただ、刑事達に電気をつける気はないらしい。その前に帰すつもりなのだろう。いつの間にか、他の刑事もいなくなっている。

「前田さん……」

彼も、夏美の死体を目にして精神衰弱していることだろうと友樹は思った。三好の山全体に言えることだが、あの年代の大人は子供に懐かれている。子供の時はいい遊び相手になってくれたし、大人になれば頼る相手になる。男同士になれば話は通じやすいし、女は笑いからかい合いながらも上手くやっている。つまり、生まれた時

からかわいがってもらっているということだ。友樹が寝床に戻り、夏美の死を伝えた時の前田の動転振りを思い出し、彼と会うことに気の重さを覚えた。今、誰かと悲しみを分かち合う気分には到底なれない。かといって、顔を見ればなぜ夏美を捧げ者に選んだのだと責めてしまいそうだ。自分の身体がどういう反応を起こすかが予想できないことが、さらに怖い。

「彼が、祭りの責任者だったというのは？」

「はい。確かです。……夏美を選んだのも彼です」

細川は、まるで友樹の心を読みすかしたように質問をした。夜になり風が出てきたようだ。窓が風に揺さぶられてガタガタと音を立てる。

「気を悪くしないで欲しいのだがね」

その窓へと一度視線をやってから、細川は友樹に話し掛ける。なぜか、これからが本当に細川の聞きたいことではないかと思った。そのために周りの刑事も外へ出たのではないだろうか。そんな細川に、友樹は微かに頷いた。二人でしか話せないことなのか。前田に関係しているのだろうか。次の言葉を待つ緊張で、口の中がどんどん乾いていく。湯飲みに手を伸ばすとそれは最後の一口だった。ゆっくりと飲み干してから、たまに夏美の家で飲むお茶を思い出す。あれは彼女の家でしか飲めないうまいお茶だった。こんな梅の味がついていても何にもならない。普通のお茶のはずなのにひと味違う、自分のカップを使って彼女の前であのお茶が飲みたい。

「山の上の、つまり村の人間は、まだ捧げ者という習わしを行っているね」

細川は空席になっていた友樹の前の椅子に腰掛けた。空になった湯飲みに目をやりもう一杯欲しいことを訴えるが、細川は動かなかった。話さないと茶をやらない、ということだろうか。

「はい。でもそれは一つのイベントみたいな空気だったんです。俺たちの世代にも確かに蜘蛛の神に纏わる伝承はあります。子供の頃に聞くでしょう、普通。東北の方にもありますよね、なまはげ、で

したっけ。そんな感じです。そうですよね？」
友樹はありのままを伝えた。確かに夏美は捧げ者になった。だが、それは村の小町を決めるようなものだと思っていた。蜘蛛の生け贄になるほど美しい、誇りにすべきことだったはずなのだ。だが、細川は頷かなかった。
「確か五十年に一度だったよなぁ。俺たち麓の人間の間には、もうその伝承は生きていないんだよ。祭りに行く人間も、警備をする警官もいる。だが、それは一つの祭りを楽しむに過ぎないんだ」
友樹には細川の言うことがよく分からなかった。麓の人間も、祭りの時は山を登ってくる。普段だって一つの会社で一緒に働いている人々は大勢いる。こんなに狭い地域で、伝承が違うものか。村では蜘蛛の言い伝えは誰もが知っている話だ。細川が地元の人間ならば、知らないなどあり得ないと思う友樹は、彼の言うことに納得出来なかった。夏美はそんなに狭い範囲で選ばれたのではない。彼女は、大役を担っていたのだ。そう信じたかった。
「実際ね、私ども警察の間では、捧げ者が今年行われていることさえ知らされていなかったんだ。あれは、五十年前に起きたことで打ち切りにされたはずだった。復活祭などというものは不幸の始まりでしかない。現に、そうじゃないか。あれは蜘蛛の復活などではない。不幸の復活なのだよ」
この男はいきなり何を言い始めたのだ。友樹は瞬時に怒りが沸いた。捧げ者になり死んだ夏美を馬鹿にしているのだろうか。祭りをやること自体が不幸だというのか。どうして自分たちがそれに巻き込まれなければならなかったのだ。
「どういうことっすか、それ。」
怒りが気力となり、目に力が込められる。膝の上に乗った拳を固く握りしめる。
「いや、言っただろう。気を悪くしないで欲しい、と。全てを否定しているわけではないんだ。地域によって言い伝えはあるものさ。それに振り回されるのも当然のこと。どこか西の方では、絶対に入

ってはいけない土地というのもあるらしい。入ったら呪い殺される。それを逃れるためには、鳥居だか塚に向かってなんとも滑稽な謝り方をしなければならないようだ。だが、その土地の者には重要な問題だ。それで本当に死んだら尚更周囲に恐怖を与える。信じることも必要さ。日本に文化があるように中国にもアメリカにも文化がある。同じことさ。いや、その土地には土地の問題があるということさ」

饒舌に語る男の口を見ていると、唇の端に小さな唾が溜まっていた。話の息をつく所で、

細川はそれを吸って口の中に戻す。じっと見ていると、なんだか気分が悪くなりそうだ。友樹は、敢えてその口元から視線を逸らすと、反抗するようににらみ返して言った。いまいち言っていることが掴めない。

「俺も夏美も、蜘蛛自体を崇めていたわけではありませんよ。言いましたよね、イベントだったんです。次は五十年もないんですよ。生きていて一度かもしれない。特に火を焚いて一晩中祈るわけでも、お金を貢ぐわけでもない。そういう信仰論は村を馬鹿にしているのと同じですよ」

細川は気を悪くするな、と何度も言う。それは無理な話だ。信じたいなら勝手に信じろ。彼の言いたいことはそれではないのか。細川は、友樹を見て小さく溜め息を吐くと、白い髪の薄くなっている部分をひと撫でした。困ったように苦笑いすると、机の上で両手を組んだ。次に言葉を吐くときは、先程よりも幾分柔らかい口調になっていた。

「まぁ、待ってくれ。今現在、いくらうちの署の管轄にいる君たちの村とはいえ、そういう事情に頓着する気はないよ。君は村の若手で大切な存在だろうね。だが、若いから知らないこともある。っと、それは知らされていない、というだけの意味さ」

細川は、今度は若者を馬鹿にするかのような口調に、友樹の視線が鋭くなったことに気づいて最後の一文を付け足した。

「俺が知らされていないこと？　村のことで、ですよね。どういうことですか」
友樹はどくん、と心臓が脈打つのを感じた。村について知らないことが自分にあるというのか。村に住んでいる人間は、ほとんど顔と名前が一致する。街へ出ていった親戚に人間も多く、現状でそれが分かるかと言えば不明だが、それでも生まれ育った村に何があるか誰よりも知っている自信がある。細川は、やはり自分を疑っていて、こうして苛つかせることで何か吐くのを待っているような気がした。
「五十年前、夏美さんと同じように、捧げ者として社で一夜を明かした少女が死亡しているんだ」
「え？」
気に障ることを言われたらまた言い返してやろうと決めていた友樹は出鼻をくじかれる形となった。五十年という単位は思いの外大きくて、前回の捧げ者が誰だかを問うことはなかった。夏美もその疑問は抱いたことがなかったに違いない。もし捧げ者なっていた女性が生きていても、現在七十歳ほど。周りの噂で聞かない限り、亡くなったに違いないのだ。そうなれば、子供は子供なりに気を遣う。大人達の話の話題にならないことを、むやみにつつくほど無知ではない。そう考えてみれば、大人達でその話を聞いたことはない。嫌な思い出があったということか。あまりにも想像とかけ離れた話だったので、友樹は細川に何を言うべきかも分からなくなってしまった。呆けたような顔で発せられた言葉が、それだけだった。
「やはり知らなかったのか。私達警察の中でも、それだけ前の事件だと世代が変わっているから知らない者も多い。いや、私だってそんな年齢ではない。もちろん直接その事件に関わった訳ではないよ」
「それは……。どういう事件だったんですか」
聞いてはいけない気がした。友樹は、自分たちが大人に騙されたとは思いたくなかった。大人達は五十年前の事件を知っていて、どれほどこれが危険な習わしだと承知の上だったのだろうか。前田は、

夏美が可愛いから選んだのではないというのか。憎かったから、死んで欲しかったというのか。いや、それほど危険ならば夏美の父親が反対していたに違いない。細川の話を聞きたいのに、聞きたくない。先程強く握りしめた拳が、小刻みに震える。

「いや、あんまり一般人に話すことは出来ないんだけどね。……よし、それなら少しだけ教えてあげよう。ただ、これは過去の話だ。今、余計な詮索をしてはいけないよ」

「はい。お願いします」

暗くなっていく部屋が、話の内容に妙な気味の悪さを醸し出した。友樹は刑事の勿体ぶった言い方にケチをつけそうになったが、じっと歯を食いしばって我慢した。しばらくは黙るんだ、と自分に言い聞かせる。細川は、そんな友樹に向け人差し指を突き出すと、行動とは裏腹に小さな声で話し始めた。

「事の始まりは江戸時代だ。この地域も昔からある、いわば伝統的な土地だからね。勉強しただろう。徳川五代将軍、綱吉公の時代さ。一六八五年、彼は生類憐れみの令というお触れを出された。そう、犬公方様のお達しよ。これは、こういう成文法が実際に存在するわけでなくてだな、いくつかの法令を総称してこう呼ぶんだ……おっと話が逸れてしまった」

細川は先程までの仏頂面を嘘のように消し、今やにこやかに歴史について語り始めた。友樹の父親も、最近は休日になれば母親を連れて博物館や城を求めて旅行へ行くようになった。その同じ世代であろうこの男も、やけに饒舌だ。この年代の特徴なのだろうか。細川が自分で脱線に気づいたことで、友樹はほっと胸をなで下ろし、相づちを打つように頷いた。

「そのお触れは例外なく、全国に渡ったさ。いや、実際には魚を捕って食べるくらいなら場所によっては捕まらなかったらしいんだけどな。長崎なんかじゃ豚や鳥を食う習慣が根強くて、なかなか徹底しなかったらしいぞ。そうだよなぁ。今更俺たちだって、はい、明日から野菜と米だって言われたって、腹がへっちまうよな。たんぱ

く質ってもんが、ああ、すまんな」
友樹が今度は射るような視線を向けると、細川は何度か咳払いをして話を戻した。
「つまり、その頃に君たちの村の伝承は起こったとされている。私も話を又聞きしている人間だから、伝承についても深くは語れない。だが、一人の少女が誤って大きな蜘蛛を殺してしまったのだ。少女は法令を恐れてそっと神社に隠したのだ。毎日自分の少しの食事を残しては、蜘蛛に供えた。それも子供のやること。長くは続かなかった。蜘蛛の死体が腐る前に、大人達が気づいたのだ。役人に見つかる前にと、蜘蛛は処分として燃やされ、娘は隔離された。娘が殺される心配をしたのではない。村から犯罪者が出ることを恐れたのだ。この村に役人の目が集中して欲しくないからね」
「そんな……。それが伝承の真相なんですか」
「いや、そうなのだよ。幸い、蜘蛛殺しが見つかることはなかった。しかし、娘はその年急に流行病で命を落としたのだ。その後も娘の親族が続々と死に、しまいには村人も死に始めた。誰もが蜘蛛と娘の呪いだと思ったさ。それで、村人は亡くなった少女がたいそうな美人だったことから、一人の美しい少女を社に泊まり祈らせた。そうしたところ、その流行病が止んだのだ。そしてそれを忘れた五十年後、また疫病が流行った。その村だけだったのだよ。試しに娘を一人社に泊まらせると、疫病は消えた。その五十年後は大火事さ。人間は学ぶ。五十年に一度、娘が社に泊まる習わしが出来た。その娘の夢にな、必ずその晩蜘蛛が出てくるというのだ。娘は自分が蜘蛛に焼かれる夢を見る。しかし、実際に死んだのは前回が初めてだった……」
友樹は、その話を聞いてもいまいち実感が湧かなかった。その江戸時代の習わしが現代まで続いていて、その娘の役目を夏美がやったというのか。そんなこと、誰も教えてはくれなかった。祭りなど、一晩楽しく騒げばそれで終わるものだと思っていた。
「友樹くん。さっきも言った通り、蜘蛛ではなく不幸が復活しない

ことを願っての祭りなのだよ。そんなものは、現代を生きる人間には関係のないことなのかもしれないがね。ああやって屋台が並ぶようになったのも戦後しばらくしてからさ。全国の祭りを商売に練り歩く人間が、由来も知らずに店を出し、次の年がくればそれが友達を連れてくるようになった。実際は質素な儀式だったらしいよ」
「どうしてそんなしきたりが定着しちゃったんでしょうね」
「さぁなぁ。しきたりなんてそんなものよ。普通はなぜ始まったのかも意識しない。あぁ、この話の大筋は本当さ」
「……そんな昔の話を俺にして、一体どうしようっていうんですか！　それが夏美の死んだことと関係があるんですか？　俺を責めているんですか」
細川が、この儀式の話をする意図が分からなかった。不幸はすでに友樹に降りかかってしまった。どうして、もっと早く止めさせてくれなかったのだ。そう思うと細川まで憎くなりそうだ。それとも、そこから何かを考えろということなのだろうか。友樹が細川の話に警戒し始めた時だった。部屋のドアを外側から誰かがノックした。
「いや、すまなかったね。よし、じゃあ行くか」
刑事のその一声で、友樹もパイプ椅子をゆっくりと引いた。
友樹が取り調べ室を出ると、ドアの前には同じく刑事に付き添われた前田がいた。ノックをした誰かは、前田が来たことを告げる合図にしたのだろう。もしかすると、初めからそう決められていたのかもしれない。前田には昨日の意気揚々とした姿は跡形なく消え、今や背中を丸めて小さくなり廊下の椅子に座っている。そのはずだ。前田は、夏美のことを人一倍可愛がっていた。蜘蛛の捧げ者としても、村で一番の美人がなるという伝統は、夏美には少し荷が重かった。もう少し年下に位置する少女はもっと美人の子がいる。それを、なんだかんだと夏美に決めたのは前田だった。彼が、夏美に決めなければ、こんなことは起こらなかったかもしれない。いや、起こったとしても夏美が被害者にはならなかったかもしれない。そう思うと、目の前にいる男に、友樹はつかみかかりたくなった。しかし、

この顔を見れば分かる。前田も同じことを考えて自分を責めているのだと。
「友樹。ひとつ聞きたいことがあるんだけどな」
警察署の前から乗り込んだ帰りのタクシーの中で、友樹の右側に座る前田がぽつりと言った。ぼんやりと窓の外を見ていた友樹が力無く前田を見ると、彼は警察署にいた時とは打って変わってしっかりとした視線を向けていた。
「何？」
余計なことを口走らないためにも、友樹は今、前田と口を利きたくはなかった。彼は、同じ村の一員であり先輩である。昔はただの絡みやすいおっちゃんだったが、大人の世界に足を踏み入れつつある友樹には、その境目が分かってきていた。だからこそ、今は話したくないのだ。その前田の視線が胸をざわつかせる。まただ。何か嫌な予感がする。
「何日か前に会った祐子ちゃんだよ。いたよなぁ？　ばあさんとこの。あの子、まだいるのか？」
友樹にとって、まさか祐子の話題が出るとは思っていなかったので、内心驚いた。ぼーっと宙を彷徨っていた視線が、はっきりと定まる。祐子は昨夜祭りに行ったと言っていた。それならば、やぐらの上でずっとマイクを持ち騒いでいた前田は気づかなかったのだろうか。祐子が祭りに行かなかったという可能性はあるだろうか。
「祐子？　確か祭りが終わったら街へ帰るって言っていたと思うよ。今朝は俺も会ったよ。おそらく夏美のことを聞いて社に来たんだと思う。前田さん、何か話でもあるの？」
一瞬、夏美を失ったという悲しみより、なぜそんなことを聞くのかが気になった。夏美の死に祐子が関わっているとでもいうのか。今朝、祐子はどんな様子だっただろう。自分が涙と吐き気を堪える

のに一生懸命で、彼女の表情まで見ていなかった。そういえば、祐子のばーちゃんは何をしていたのだろう。毎年、一度は祭りで見かけたはずだ。夏美も今年は祐子がばーちゃんと祭りに行くと言っていなかっただろうか。

「いや、そういうわけでもないんだがな」

友樹の表情を汲み取ったのか、前田が今度は窓の外に顔を向けた。暗闇の中、タクシーの窓ガラスに前田の表情が映る。その顔は、眉間に皺が寄っていた。

「おっちゃん。俺達が、三人で社に行った日の後、祐子に会ったの？　俺、今朝会ったけど……。もう帰ったかもしれないな」

あの社に行った日、祐子は友樹が前田達に囲まれている間に消えてしまった。夏美が言うには、ばばに頼まれた用事があるから帰ったというのだ。そして、祭りも一緒には行けない、そう言っていたと。少しおかしいとは思ったが、友樹にとってそれは大した問題ではなかった。

確かに、祐子に恋をしていた時期もあった。しかし、そんなのはガキの頃の話だ。初恋は永遠だ、とか、一生その人と再会した時に好きでいられると思ったら大間違いだ。幸運なことに、祐子は昔よりも美しくなっていたが、それは友樹にとってはマイナスに作用した。なんだか自分とはかけ離れた存在だったのだ。そう通告された気がした。もしも祐子が少しでも早くここへ戻ってきていたら、捧げ者の役目は彼女がやっていたかもしれない。前田もそう考えているのだろう。

「そうか。帰ったかもしれないか。……それにしても、あの子は随分綺麗になっていたなぁ。それに手足も細すぎだっていうくらいに痩せていたなぁ」

「ああ。そういえば、彼女今度デビューするらしいんだ。モデルだか、歌手だか。なんか世界が違うよなぁ……」

「そうか。俺が昔、川で助けた時はあんなにやんちゃな子だったのになぁ。子供は変わっちまうなぁ。ばーちゃんも寂しいだろう」

「俺も、一つだけ聞いていいかな」
友樹の言葉に、前田が振り返った。返事をしないが、それが無言の肯定だと受け取り、友樹が続ける。タクシーの運転手は警察署の前にいた。今日の夏美の騒動について少しは知っていることだろう。それでも余計な噂を立てないよう、友樹はその声を最小限に落とし、前田の耳に向かって囁いた。
「夏美がやった捧げ者、五十年前にも誰かがやったんだよね。その人が死んだって本当？」
その質問で前田の顔は大きく歪んだ。窓の外を向いていたら決して分からなかっただろう。しかし、向かい合っていた二人にはお互いの顔がよく見えた。前田も、友樹の反応で自分がした顔に気づいたのか、その顔をすぐに伏せた。
「おっちゃん、何か知っているのか？」
さっきの刑事との話は中途半端に終わってしまった。その死んだ娘が誰だったのかも、なぜ死んだのかも聞き忘れてしまった。電話をしたからといって、あの男や他の刑事が教えてくれるとは思えない。それならば、村の住人に聞くしかない。友樹は恋人を失ったのだ。前田の様子は明らかにおかしかった。
「友樹。お前、そんなことを誰に聞いたんだ。そのことは、誰にも話すんじゃねぇぞ」
前田は噛みしめるように呟くと、窓を上部数センチだけ開けた。夜風が車の中に吹き込んで頬を冷やす。
「なんで！　教えてくれよ」
友樹は食い下がったが、前田はそれから口を開こうとはしなかった。友樹の苛立ちは募るばかりだ。誰も肝心なことは教えてくれない。
外は暗く、周りの森が嫌に音をたてて唸っている。何かが今にも飛び出して来そうだ。車に体当たりをして友樹までも飲み込んでしまう、そんな気がした。夏美を殺した、何かが。友樹は、ふと考えた自分の妄想を、首を数度振ることで追い払った。そんなこと、ある

わけがない。車の中は冷房で冷え切っていたが、それが外の生ぬるい気温で暖められていく。途中で運転手が後ろに向かって冷房を止めるかを聞いてきたが、友樹も前田も自分の脇のそれぞれ左右の窓から外を眺め、それに答えることはなかった。バックミラーに写る運転手の顔が少しだけ歪んだが、彼は二度目の質問をすることなく、ただ無言でスイッチを切った。

＊

警察に連れて行かれる友樹の後ろ姿を見て、祐子はどうしても引き留めたかった。彼は、

何も悪くないのだ。それを知っているのは、祐子とばば。ばばの言葉を思い出しても、蜘

蛛になっていたときの記憶はあるらしい。それならば最初の晩、どうして祐子を殺そうとしたのだろうか。ばばは、覚えているのだろうか。聞きたい。しかし、怖くて聞けない。何度自分の中でこの葛藤を繰り返しただろう。夕飯を食べた後、両親から電話がかかってきた。二言三言体調などを聞かれ、元気だと答えてから、ばばにすぐ受話器を渡した。

それからばばは随分長い間話していた。会話の中でたまに夏美の名前が出てきたことから見ても、事件のことは話したようだ。そうなれば、帰ってこいと言われるのが目に浮かぶ。

夏美が死んで、ばばに帰れと言われた。自分の将来のためにも帰ろうと思った。しかし、祐子はまだ帰りたくなかった。悲しさは、意外にも薄かった。それよりも脳裏に浮かぶ顔がある。友樹の悲しい顔を最後に別れたくなどないのだ。それを思い出しながら、祐子は縁側の窓から足を垂らして風に当たっていた。どうしても会いたい。その時だった。街灯もほとんどない祐子の家の前の道に、車のライトが垣根を照らした。一瞬だけ祐子の顔に当たったその光も、車が通りすぎてすぐに暗くなった。ほとんど夜に車が通ることなどない。もしかしたら、友樹が乗った車ではないか。ばばは、廊下に置かれ

た電話を使用している。縁側からならば、出かけても気づかれないだろう。いつもの薬を飲んだせいで少しだけ頻脈になっている気がするが、それで出かけても支障はないだろう。洗濯物を干すときに履くサンダルが一足転がっている。それに足を突っ込むと、祐子はばばがいる廊下を振りかえることなく庭を突っ切った。車の音はすでに遠ざかり、夜道に目を凝らしてその行方を追う。友樹の家は、祐子の家より森に近い位置にある。足下ははき慣れないサンダルで何度か躓きそうになる。他の物に見向きもせずに角を曲がると、そこに、彼はいた。家の前で一台のタクシーから、友樹らしき人物と、もう一人が降りてきたところだった。なにやら友樹が財布を出して金を払おうとするのを、男が頑なに断っている。そんな二人を尻目に、運転手は受け取る物だけ受け取ると、客になど見向きもせずに再びアクセルを踏んだ。

一本道の道路だ。タクシーは数メートルバックをして方向転換をすると、祐子の立っている方を向いた。ライトがパッと祐子の姿を照らした。そのおかげで、友樹が祐子の存在に気づいてくれた。今まで争っていた金をすっと引いてポケットにしまう。その動作と視線で、隣の男も祐子の方を振り返った。そこでやっと男が前田だと分かる。そういえば、彼も警察に話を聞かれていた一人だ。友樹と話をしていた時に、警察に通報したのは彼だと言っていたような気がする。祐子は、なんだか見てはいけないものを見てしまった気がして立ち去ろうかとも思ったのだが、一歩先に動いたのは友樹だった。前田は、彼女がこんなところにいるのを驚いているような、それでいて祐子の全身を眺めては微笑んでいる気がした。背筋がすっと冷たくなる。この男も、一味なのだろうか。そう、蜘蛛となっていたばばの……。この男ならば、やぐらの上から村人を眺めることも出来た。祭りの一切の管理と流れも把握しているだろう。ばばが社に来たのも、この男の手引きだったのかもしれない。ばばが、夏美を狙うと分かっていて、わざと夏美を捧げ者にしたのではないか。そんな考えが脳裏をかすめる。

「祐子？　どうしたんだよ、こんな時間に。ばーちゃんに怒られるぞ」
友樹はそう言いながら、祐子に近づいてきた。近くに寄ってみると、彼の目が赤くなっているのに気づく。夏美を、あんな無惨に失ったのだから当然だろう。それでも、祐子の心配をしてくれる。そんなことで、心がきゅっと悲鳴を上げる。祐子は、暗闇を背にして立つ彼の顔を見上げながら、可能な限り安心させられる微笑みを浮かべてみた。
「ううん、ちょっと。友樹のほうこそ心配になって……。夏美のおじちゃんは？」
友樹が警察に行ってしばらくしてから、夏美の遺体に泣いてすがりついている姿を見た後、おっちゃんの姿も見ていない。ただ、前田だけが離れたところから祐子達二人を眺めていた。
「あたし、多分もう帰らなくちゃいけなくなるから。またいつ来られるか分からないし。だから、最後に話せたらと思って」
「あ、ああ。そうなんだ。分かった」
友樹はそう言うと、前田の方を振りかえる。友樹の家の門の灯りに照らされていた前田の顔が、ゆっくりと頷いた。話が聞こえたのだろう。
「友樹。忘れろとは言えねえ。でも、しばらくはゆっくり休めよ」
前田はゆっくりと言いながら、友樹の肩に手を乗せた。それに対して、友樹はぎゅっと目を瞑った。頷くことは、納得だ。たとえ曖昧にでも、友樹は今夜眠れる気がしなかった。
前田に言いたい独りよがりな不満も、祐子の前では恥ずかしくて泣

けないという我慢と、
全部がごちゃまぜになって、その感情を抑え込むように目を瞑ったのだ。
「祐子ちゃん。ばーちゃんは家にいるかね？　夏美ちゃんの件で話があるんだよ。ちょっとお邪魔するよ」
　自宅に帰るのかと思いきや、前田は祐子の家に行くという。祐子は、それに驚き前田の顔を見たが、その時すでに彼は祐子の返答を待つことなく、通りの向こうへと歩き始めていた。
……どうしようか。祐子は、すぐに家に帰ろうかとも思った。しかし、この時間を無駄にすることは出来なかった。彼の話を聞いてあげたい。たとえ前田が家に行ったとしても、前田まで殺されることはないだろう。もしも、前田が仲間だったら尚更だ。話の内容は気になるが、それでも祐子は前田の背中から、友樹の顔へと視線を移した。
「外で平気……？」
ちらりと自宅を見た友樹だが、夏なので外でも話せること問題ない。家の中に入ると、
家族にまた一つ一つ説明するのも今はお互い面倒だった。
「うん。警察、大丈夫だった？」
夜の道は普通に話していても声が響く。友樹は、遠慮がちに祐子の腕に触れるとすぐ離
れた。そして、きょろきょろと周囲を見回した後に目で合図すると、祐子の家の方へと歩
き始めた。自宅に聞こえて欲しくないのだろう。祐子は何も言わずにそれに従った。友樹
の向かった先は、小さな井戸のある空き地だった。
祐子の記憶の隅にもある。昔はもっと大きな井戸だった気がしたが、今では本当に小さ
く見える。子供の頃に大きかったものも、今ではみんな小さくなってしまった。それはこ

こへ来るときにも感じたことだ。それが少しだけ悲しい。宝物を隠した土管も、草原のようにみえた草花も、大人の目から見ればなんてことのないただの空き地だ。思い出は、時間が経てば輝かしい光となる。しかし、その場所を実際に目で確かめるとそれは間違いだと気づく。なんということだ。反対に光を失ってしまう。変わっていない。変わっていないはずなのに、色あせて見える。これが、現実。

「警察で、俺、色々聞かれた」

「うん」

祐子が先に歩いていた友樹を見ると、彼は子供の頃にかくれんぼとして使用した土管の上に腰掛けている。この空き地の真ん中に、小さな街灯ともいえないような電灯があるので、彼の顔は見えるが下を向いているので表情までは見えない。返事をしながら、祐子もその隣に腰掛けた。不思議と今夜は虫が鳴いていない。いつも寝る時にはあんなにも耳障りだったのに。祐子は、そんな夜が前もあった気がした。

「でも、俺は本当に何もしていないんだ」

そんなこと百も承知だ。祐子は、彼に分かるように何度も力強く頷いた。

「分かっているよ。夏美は、本物の捧げ者になっちゃったんだよ。友樹には聞いてもらおうかな」

＊

祐子の切り出し口調に、友樹は顔を上げた。彼女の目に涙が浮かんでいるのは見なかったことにする。彼女は、少しナイーブになっているだけだ。そう思い込もうとする。

「実はね。あたしも、本当は彼とダメになっちゃっているの。だから、ここにその思いを吹っ切りにきたの」
「……そうなんだ」
まさかそんなことを言い始めるとは思っていなかったので、友樹はそれ以外に返答の言葉が見つからなかった。今はそんな恋愛話など聞きたくはない。それでも、祐子が帰るのだと思うと、はっきりとそんな胸の奥をうち明けられない。今はただひっそりと部屋で夏美の笑顔を思い出して眠りたい。こうしている間にも、刻々と夏美と離れる時間は近づいてくる。そう考えるだけで、自分だけが置き去りにされたようで、発狂しそうになった。置いていかないでくれ、死なないで！　そう叫びたくなる。別れただけならいいじゃないか。相手がまだこの世に存在するのだから。そう突き放したくなる。それに、祐子の態度を見ていても、そこまで一途に相手を思えるタイプとは、友樹には思えなかった。好きな相手が出来たら乗り換える、女がそうならたとえ男にされてもお互い様だ。愚痴を言っていないで、次の相手を捜せよ、そう思った。ここはお前の住む街じゃない。早く帰れと思う。
自分には夏美はもういない。しかも、誰だか分からないものに殺されたのだ。どう忘れろと言うのだ。次の相手など見つけられるわけもない。涙がまた溢れてきて、友樹は下を向いた。沸き上がるそんな感情すべてを押し殺して。隣では、祐子が切々と元恋人の不満をぶちまけているのだ。
「ちょっと、俺、無理だ。今度また帰って来た時にゆっくり話そうよ」
こんな時、夏美は人を気遣うことが出来た。自分のことよりも相手の気持ちを考えた。
それは彼女の家庭環境のせいだったかもしれない。それでも、それが夏美の一番の長所
だった。子供の頃、夏美が祐子にコンプレックスを頂いていたのを友樹は知っていた。外

見のかわいい祐子。甘え下手な夏美。子供の友樹は、迷わず初恋の相手として祐子を選んでいた。姿を見ればドキドキしたし、笑顔をみればかわいいと思った。夢を持って、それを叶え歌手になろうとしている祐子。母親を失ったことで、甘えることを忘れた夏美。あったかい家族で夫婦仲良く年をとっていくことだけを考えそれを幸せな夢をしていた夏美。

いつしか、それを叶えるのは自分だと思うようになった。しかし、そんな些細な夢さえも叶わなかった。考えるだけで吐きそうだ。後悔と、嫌悪感。沸き上がる、何かに対する怒り。その根元を突き止めることは必要なかった。今、ここを抜け出したいだけだ。

「待って」

無意識に立ち上がり帰りかけた友樹の腕を、思いの外力強く祐子が掴んだ。泣き顔を見られないようにと勢いをつけていたので、その反動で身体がよろめいた。

数日前、社でも同じ事があったような気がした。そう、あの時から友樹には分かっていたのだ。祐子が、意図して自分に近づいているということを。つまり、男の獲物として狙われているのだ、と。しかし、本人が気づいているのかは分からないが、それは昔の恋を思い出したからではないだろう。祐子がここでぐだぐだと述べているとおり、元恋人を忘れる道具にしたいのだ。それくらい、この年になれば分かる。そして、それを受け入れてあげるほど、もう祐子は身近な存在でも大切な女の子でもなかった。

むしろ、なぜこの状
況で自分勝手なことをするのか、と腕を振り払いたい怒りにかられる。それを必死で飲み
下して、友樹は掠れる声を押し出した。
「ごめん、離して。夏美に悪いから」
「そんなこと言わないで！」
祐子も立ち上がり、友樹の着ているTシャツに顔を押しつけた。
「ちょっ……！」
咄嗟に、こんなところを誰かに見られたら溜まらない。そう思った。
「離せよっ」
思い切り突き放してから、しまった、と思った。しかし、身体と心は直結している。こ
んなにも我慢できないということは、心が悲鳴を上げたのだ。それが夏美を失ったと分か
ってから堪えていたものが、一気に吹き出したのも事実だ。ただ、祐子にはなんの感情も
湧かない。慰めようとも、言葉をかけてほしいとも思えない。一緒に悲しみを分かち合い、
支え合おうなど、以ての外だ。ただ願うとすれば、一つだけ。ほっといてくれ。突き飛ば
された祐子は、友樹を驚いた顔で見上げていた。暗闇に二つの目が怪しげに浮かび上がる。
それは、恨めしそうであり、どこか悲しげだった。祐子は地面に尻餅をついたままだ。助
け起こすことさえ躊躇われた友樹は、小さくごめんと呟いてその場を後にした。

＊

暗闇の中、早足でそれが去っていく音を聞きながら、祐子は呆然と座っていた。まさか、

突き放されるとは思わなかった。そして置き去りだ。夏美だけでなく、友樹までも失ってしまったのだ。この村全体が、自分を嫌っているような気がした。

「あほくさ」

心配をしていた自分が惨めだった。これでは元恋人のときと同じじゃないか。傷ついている他人を心配しても、同じように心配してもらえるとは限らない。心配するだけ損ではないか。人間は優しければ優しいほど損をするのだ。強くなりたい。誰にも負けない鋼の心が欲しい。祐子は、目に溜まる涙に気づかない振りをして立ち上がった。感情なんてなくなればいいのに。悔しいことも悲しいことも感じなくなれる。そんなことが可能ならば、たとえ全ての大切なものを犠牲にしても構わない気がした。どうせそれさえも感じないのだから。祐子は、もう友樹の姿を目で探すこともなかった。

この虚無感はなんなのだろう。今まで掴んでいた全てのものが消えてしまったようだ。

襲われそうになる恐怖や、誰かに嫌われる恐怖とは違う。自分がどこに立っているのかも分からない不安感。どこへ進めばいいのか分からない、何を頼りにすればいいのか分からない。この世で一人ぼっちになったような孤独感。人間誰しも一人で生きていることなど承知の上だ。それでも、他の友達よりも自分が劣っている気がしてしまう。自分だけが持っていない気がしてしまう。それゆえ、他人にはないものを必死で手に入れようとしたり、持っていない物にだけ自信を持とうとする。それが特技であろうと、長所であろうと。形のある物だろうと、ない物だろうと、それは大切なことだ。自分の自信に繋がり、大きな場所へと導く糧にもなりうる。しかし、それに執着し過ぎることで視野は狭くなり、他人を心の隅で卑下するようにさえなってしまう。そうだ。祐子は、それが自分の外見でしかなかった。褒められ、自分でも努力をした。そのことで、外見の顕示欲は強くなっていた。

それが悪いことではない。しかし、外見を使って何かをしようとし

てその力を発揮できなくなると途端に自信がなくなるのだ。自分には何もない。大きな壁にぶち当たる。自信を失う。挫折とも言えるだろう。それをどう乗り越えるか、そしてどう新しい自分を作り上げるかのチャンスともなる。もしも、あとで成功してその時を振り返ったら、その時のことを感謝するだろう。たとえ失ったものが大きくとも、その倍以上に成長した自分と自信を手に入れられる。しかし、失った瞬間にはそんな感謝を出来るはずがない。ただ、恨み、泣くしかないのだ。友樹を手に入れられなかった悔しさ、夏美の死、ばばの不可解な行動、全てが祐子には重苦しくなった。息さえ吸うのも面倒くさい。ここへ来たことも後悔してしまう。夏美がなぜあんな死を遂げたのかはもうどうでもよかった。暗闇の中、黙々と足を前に動かしながら来た道を帰る。一本だけある街灯に、蛾が集っている。世の中人間も蛾も大して変わらない。見た目が綺麗な蛾もいれば、見にくいものもいる。小さな身になる灯りを見つければそれに群がる。醜いとも知れず行動を取り、あとで後悔する。後悔出来ればまだいい方だ。車を追いかけた時、そこには興奮が確かに存在していた。友樹を慰めたいという気持ちと、そして自分が受けた傷を話して同情して欲しいという考え。そうすれば二人で励まし合うことが出来る。一緒に頑張れると思った。触りたい、抱きしめて欲しい。確かにそう思っていたのだ。その気持ちもこの夏の涼しさと同じように冷え切った。これで、思い残すことも本当に無くなった。祐子は、自分の夢に向かって一人で進むことにした。隣に誰かが居てくれないとは、案外勇気が必要なのかもしれない。隣に誰かがいてくれる温かさを知ってしまうと、それが一際目立つのだ。だが、頑張ろう。今はそう誓うことしか出来ない。

路地を抜けると、祐子の家が見えた。祐子が出てきたときは玄関の灯りが点いていなかったのに、今は明るくなっている。祐子が出かけた事を知ったばばが電気を付けたのかと思った。しかし、そうではないことが家の門を入ったところで分かる。声がしたのだ。それは、ばばともう一人の男の声だった。低い声のそれは、間違いなく

争っているものだ。
　玄関のドアまで走ると、大きな背中が影となって映っている。そしてその野太い声には覚えがあった。祖母が罵られているようならば乗り込もうと思った。しかし、そうではないらしい。祖母が言い返している声も聞こえてくるのだが、はっきりとは聞き取れない。ドアに張り付くようにして耳を当てた途端、啖呵を切るような声が聞こえた。
「いいな。このことを黙っていて欲しければ、いくら必要かくらいは分かるよな。明日また来るからよ」
　ドアに映る影が急に大きくなる。ドアに近づいてきたということは男が出て来るに違いない。祐子は咄嗟に玄関脇に姿を隠した。その言葉から、ばばが男に揺すられているのだと感じた。間違いないだろう。ばばの表情は見えないが、何かを言い返しているような声に張りは失われていないようだ。祐子が身を隠した瞬間、玄関のドアが開いた。思った通りだ。そこにいたのは、夏美の遺体を発見した前田だった。家の中からの灯りに照らされて浮かび上がったその顔には、地元同士のうち解けたものは微塵も感じられなかった。ばばへの企みと脅しがくっきりと浮き出ている。ぺろっと舌を出して唇を舐める。前田は、祐子を残して友樹と一緒に警察へ行った。さっき、友樹とタクシーで帰ってきた時、ばばの家に行くと言っていた。前田は、初めからそのつもりだったのか。それとも、祐子が友樹と話すと知って、ばばが一人だと確信して来たのだろうか。なぜここへ来たのだ。何を理由にばばを脅しているのか。去っていくその背中を眼で追いかけながら、祐子は思案する。思いつくのは一つだ。ばばが、蜘蛛の神に取り憑かれているということを知られているのだ。どうやって知ったかは不明だ。夏美の死体を見て何か気づいたのか。それともばばの秘密を祭りの前から知っていて、寝返ったのだろうか。前田も夏美の父親のように、ばばの手先だったのか。考えれば考えるほど選択肢は増えていく。そして、そのどれもが正解ではない気がした。前田に聞くしかない。

祐子は、門を出た前田の後を追いかけた。街灯がないのでその姿を追うにも一苦労だった。どこへ向かうのかも分からない。ただ耳を澄まして物音の聞こえる方へと足を向ける。夕食の後に飲んだあの薬が効いてきたのだろうか。祐子の脳がゆっくりと眠りにつこうとしていた。駆け足で追いかけながら、数回あくびをかみ殺す。目尻に浮かんだ涙を指で拭き取ると、また次のあくびが出る。それを三回ほど繰り返した時だった。

ふいに、前田の足音が消えたのだ。つられるように祐子も足を止めた。そこは家から百メートルほど離れた道の真ん中だった。友樹の家へと続く住宅のある方角とも、社のある山へと続く道とも、街へと戻る下り坂とも違う。このまま道を進んでもなにもないのは分かっていた。それでも確かに前田はここへ向かっていたのだ。懐中電灯でも持ってくればよかったと今更ながら思う。

辺りを見回しながら、両脇に広がる藪へと眼をこらす。危険なことに、片方の藪の先は大きな崖に面しているのだ。気を付けなければミイラ取りがミイラになってしまう。これならば一度家に帰って、何があったのかばばに聞く方がいいだろう。素直に教えてくれるとは思わないが、助けを欲しているかもしれない。祐子はそう思うとともに、自分はここに住んでいるわけでもない。明日にでも帰るのだから、関わるのは止めようとさえ思う。

薄情だと思われてもいい。どうせ、もうここへは帰りたくないのだから。故郷があるのはいいことだ。迎え入れてくれることほど温かい気持ちになれるのはないだろう。しかし、それもすべて人間関係がうまくいっていればの話だ。少しでもいがみ合い、憎み合っているとすればそれはたちまち居心地の悪い場所となる。祐子にとって、今ここがそうなりつつあるのだ。どうしようもない。

崖から真っ暗な森を見下ろしながら、祐子はため息を吐いた。見ているだけで、吸い込まれそうになる。ただ立っているだけなのに、はっと気づくとからだが数センチ乗り出していたりするのだ。自殺願望とは違う。それが心のせいか身体の現象なのかは分からない。

ふっと怖くなって、祐子は身体をぶるっと震わせた。意味もなく膝ががくがくと笑う。もう帰ろう。
そう思って振りかえると、そこにいたのは前田だった。まるで行く手を阻むように祐子の前に立ちふさがっている。
「あ……」
後を付けていることを気づかれていたのだ。前田は、ばばの家から出てきた時と同じ顔でにんまり笑っている。そして、怯む祐子のほうへと一歩、また一歩と歩み寄ってくるのだ。先ほどまでの強気が嘘のように恐怖に駆られる。
「あ、悪気があったわけじゃないの。ばーちゃんと言い争っていたみたいで気になって」
片足ずつ後ろに下げながら、祐子は前田に呟いた。その声は、恐怖で震えてしまう。ばばのことを脅し、祐子をどうするつもりか。
「祐子ちゃん。それは君だって知っているはずだよ。秘密にしてほしいんだろう？　俺は、まだ警察に話しちゃいないさ。ばーさんがそれ相応のことをしてくれれば、これからだって言わないよ」
それならば、なぜ祐子のほうに迫ってくるのだ。祐子は一歩ずつ下がるにつれ恐怖が増した。後ろは、崖なのだから。少しでも踏み外せば命はないだろう。やはりこの男はばばの正体を知っているのだ。そうなればもう祐子の出来ることは一つしかなかった。
「秘密にしてくれなんて言わない。ばばを苦しめないで」
祐子は、口の中がカラカラに乾くのを感じながらも必死で男を睨み付けた。ここで弱腰になったら必ず負けてしまう。両足にしっかりと力を込める。それでも男は怯まずに近寄ってくる。男の身体からはタバコの臭いがした。その臭いは、祐子の彼氏を思い出させた。それがまた息苦しい。大きく息を吸った時、祐子は自分の足がもう崖にほど近い所にいることに気づいた。これ以上は逃げられない。真っ暗な森の中、物音は何一つない。虫の音さえもないことが孤独感を増長させる。誰も助けてはくれない。
「苦しめるってなぁ。祐子ちゃん、俺は何にも苦しめたりなどして

いないさ。助けてあげようとしているんだぜ」
前田は、手を伸ばせばすぐ届く距離で、祐子を見つめながら笑った。その声が森に響き渡る。警戒心などないようだ。なぜ祐子が追いかけてきたのか本当に分かっているのか。
身の安全に保証があるつもりなのだろうか。祐子が、男をどうにかしたいのに行動に移せない自分に歯がゆさを感じた時だった。祐子の手のひらに動く物があった。暗闇の中、眼を凝らすと、どうやらそれは小さな蜘蛛のようだった。
「また蜘蛛……」
もう振り払う気にもなれなかった。この村へ来てから何度と無く蜘蛛を見てきた。初めは気味の悪いただの生き物だった。いや、今でもその感情が消えたわけではない。しかし、それでももう殺そうとは思わなかった。それに、この蜘蛛もばばの手下かも知れない。そう思うと可哀相になってしまうのだ。それに、蜘蛛は祐子に悪さをしたわけではない。最初の晩は驚いたが、夏美は捧げ者だったからに過ぎない。それに、夏美が死んで少しも悲しくないのも本当なのだから……。
祐子は、その蜘蛛をそっと近くに繁る木の葉へと移してあげた。そして、前田に向かって言う。
「ばーちゃんを助けたいなら、そんなことはやめて」
前田は顔をしかめながら、祐子に近づいてきた。
「いやっ」
襲われると思った祐子は、咄嗟に前田の腹を目がけて両腕を思い切り振った。予想していなかった前田が、パンチを思い切り食らいその場で腹を抱えて踞る。
「あっ」
祐子は、かがんだ前田の前にしゃがもうとした。感触は確かにあった。手加減などというものはなかった。いくら前田が男だろうと相当のダメージだったはずだ。人にここまで

の危害を加えたことのない祐子は、今更ながら心配になった。前田の痛みはもとより、これがばばを苦しめる重荷にならないかと。やはり大人しく家にいればよかったのか。

「ごめんなさい」

消え入りそうな声で謝りかけた時だった。前田が一瞬で動いた。腹が痛いのも事実なのだろう。片手で左下のほうを抑えて顔をゆがめている。しかし、それを感じさせないほど、前田の動きは早かった。上半身を素早く起きあがらせると、獲物を見つけた蛇のように祐子を掴んだのだ。長い舌がない代わりに、前田には必要以上に長い右腕があった。

「いやあああっ」

祐子の頭の中の脳が破裂しそうになる。体中のアドレナリンが全部放出されてしまったようだ。カッと身体が熱くなる。それが小さな悲鳴となったが、それを止めたのも前田だった。

「落ち着け。俺は、お前を殺したりなどしない」

静かな分、悲鳴と同じくらいそれは祐子の耳に響いた。

「え？」

驚きでそれ以上聞き返すことさえ出来ない。

「俺が何でここに来たのか。それは、お前が付いてきたからだ」

「え？」

「初めは思うところもあったさ。でもな、俺には自信があるんだ。あのばーさんは金を出す。そして、そのためにはお前にも生きていて貰わなければならないんだ」

「どういうこと？」

「まあいい。お前にはおそらく分からないだろう。自分たちのためにも余計なことを言うなと、口止めしたかっただけだよ。」
前田はそういうと、祐子の手を離した。暗い中、男の歯だけが妙に白く見える。言われた言葉をじっくりと考えると、祐子は再び頭に血が上った。今離された腕を、今度は祐子が掴み返す。しかし前田の鋭い視線に怯んだ。その確固たる視線には、祐子やばばを責める色はなかった。その代わりに自分が正しいと思っている意志が感じられた。加え、どこか優越感に浸っているような気配。
「お前に分かってもらいたいわけでもないさ。時間の問題だろうけどな」
前田は、そう言うと自分の手でゆっくりと祐子の手をほどいた。それは、かつて川の中から祐子を救ってくれた手ではなかった。祐子とばばを今度は地獄へ突き落とすかもしれない手なのだ。ばばは、蜘蛛に乗り移られて夏美を殺してしまったと、おそらくこの男に自白したのだ。そうなれば、ばばが警察に逮捕されてしまう。困る。ばばのために。そして未来の自分のために。それを考えると身体がかっと熱くなった。去ろうとする前田の背中を睨みつけるが、身体が動かない。このままだとだめだ。一歩足を踏み出した瞬間だった。近くの茂みから、ごそっと物音がした。それが怒りよりも祐子の危険信号を発信させる。びくっと身体を強張らせ、踏み出した足も竦む。前田も気づいたようで、足が止まっ

た。暗闇の中から、再度現れたのだ。もう見ることもないと思っていたその姿。祐子と夏
美を襲ったその生き物が目の前にいる。それは一瞬だった。
祐子がその生き物に気づいた時には、それは前田に体当たりしていたのだ。鋭い歯を覗
かせ、長い手足をばたつかせる。猛然と前田をはねとばしたそれは、
まるで勝利を勝ち取
った勇者のように両手を突き上げた。
「あああああああっ」
宙に舞ったかに見えた前田は、すぐに姿を消した。一部始終は祐子
の前で確かに行われ
たのだ。それが夢のようだったとは、最早いうことが出来ない。前
田は、突如出てきた化
け物によって崖の下に突き落とされたのだ。その時の彼の顔は、祐
子の目に焼き付いてし
まった。足を止め、化け物に眼を凝らしたかと思ったら、いきなり
の攻撃。態勢を崩し、
立て直す間もなく足を踏み外した。助けを求めるように、そしてこ
の事態が信じられない
とでもいうような大きく開いた目で、祐子をじっと見ていた。まる
でスローモーションの
ようにその身体が見えなくなるまで。悲鳴のような前田の声は、数
秒もしないうちに消え
た。
消える瞬間、木の枝が折れるような音がした。崖の下は暗くて見え
ないが、あるのは森
ばかりだ。そこを祐子は自分の足で上がってきた。一本道の道路を
除けば、周りの木々は
鬱蒼と茂っている。前田が落ちたことに対しては後悔などなかった。
多少の驚きと、誰か

に発見されることはあるのだろうかという心配だけだ。あれだけの悲鳴を上げたのだから、
おそらく生きてはいまいだろう。動けなかった祐子の代わりに、感謝しなければならない
のだ。そう、目の前の物に。
「ばーちゃん……」
目の前に現れたのは、化け蜘蛛と化したばばだったのだ。ばばは蜘蛛となり、前田まで
を襲ったのだ
「大丈夫かい？」
蜘蛛の声を聞くのは初めてだった。蜘蛛に化けても話せるのだ。ばばの蜘蛛は、大きな
腹部をくるりと祐子に向けると、八本の足を奇妙に動かしながら近づいてきた。
「うん。ばーちゃんなんだよね？」
祐子がそう言うと、蜘蛛はクックと笑う。そう言えば、手についていた蜘蛛はどこへ行
ったのだろうか。
「ああ、そうだ。お前のばーちゃんだよ。お前を危険な目に遭わせるように見えるかい？」
蜘蛛は、祐子の方へゆっくりと近づいてくる。そして、祐子が首を横に振るのを確認し
てからその手足ですっぽりと祐子を包んだのだ。
ばばに間違いはない。祐子は、初めは不安だった。最初の晩に喰われそうになったのも
事実だ。しかし、同時にもう何もされないとも感じた。喰われるならば、とうに昨日の夜
喰われているはずだ。それに、間違いなくこの蜘蛛はばばの顔をしているし、ばばの匂い
がした。もう蜘蛛でもいい。祐子をすっぽりと包むほどの巨大なそ

の蜘蛛にも恐怖はない。
この村で、祐子を救ってくれたのは、ばばしかいないのだから。外見など関係ない。どれだけ自分を大切にしてくれているかだ。夏美は、もう昔の友達ではなかった。友樹も、ただの初恋の相手でしかなかった。継続もない。復活もない。過去にしか存在していなかったただけの関係なのだ。それにしがみつこうとするから悲しくなる。過去は過去だ。頼れる相手を捜すことは逃げではない。安らぎを求めることは、ずるいことではないのだ。この村へ来て、祐子は嫌な思いばかりしたと思った。来なければよかったと思った。だが、このばばの胸の中で、祐子はここへ来たことが間違ってはいなかったのだと思える。
今の事態のために、間違ったポイントは必ずあるだろう。都会で生活していた時点。ばばと連絡を取ることを面倒がった時点。夏美や友樹と会わずに、新しい友達としかうち解けなかった、時間を共有しなかった時点。全てが仕方ないことだ。しかし、それも間違いなのだ。どこが間違いかはあとで見つけられる。そこから出来ることが大切だ。
「ばーちゃん。帰ろう」
前田の死は、無くてはならないものだった。昨夜、ばばが夏美を殺したことを誰かに話されないために。
「そうだな。それじゃあ帰ってゆっくりと寝よう。朝までな……」
祐子が顔を上げると、ばばの歯がきらりと光る。その歯の間には、なにか肉の塊のよう

なものが見えた。祐子の心臓がきゅっと悲鳴を上げたが、気づかない振りをした。大丈夫、
大丈夫。必死で自分に言い聞かせる。誰かを追わずに歩くというのがこんなにも簡単かと
思うほど、あっという間に家に着いた。布団に入ってもしばらくは目が冴えていたが、祐
子は知らぬ間に眠りについていた。ばばが、いつ人間に戻ったのかは、祐子には分からな
かった。

7　結果

祐子が思ったよりも早く、事態は動く結果となった。昨夜、祐子は前田の目が脳裏に焼き付いて何度も目が覚めた。そして朝早く目が覚めてしまっても、もう布団から出ることさえも恐怖であった。掛け布団で鼻の頭までもぐり、目も閉じる。普段ならそれだけで簡単に眠りに落ちるのに、いくら時間が過ぎようと変わらなかった。せめてもとその態勢でいたが、それも早朝に中断させられた。

玄関のチャイムが家の中に響いた。祐子が隣を見ると、ばばの布団はすでに空っぽで、その音が鳴った時にはゆっくりと廊下を歩く足音が聞こえた。祐子が枕元の時計に目を遣ると、ちょうど七時を過ぎたところだった。いくら田舎とはいえ、早すぎる。こんなに早い用事といえば急なことだ。布団の中で祐子は耳を澄ませる。それでも気になるのでむっくり布団から這い出ると、部屋の戸を少しだけ開けて、玄関を盗み見た。ばばが玄関を開けると、そこに立っていたのは二人の男だった。胸ポケットから黒い冊子を取り出す。それが警察手帳だとはすぐに分からなかった。ばばの怪訝そうな声だけが聞こえる。

「何ですかね」

そのあと聞こえた声に、祐子は心臓が止まりそうになった。姿を見られないためにも音を出さないよう慎重に布団へ戻る。

「警察の者です」

その男は、昨日社のところで聞いた男の声だ。なぜ、ここに来るのだ。すぐに、もう一人の刑事だろう男が名乗っている声もした。夏美の遺体から何かが分かったのだろうか。それとも……。ばばは、黙っているようだ。

「昨夜ですが、何か不審な物音を聞いたり、見たりしませんでしたか？」

「不審な者、ですか？」
ばばが、刑事に聞き返している。祐子は心臓が暴れ出しそうなのを大きく深呼吸して抑
えた。怖い。何だ。どうして祐子の家に来るのだ。あの男は、昨夜と言った。夏美の件で
はなく、前田が発見されたということだろうか。彼は、崖から落ちたのだから、祐子の中
では当分発見されないだろうと思っていた。出来れば、自分が帰ってから見つかって欲し
かった。なぜ、こんなに早く。
「実は昨夜、この村に住む、前田さんが亡くなりました。彼はもちろんご存じですよね」
刑事がゆっくりと、時々名前等に強弱をつけて言った。ばばの耳が遠いと思っているの
だろうか。祐子はそのはっきり聞こえる声に耳を塞ぎたくなった。どうしてこんなに早く
見つかったのだ。そして、なぜ家に来るのだ。その疑問だけを繰り返す。ばばは、何と言
うだろう。自分の記憶があれば、ここで平静を装えるのだろうか。祐子の心配をよそに、
ばばのゆっくりとした声が聞こえる。
「前田さんは存じています。ただ、亡くなったことは今知りました」
ばばの答えは、祐子から見れば当たり障りのない物だ。刑事は、ばばを疑っているのだ
ろうか。前田が家に来ることを見たものがいるのだろうか。いや、待てよ。祐子は、昨夜
のことを思い出してハッとした。いるではないか、前田が祐子の家に来ることを知ってい
た者が。タクシーから降りてきた前田は、友樹と話をしに来た祐子に、ばばの家に行くと

言ったではないか。前田がここに来たことはばれているのだろうか。
そうなれば、その事
実を告げたのは……友樹だというのか。
「そうですか。不審なことには気づかれなかったと？」
「昨夜は早くに床につきましたので」
ばばがそう言うと、刑事は祐子にまで火花を飛ばしてきた。
「そう言えば、昨日お孫さんにもお会いしたのですが。夏美さんの幼なじみだそうですね
彼女にもお話をお聞きできますか？」
それに対しては、ばばの声音が変わった。急に早口で刺々しくなったのだ。
「あの子はまだ寝ております。夏美の死だけでも充分ショックだったのでしょう。お引き
取り下さい」
その後しばらく、刑事の声は聞こえなかった。おそらく刑事同士で相談しているか顔を
見合わせてでもいるのだろう。祐子は、刑事が引き下がらず、この布団の脇まで乗り込んでくる映像を想像した。そして、身体をぶるっと震わせた。昨夜の外の気温より、おとといの社の中よりも布団の中は遙に温かい。それにも関わらず、悪寒に襲われるのは、なぜなのか。ばばが捕まることへの恐怖か。それならば、自分がなにか言い訳をしようか。そう考え始めた時だった。昨日聞いた声の刑事が、再び言ったのだ。
「分かりました。それではお孫さんにもそれとなく聞いてみてください。何か知っていたらすぐに署のほうへご連絡を。もしかしたら、またこちらから伺ってお話を聞くかもしれませんので、お孫さんに事情を説明しておいていただけると助かります」
　祐子はそれを聞いて、ほっと安堵の息を漏らした。ばばも同じだったのだろう。声音がまたゆっくりとしたものになる。
「ありがとうございます。それでは」

ばばが言い、玄関の扉が閉まる音がしたかと思うと、すぐにまた素早く開くのが分かった。そして再びばばが聞く。
「あの、ひとつだけよろしいですか。前田さん、どこでお亡くなりに？」
玄関を出ていた刑事の声は、祐子のところまでは聞こえては来なかった。数分してから
再び玄関のドアが開いたかと思うと、またもやばば以外の声が聞こえてきた。今度は別の
客が現れたようだ。
「なぁ、教えてくれよ。ばーちゃんは、前田のことを知っていたのか？」
　あの声は、夏美の父親のものだ。祐子は、布団の襟元をぎゅっと握りしめた。彼女を失ってどんなにか辛い思いをしているだろう。だが、ばばの声にはそれに対する気遣いよりも、むしろ剣呑な雰囲気があった。
「知っていたよ。それで心配もして何度も儀式の前に確認したさ。あの男はこれっぽっちも恨んだりはしていなかったよ」
「そりゃそうさ。ちゃんと捕まったらしいじゃないか。だから、人じゃない。復活祭を前田は憎んでいたんだよ」
「そんなことはない」
「なんでばーちゃんにそんなことが分かるんだよ。あいつは表でいい顔して、裏では憎んでいたんだ。それで、夏美を殺したんだ。全てが罠だったんだよ」
　夏美の父親の声が、どんどん大きくなっていく。どうしたというのだろう。夏美の父親は、何をあんなにもばばを責めているというのだ。前田、彼は何者だったのだ。そういえば、ばばの言うとおり前田は数回祐子の家にもやって来た。ばばに心配されていたようだったが、それと昨夜のことは関係あるのだろうか。祐子はじっと耳を澄ました。

「どうして、どうして夏美が殺されたんだ。前田の奴には警察も目を付けていたはずなんだ。あいつの過去を知れば一番に疑うよな。なのに、今度は前田が死んだ。夏美を返してくれ……」
シッとばばが鋭くそれを遮った。祐子の部屋にまで来ていた声が、一瞬途切れる。
「なんだ、祐子はまだいるのか。……そう。ばーちゃんも早く話すべきだろう。なぁ」
二人は祐子の話をしているのだろうか。何を話すべきだと言うのだ。その先に待っているものが、祐子にとって辛いこと、というのは間違いないだろう。しかし、ばばが蜘蛛だというのを祐子はもう知っているのだ。怖がることなど何もない。昨夜蜘蛛になったばばは、祐子に危害を加えることはなかった。祐子にとっては、ばばが警察に捕まることなど想像もしたくない。警察がどう動いているのかは分からない。しかし、前田が死んだことがプラスに働くことを願った。前田の過去に何があったのだろう。彼は祭りを恨んでいたのだろうか。それならば、前田が夏美を殺し、その罪悪感に耐えきれず崖の上から自殺。その説も有効ではないか。ばばに警察の手が伸びることもない。ましてや、夏美とばばは仲がよかったのだから。いつしか聞こえなくなった二人の声が、祐子を再び眠りの世界へと誘った。そして、次に目が覚めた時には、ばばが障子を開けて入って来た。ぼんやりと目を開けると、その手にはここ数日で溜まった祐子の洗濯済みの洋服がある。
「祐子。起きなさい」
あれからどれほどの時間が過ぎたのだろう。二度寝をしたことで、頭がいつもの寝起きよりも若干重たく感じる。その声で祐子がもぞもぞと布団から顔を出すと、ばばが枕元に正座した。
「なに？」
布団から全身を出すと、思わずつられて正座をしてしまう。ばばは、

洋服をまず祐子の
枕元に置くと、鋭い目つきで言った
「お前、もう本当に帰りなさい」
言われると思った。祐子は、それをここへ来た日から言われてきたのだ。最初は祭りまで、それが友樹に会いにいくまで、前田と話すまで、そして今はばばを守りたいという気持ちに変化している。
「もうちょっといるのは駄目？」
祐子がそう言うのが分かっていたのか、ばばの返答は素早かった。
「だめだ。すぐに帰るんだ」
もういつものような猶予は与えられない口調だ。いつもより鋭く、そして怒りを孕んでいるようだ。
「でも、ばばが一人だと心配だし……」
これは、祐子の本音だ。しかし、ばばは呆れたように鼻で笑ったのだ。そして続ける。
「今更なんだい」
ばばの呟きに、祐子は一瞬聞き間違えたのかと思った。
「え？」
驚いて聞き返す祐子に、ばばが言う。
「今更なんだって言ったんだよ。お前は、この村の人間じゃない。数年前から一度も戻っては来なかったじゃないか。それを今更ぽんっと帰ってきて、いや、遊びに来てだな。それで心配と言われても嬉しくないよ。それじゃあ、今までは心配じゃなかったんだね」
「ばば、いきなり何を。あたしはね」
「だから、帰ってくれと言ったんだ。これ以上いられても正直迷惑なのだよ。最初の日に

も言っただろう？」
こんなに冷たいばばの目を見たことがなかった。祐子が悪戯をして叱るときでさえ、こんな言葉は発しなかった。それが今ではとてつもなく威圧する勢いを持っていた。祐子のために街へ返そうとしているのではない。身体が、その目が祐子を拒絶しているのだ。それでも、祐子は心配だった。その心に嘘はない。
「でも、あたしはばばが本当に心配なんだよ」
それでも祐子が食い下がろうとした時だった。ばばは、まるで蜘蛛になっている時と同じようなオーラを放って立ち上がったのだ。そして、夏美の方へ向かって行ったかのような勢いで言った。今度こそ、祐子を殺そうとでもしているのだろうか。
「帰ってくれって言っているんだ。わしはここで長年一人生きてきた。これからもそれで十分だ。お前達の助けなどいらん。放っておいてくれ、帰れ！　ほら、帰るんだよ。邪魔だ、目障りなんだよ」
その言葉に、祐子の目からは無意識に涙が零れる。
「どうして今、そんなこと言うの」
「だから、お前が帰らんからだよ。わしはすぐに帰ってくれと言ったはずだ。無理に残ったのはお前だ。それに、いるならいるで料理や洗濯もできないのかい」
確かにそうだった。特に用事があったわけでもない。それなのに、祐子はご飯が出てくるのを待っていたし、朝早く起きることもしなかった。今それを言われたら謝ることしか出来ない。なにも手伝わぬまま、ここから去らなければならないのか。祐子は数日の行動をも後悔し始めた。やはり、ここへ来たこと自体が間違いだったのだろうか。もはや口から漏れる嗚咽さえも抑えられず、両手で口を塞いだ。それを、ばばは慰めることもせず、ただ冷淡な目で眺めている。その視線さえも痛い。今にも、手足が大きく伸び、身体の色を灰色に変え、毒蜘蛛となって祐子に襲いかかるかと思われた。逃げるように祐子は立ち上がると、着替えることもなく部屋を飛び出し

た。玄関のドアを祐子が開けた時だった。
目の前に、夏美の父親が立っていたのだ。目を丸くして祐子を見ていたが、すぐに家の中を覗き込むような仕草をする。夏美のことで、父親も泣いていたのだろう。祐子以上に真っ赤なその目を祐子へと向ける。
「なんだ、言い争っていなかったか？　泣いているのか？」
祐子は、おっちゃんを見上げ、静かに首を横に振った。
「大丈夫だから。ちょっと外に行って来るね」
そう言うと、家の庭まで後ろを振り返らずに走った。真っ赤な花が咲いている鉢植えの脇に座り込むと、もう一度ゴシゴシと手の甲で目を拭った。思ったよりもばばの言葉は胸に刺さった。それが図星だったからか、ひどい言葉だったからか。おそらく両方だろう。
「もう本当に帰ろう……」
一日一日が延びていっただけだ。祐子は、自分のいるべき場所に戻るのだ。
「なんだ。祐子ちゃんもう帰るのか。夏美を見送って貰えたら有り難いけどな」
その野太い声に振り返ると、祐子の脇にはおっちゃんが立っていた。
「おっちゃん……」
話していいだろうか。おっちゃんにも同じことを言われないだろうか。そんな不安を胸
に抱きながら、祐子は朝起きてからの一部始終を話そうかと思った。だが、今ばばに言われた言葉だけをうち明けると、おっちゃんは神妙な顔でひとつ頷き言った。
「それならば、家においで」
何度か迷うように瞳を逡巡させた祐子だが、すぐに項垂れた首を横に振った。
「どうしてだ。ばーさんと上手くいってないんだろう？　それならば、この家にいても仕方ないだろう。せっかく来たんだ。もう少し

いればいい。夏美もそう願っているよ」
　夏美を亡くした穴を祐子で埋めようと思っているのだろう。だが、祐子と夏美は昔のように仲良しでいられたわけではない。笑って夏美の家に上がるほど、強い心はもっていなかった。
「おじさん。夏美は？」
　祐子が聞くと、小さくおっちゃんは笑った。どこか嘲るようなそれに祐子が顔をしかめると、おっちゃんは言う。
「警察の司法解剖から戻されたよ。今日通夜だ。だから、余計になにか虚しくてね」
　祐子の言える言葉などなかった。夏美の死の現場にいたのに、それを伝えることも出来ない。たとえその時の出来事を話しても、おっちゃんや警察は信じないだろう。司法解剖では、どういう結果が出たのだろう。
「あ、そうだ。知っているかい？」
　ぎくり、と祐子が肩を震わせた。おっちゃんは何を知っているというのだ。
「なぁに？」
　祐子は細い首を少しだけ傾けた。
「いや、夏美は今回の生け贄だっただろう？　あの子は、神のものになったのだと考えたら、俺はそこまで辛くないんだ。幸せなことだと思う」
「……え？」
　夏美が死んで悲しくないということか？
「でもな、面白いことを教えてあげよう。実はね、祐子ちゃんが来た日、村では君の可愛いさに男どもは興奮してね。俺たちは生け贄を君にしようと話していたんだよ。なんていったって君は昔から可愛かったからね」
「そうなんですか……？　夏美はそんなこと一言も……」
「いや、そうなんだよ。でも、ばーさんにそれを相談したら断られてね。ほら、俺が翌日家に行っただろう。あの時さ。まぁ、他に相

談もあったんだけどね。それに、前田も夏美のことを可愛いがってくれていてね。やっぱり、ってことで夏美になったんだよ」
「そうなんですか……」
もし、生け贄が祐子だったらどうなっていただろうか。ばばは、あのままの姿で祐子に食らいついたのだろうか。そうしたら、今ここにいるのは祐子ではなく、夏美ではなかったのか。
「おじさん、ごめんなさい……」
その考えが、謝罪となって祐子の口から漏れる。それを待っていたかのように、おっちゃんが祐子の腕を握ったのだ。
「そう思ったなら、祐子ちゃん、家に来てくれよ。一晩でもいいんだ」
祐子が頷きかけた時だった。
「祐子！　いつまでめそめそしているんだい！」
その声に驚き祐子が家を振りかえると、玄関からばばが顔を出して叫んでいる。
「あんなに怒っているばーさんといるより、お互い少し頭を冷やしたほうがいいんじゃないかい？　最近、ばーさんの様子もおかしくてね」
おっちゃんの意見ももっともだ。しかし、祐子は首を縦には振らなかった。ゆっくりと腰を上げると、ばばが消え、少しだけ開いた玄関のドアへと歩き出して言う。
「おっちゃん、ありがとう」
心配してくれる人は、まだいたのだと思えた。おっちゃんは少しだけ寂しそうな顔をして首を横に振っている。心の中でもう一度御礼を言って祐子が家に入ろうとした。
「ちっ」
小さな、しかし耳につく音に祐子が振り返ると、おっちゃんはもう歩き出していた。あれは、舌打ちではないか。聞き間違えだろうか。祐子はもう一度首を傾げると、家の中へと入った。和室へ行き、自分の荷物をまとめる。ばばが持ってきた衣類、化粧品や身の回りの

ものを再度入れると、どうしてだろう、来た時よりもその鞄は膨らんでいた。出来るだけ洋服を小さく畳み、うまく入らないとやり直す。それを数回繰り返しながら、祐子は考えた。夏美と前田の死の真相が明らかになるときなどくるのか。おっちゃんが夏美の死を悲しんでいないというのは嘘だろうか。だから、あんな舌打ちをしたのか。祐子が死ねばよかったと思っているのか。そして、なぜ今日ここへ来たのだろうか。考え込むと作業の手がおろそかになる。そしてまたひとつを鞄に詰めながら、先ほどばばに言われた言葉が胸を締め付けるのだった。

＊

友樹は昨夜一睡も出来なかった。目を瞑るだけで、夏美の遺体が瞼の裏に浮かんでは消
えるのだ。何度も目を擦り、寝返りを打った。身体は疲れているのに、心も悲鳴をあげているはずなのに、どうしても眠りにつけないのだ。頭の隅で考えてしまう。

つまり、脳が休もうとしてくれないのだ。どうせ眠りについたとしても、悪夢を見そうで怖い。夢の中で何が起こるのか想像するだけで吐きそうだ。それでも眠りにつきたいと思うのは矛盾しているのだろうか。夢を恐れたら眠りにつけない。一生眠らないなどあり得ないのに。それにも関わらず、眠るという作業を心が拒否しているのだ。部屋の電気を付けたり消したりしている間に、いつの間にか窓から朝日が差し込んだ。そして気がかりなのは、祐子だった。昨夜は自分の気持ちの整理も出来ず、ただ突き放してしまった。彼女なりに友樹を慰めようとしていたに違いないのに。そう考えると、自分の子供っぽさに反吐が出そうだ。いつもそうだった。夏美も、友樹に合わせてくれてばかりだった。つい、優しくしたいと思うのに、気づけば優しくされていただけなのだ。祐子に問われて友樹は帰宅後考えた。自分の夢はなんなのだろうと。小さい頃は、祐子と結婚することだった。

しかし、彼女と会わなくなってその気持ちもいつの間にか薄れ、ただの子供の時の初恋の思い出となった。人は、たとえある一点の時は交わっていたとしても、結局は別の道へ進むのだと、学んだ所以になるだろう。しかし、夏美はいつも側にいてくれた。いつしか祐子のポジションを夏美が占めるようになった。夏美が、友樹の夢の一部となっていたのだ。先のことを考えれば、まずは夏美の考えを想像した。こんな時、夏美はなんというか。

これをあげたら夏美はどんな顔をするか。祐子のような大きな夢ではない。しかし、それで満足だった。祐子は、今日帰ると言っていなかったか。布団の中で、友樹は何度目になるだろうため息を吐き出した。せっかくの再会も、最悪の展開だ。しかし、祐子はこのあと街へ帰ればモデルや歌手の道へ進むのだ。だから友達でいたいわけではないが、応援する気持ちは嘘ではない。一言挨拶をしておくべきではないのか。じっと窓の外に浮かぶ雲を眺めながら、友樹は祐子に会う決心を固めた。なんと綺麗な空だろう。空気が澄んでいる田舎の空の綺麗さは、そこに住んでいると分からないものだ。夏美はいつも空を見上げて言っていた。

「見て。あの雲、綺麗だねー」

そう言っては似ている動物や物をあげて喜んだ。くじらや、鳥。親子丼に見える雲があるとも言っていた。雲を見て、お腹がすいたと笑う夏美。祐子みたいに整った顔立ち、細い手足は持ち合わせていなかったが、それでも彼女の心は綺麗だった。考えながら、友樹はまた一筋の涙を流した。あの雲を見たら、夏美はなんというだろうか。友樹は、いまも自分が夢の途中にいる気がした。重い体を起こし、流れた涙を拭う。今日も一日始まるのだ。それが、更に友樹を驚きの渦へ突き落とすとは、この時彼はまだ知らなかった。

一階へ下りると、食卓には目玉焼きがラップに包まれて置かれていた。食欲がないのでそれを素通りして冷蔵庫を開けると、中からペットボトルの水を取り出し、そのまま口をつけて喉の奥へと流し込む。ごきゅっごきゅっと、わざと音を立てて飲むと、自分が生きて

いることを妙に実感出来た。冷たい水が口の中から喉へ流れ、胃についたのを感じた時、ボトルから口を離して大きく息を吐いた。すでに家族はもういないようだ。夏美が死んだことを知っているだろうが、友樹のことはそっとしておこうと決めたのかもしれない。お祭りで夏美とはしゃいだのが遠い過去のようだ。テーブルの上に置きっぱなしになっているラムネの瓶が、友樹を現実に引き戻す。再度込み上がる涙を飲み下そうとした時、玄関のチャイムの音が家中に響いた。祭りの後かたづけにでも参加しろと前田がやって来たのだろうか。咄嗟に友樹はそう思った。玄関までの廊下を歩くも、居留守を使ってしまおうかと思った。今はそんな気分になれないし、いつ涙腺が緩み情けない姿をさらすとも知れない。きっと出なくても前田は分かってくれるはずだ。半分まで来た道のりを、再び台所へ引き返そうとした時だった。

「友樹さーん、いらっしゃいますかねー」

野太い声が、ドアの外から聞こえてきた。この声は、二度と聞きたくないと思っていた。

夏美を失って動揺する友樹を、さらに苦しめた声だ。何かを思い出せ、と執拗に呪文のように問いかけてきた声。

「いないんじゃないですかね？」

ドアの外で繰り広げられる会話が、友樹の身体を金縛りのように動けなくさせた。

「いや、いるに決まっているさ。仕事場も休んでいるらしいじゃないか。こんな田舎のどこへ行くんだ。友樹さーん」

居留守を使おうと思った友樹も、ここでそんな手を使って逃げれば後で何を言われるか分からないという考えが脳裏をかすめた。下手をしたら、後ろめたいことがあるのだと勘ぐられるかもしれない。なにせ、夏美の、被害者の恋人であり第一発見者であるのだ。言

ってみれば一番危険なポジションである。それを考えて、友樹は自分が何もしていないのにかかわらずもこんな恐怖に打ちひしがれていることが無意味に思えた。一睡も出来ないくらい追いつめられる恐怖。しかし、逃げるわけにはいかないことも分かっていた。そっとドアに手をかける。ごくりと小さく唾を飲み込み、ノブを回した。数センチ開くと、真昼の太陽が顔に差し込む。その光のせいで、刑事の顔が一瞬見えなかった。友樹が目を細めると、刑事が彼に気づいて言った。

「あ、すいません。お休みでしたか？　昨日お会いしました細川です」

太陽の光を隠すようにして友樹の前に立ちはだかった男は、紛れもなく野太い声を出す刑事だった。それでも念のため、手帳をかざしている。起きてから歯も磨いてないし、顔も洗っていない。髪型を整えるどころか、鏡さえ見ていない。咄嗟に、口元を手の甲で拭う。あまり寝てないとはいえ、涎でも垂れていたら恥ずかしい。

「なんですか」

挨拶をする気分でもなかった。

「昨日はどうも。眠れました？　いや、そのクマを見ると睡眠不足のようですね。いや、当たり前ですかね」

友樹は、その刑事の口調が昨日から気に入らなかった。何かにつけ、言葉の前につける「いや、」という癖、そして人の気持ちにつけこんでくる図々しさが神経を刺激するのだ

「いえ、大丈夫です」

友樹は最初のそれだけで顔をしかめた。しかし、細川刑事は気にすることなく続ける。
「すいません、すぐに済みますから。昨日の夜、警察から戻ってからすぐにご自宅へ？」
友樹は、その質問に一度あんぐりと口を開けた。警察から戻ってからだって？　それを
わざわざ聞きにきたと言うのか。
「家にいたに決まっているじゃないですか」
細川が、隣の若い刑事に軽く目配せした後、大きな笑顔を顔中に広げると玄関のドアを
外側へ引いた。思わず、友樹の身体も引っ張られ、ドアにもたれかかった。ドアと一緒に
友樹もくっついてきたことに若干驚きの色を見せた細川も、すぐにこほん小さく咳払いす
ると、今度は真顔になった。
「それから一歩も外には出ていませんか？」
妙な威圧感があった。思い起こせば、昨日は帰ってからすぐ祐子と話した。半ば喧嘩別
れをしてしまったが、それでも二十分ほどは一緒にいたであろうか。
「いえ、家に帰る前、少しだけ友達と話しましたが二十分ほどで戻りました。そのあとは
ずっと家に。今まで布団の中でしたよ」
一度警察と関わると、こうまで身辺的に調査されるのだろうか。明日も、今日のことを
聞きにやってくるだろうか。友樹は永遠と警察に予定を聞かれる場面を想像して、思わず
顔に出てしまったのだろう。細川が、数回頷くような仕草を見せたあとに言った。隣の刑
事は、何やらメモを取っている。何を書いているか分からないところが不快だ。友樹の動

作一つ、見逃されないと感じる。
「いや、実はですね。昨日警察に一緒に来て頂いた、前田さんが、昨晩亡くなりました」
「はああっ？」
驚きが隠す暇もなく、声になって飛び出した。恐怖が背筋を凍らせ、全身がぶるっと震
えた。目眩がする。昨日は夏美、今日は前田。一体なんだというのだ。何が起こっている
のだ。
「ちょっと……、ちょっと待ってください。前田さんが死んだ？
どうしてですか！」
ついさっきまで新しい力をくれると感じた日の光は、今や友樹の力を吸い込んでいるよ
うな気がした。太陽は、人間の力を吸い上げて自分を燃やしているのではないだろうか。
「残念ですが事実です。前田さんは昨晩、ご自宅に帰るまえに不慮の事故に巻き込まれま
した」
細川は暗く、しかしはっきりと告げた。今や友樹は太陽の光さえも見えなくなった。細
川が後ろに離れていく、と思ったが、友樹が倒れていったのだ。あまりにショックで意識
が遠のきかけた友樹は後ろによろめいたが、咄嗟に刑事二人に支えられ、危なく頭を打つ
などはないものの、床に倒れそうになった。
「大丈夫か？」
助けてくれた細川の腕も、今はもどかしい。弱々しくその手を離してもらうと、友樹は
言った。どうにか立ち上がろうとしたが、両足には力が入らない。
「事故って、何のですか？　俺、前田さんと一緒にそこまで帰って

きたんですよ。俺のこ
とを先に下ろして……それで」
「確かに、ここまで一緒に帰って来たんだね。いや、それは昨夜の
タクシーの運転手にも
確認しているよ。彼とは昔からの知り合いでね。おっと、それはそ
うと。君は、その後誰
と会ったんだ？」
細川が、玄関に座りこんだ友樹の目の前にしゃがんだ。もう一人の
刑事も家の中に入り、
玄関のドアが閉められる。それだけで、日の光がなくなり廊下は先
ほどよりひんやりとし
た気がする。
「俺は祐子と会っていました。昨日、刑事さんも会ったでしょう。
痩せている女の子です。
夏美の話とかをして……」
「細川さん、さっきのおばあさんの家の……」
若い刑事が横から言う言葉を途中で手で制すと、細川が頷いた。
「いや、祐子ちゃん、と言ったね。彼女はさっきまだ寝ていると言
って、おばあさんに会
うことを断られたんだ。何か変わったことはなかったかな。漠然と、
いや、なんでも良い
んだ。思い出したことはないかな。昨日も聞いたことだけど、夏美
さんに関してでもいい
んだ。祐子ちゃん、彼女はなんでこの村へ来たのかな？　祭りのた
め？　前田さんも何か
言っていなかったかな？」
まっすぐに瞳を見つめられて、友樹は考えようとした。昨日の少し
申し訳なさそうな前
田の顔、祐子の拗ねたような顔、そして夏美の睨んでいるように助
けを求める遺体の目。

「うぅっ」
感情があふれ出る。すべてが映像となって友樹の頭を駆けめぐり、それが吐き気さえも
催す。何も食べてないのに、何かがのど元からせり上がってくる。両手で咄嗟に口元を抑
えると、目の前にいた細川が驚いたように友樹から飛び退いた。それを見て、友樹は汚物
をぶちまけてやりたくなったが、ぐっと喉の奥へと押し戻した。
「あの、前田さんに変わったことはありませんでした。夏美を生け贄にと選んだのが前田
さんだったので、相当気にはしていたようです。祐子は、偶然今年久しぶりに会ったんで
す。祭りに来ていたのも事実みたいです。祭りには一緒に行きませんでしたけど」
「そうか。また生け贄か。君、大丈夫かい？　顔色が悪いけど、ゆっくり休むんだよ」
「そういえば……」
友樹は、警察の取り調べ室を出た直後の前田の顔を思い出した。彼はなんと言っていた
だろうか。もっと話すべきだった。
「確か、前田さんも同じことを……」
友樹は、吐き気も忘れてあの場面を思い出そうとした。細川達も、はっと息を飲んだあ
と黙り込んだ。数秒間、目を閉じて必死で考えた友樹は、呟くように言った。そして数回
確認するように頷く。
「そう。確か同じことだ。祐子ちゃんはなんで来たんだ、とか。痩せているとも言ってい
たような……。あれは俺が言ったことだったっけ」
思い出せば、どんどんピースは埋まっていく。そういえば、前田は

祐子のことを無性に
気にしていたように感じられる。なぜ、祐子なのだ。
「ああ。確かにあの子は細かったね。いや、しかしだからといって
……。おい」
細川刑事は、隣の若いのに何かを耳打ちした。前田は、祐子を怪し
んでいたとでもいう
のか。友樹は、細川の耳打ちした言葉などどうでもよかった。一つ
を思い出したことで、
他にも何かないかと思ったのだ。記憶は薄れる。早くしないともう
二度と思い出せない気
がして焦る。だが、昨夜の祐子を思い浮かべても、何も怪しいとこ
ろなどない。少なくと
も、幼なじみを怪しむことで罪悪感も生まれ、友樹は自分の髪をわ
さわさと掻きむしった。
「あぁっ……思い出せねぇっ」
若い刑事が無言で玄関を出て行ったことで、友樹は我に返った。ド
アが開いた一瞬、一
筋の光が友樹の顔を照らす。顔を上げると、細川も立ち上がってい
る。幾分か顔が先ほど
よりも引き締まって見えるのは気のせいだろうか。
「友樹君。それでは、これで失礼するよ。また何かあったら教えて
くれ」
「あ、ひとつだけ。前田さんはどうして？　事故って何があったん
ですか」
友樹は聞きたくなかったが、知りたい衝動には叶わなかった。同じ
行事に参加し、同じ
警察から帰ってきた男が死んだ。自分も巻き込まれないか不安だっ
たとも言える。細川は、
迷うことなく口を開いた。どうせニュースになれば分かることだか
らだろう。

「ああ、その先の崖から転落したんですよ。百メートル以上あるだろう。即死だったようです」
ここは村と言っても、本当に山奥だ。森もあれば、崖もある。その小さな集落で暮らす人間は、子供の頃から近寄ってはいけない場所は教えられて育つ。意味もなく崖には近寄らないのだ。それならば、なぜだ。呼び出されたのか。待ち合わせをしていたのか。
「あの崖から？　こんなに早く見つかったのは」
下は森のはずだ。下手をしたらカラスにつつかれかねない。自殺をしに来る人間がいることもあるほどだし、村の人間がもし事故で消えたとしても、手がかりがなければ捜索隊が数日かかって発見することが普通だ。
「ああ、それは運が良かったんですよ。いや、悪かったともいえるな。あの下はね、ちょうど今年からロッジが出来たんですよ。まぁ、街に出る境に川が流れているでしょう。あそこら辺ですよ。なんにもないところですがね。近年流行りの休日都会離れに最適だったのかもしれませんね。それなりに都会からも遠いようで近い」
「ああ。そんな話も聞いたような気が……」
細川が、細かく数度頷く。
「いや、そう。それでね、なんと初めて泊まりに来たお客さんだったんだよ、昨夜ね。大学生の四人組さ。それで夜にもの凄い音が聞こえたらしいんだよね。木が倒れるような。それでも確かめなかった。明け方になって外へ出たら、前田さんが亡くなっていた。こういう訳ですよ」
細川は、一度友樹の顔色を確かめるように覗き込んでから続ける。
「木にな、引っかかっていたらしいんだ。手足が枝に絡まり合って、頭が地面に向いて目玉をかっと見開いてなぁ。落ちるときに、崖に何度も頭や手足をぶつけたようで全身傷だらけ血だらけ……っと。ちょっと細かく説明しすぎたかな」

友樹は、馬鹿にされているようで込み上がる吐き気を賢明に我慢して平気な振りをした。
「そうですか」
その一言しか言えなかった。もう少し長く口を開いていれば、何かが飛び出して来ただろう。細川は、そんな友樹を値踏みするようにじっと見つめていたが、すぐに玄関のドアに手をかけた。
「それじゃあ、君、寝た方がいい。また何か思い出したら、いや、こうだよ」
そう言って、右手の親指と小指を伸ばして耳の側で振るマネをした。電話をかけろ、という意味なのだろう。もう頷く気にもなれなかった。

＊

帰る荷物をまとめた祐子は、おっちゃんと別れて家に入った後、ひとしきり家の中を見
回した。帰ってきたら、どんなにか懐かしいだろうと思った。楽しい生活をばばと送れるだろうと思った。しかし、実際に存在したのはとてつもなく大きな悲しみと、離れていた時間の空しさだけだった。祐子は、その焦燥感を胸に抱え、台所で水を飲んだ。
「祐子、帰らないのか？」
コップを流しに置いた祐子に、ばばが後ろから声を掛ける。もう帰れ帰れって、うるさいのよ。どうしてそんなに帰したいのよ。祐子が怒りをこらえるように、流しを握りしめた。その手のすぐ脇を、小さな蜘蛛が一匹素早く逃げていく。そんなこと言われなくとも、もう帰るわよ！　そう叫んでやろうと振り返った瞬間だった。
また、現れたのだ。ばばが、化け蜘蛛となって。
「ばーちゃん、また？　もう何でよ！　どうしてそんな姿になっちゃったのよ！」
ばばは、長い手足を壁に這わせて、大きなしわくちゃな顔を祐子に向けていた。その口の間からは、長い牙が生えている。そして、蜘

蛛が通ったと思われる壁には、体液だろうか、白い粘着がありそうな液体が光っている。
「ひいっ……」
祐子はコップと、手に持っていたゴミを放り出すと、一目散に勝手口へと逃げようとした。鞄は和室だ。しかし、取りに行く暇などない。ばばは化け物となり、もう祐子への愛情を忘れてしまっただろう。それならば、逃げるしかない。
「祐子！　待ちな！　帰らないんだったら、今日は納戸に入っているんだよ！」
逃げようとする祐子の背中から、ばばの鋭い叫びが追いかけてくる。そして、首だけ振りかえると、猛然としたスピードでばばが台所を横切って来るのが視界に入ったのだ。
「きゃーーっ！」
夏美に向かって来るばばを見た時、祐子は恐怖で悲鳴さえも上げられなかった。しかし、二度目の恐怖。おとといの晩の分も叫ぼうとするように、祐子の喉から悲鳴が飛び出した。
それが、鋭い剣となってばばを倒してくれることを願うように。しかし、その声に一瞬怯んだ顔をしたばばの蜘蛛も、すぐにその顔をさらに怒りの形相へと変えた。なぜ、なぜばばはあんな姿になってしまうのだ。絡まる足を、必死で前に出して勝手口のノブを回す。震える手でドアを開き、身体を外へするりと逃した。視界の隅にばばの姿を捉えながらも、祐子はすぐにドアを閉めようとした。その数センチの隙間から、必死の形相のばばが見える。
鍵はない。ここでドアを閉めても、外へ追いかけてくるだろう。誰かに助けを求められるだろうか。退治されることを恐れて、ばばは外まで来ないだろうか。そんな疑問が頭の隅を過ぎりながらも、ぎゅっと目を瞑ってドアを思い切り閉めた。
「ぎゃーー！」
ばばの悲鳴が辺りに響く。それに驚き、祐子はドアを押さえる手は緩めずに薄目を開けた。すると、ドアは閉まっていなかった。わ

ずかな隙間が開いていて、それはばばの手を挟んでいた。痛みによる悲鳴だったのだ。しかし、それは人間のものではなく、蜘蛛の足の一本に過ぎない。その長い足の先には、産毛のような細い毛が揺れる。その足が、祐子の顔の前を、助けを求めるように藻掻いていた。

「ひいいっ……」

その奇妙に揺れ動く足を見て、祐子は腰が抜けそうになった。ドアで傷つけられた部分は、折れ曲がっているようだし、怪我を負ったようだ。

「いやっ……。あたしのせいじゃない。あたしのせいじゃ……」

ドアを押さえる力は抜けてしまった。蜘蛛もドアに挟まれた痛みが響いたのか、足が数

本ドアからはみ出してはきたものの、なにやら追いかけてくる様子はない。その代わり、

ドアの向こうから、痛みに耐えるような呻き声が漏れる。祐子は抜けそうな腰を必死で起

こすと、誰かを呼びに走ろうとした。

すると、目の前に立っていたのだ。あの男が。

「おっちゃん？」

祐子の目の前にいたのは、先ほど祐子を家に呼ぼうとした夏美の父親だったのだ。あれ

からもう一時間は経過している。おっちゃんも帰ったのかと思っていたが、彼は全く同じ

場所に立っていた。真っ青な顔色をした祐子を、おっちゃんは優しく抱き留めた。娘と同

い年の少女だ。心配してくれているようだ。これならば、助けて貰えるのかもしれない。

「おっちゃん！　ばばが、また蜘蛛になっちゃったの！　あれ、あそこに蜘蛛の足が見え

るでしょうっ！」

おっちゃんの背中に隠れ、祐子が勝手口を指さすと、そこには確かにまだ蜘蛛の足が伸びていた。おっちゃんは、最初の晩にばばと一緒に蜘蛛となっていた。これで味方になってくれるのかは分からない。彼も、もし取り憑かれていたら、もう祐子を救ってくれる手はないのかもしれない。暴れる心臓を必死で宥めながら浅い呼吸を繰り返していると、少しだけ困ったような表情をしたかに見えたおっちゃんも、強く頷き祐子の手を引いた。

「行こうっ」

それが合図だった。どこへ逃げるというのだろうか。とにかくあの蜘蛛から逃れたい祐子は、おっちゃんに引かれるまま、ばばの家の門を勢いよく飛び出した。

「どこへ逃げるの！」

祐子の手を掴んだまま、おっちゃんは走っている。その手のひらからは、じわじわと汗が滲んでいる。

「ねえっ……」

いくら逃げても、こんな小さな村にいる限りすぐに見つかってしまうだろう。あの蜘蛛の姿であるならば、足もかなり速いはずだ。祐子はすぐに村を出て、街へ戻りたかった。

ばばも、この時が来るのがわかっていたのかもしれない。一番の逃げる方法は、おっちゃんが来た時同様、祐子を車で送ってくれることだった。そうすれば追いつかれることもないし、無駄に戦わずにすむだろう。

「おっちゃん。ねえ！　車で送ってくれるんじゃないの？」

走るだけ走り、それも限界に近づきながら祐子は言った。なにせ、あまりにも急いだので祐子の足は裸足だったのだ。普段気を付けて土の上を裸足で歩く

のは気持ちがいい。し
かし、こんなにも夢中で足下も確認出来ないと、大きな石が刺さる
ことも免れない。次第
に、土踏まずに痛みを感じるようになってきたが、おっちゃんはそ
れをいたわろうともし
てくれない。どうしたというのだ。祐子は、身体が痛みを帯び、ど
んどん熱くなっていく
のを感じた。呼吸も荒くなり、おそらく脈拍も異常に上昇している
だろうことが窺えた。
限界だ。そう思った時、祐子は自分が走っている道がどこかに気づ
いたのだ。いや、森の
中を走っているのは分かっていた。それがデジャブだということに
気づいたのだ。昨夜も、
こうして男の背中を追って、この道を走ったのだ。そう、暗かった
この道を。そしてその
後、またあの蜘蛛に出会ったのだ。なぜ、ここを通るのだ。これで
は街に出るどころか、
余計に山に入っているではないか。それに気づいた時、祐子の身体
は無意識に拒絶反応を
起こした。おっちゃんの掴んでいた手を振りきり、そして、叫んで
いたのだ。
「やめて！　どこへ行くの！」
急に足にストップをかけたので、おっちゃんの身体が祐子の方へと
よろめいた。倒れる
ことはなかったが、今まで祐子を掴んでいたその手の甲で額の汗を
拭うと、おっちゃんはふっと息を吐いた。それは、ため息とも違っ
た、安心したような、興奮を押さえつけようとしているようなそん
な静かな息だった。その顔色が、祐子に負けないほど青白いことに
気づく。気づけば、二人は崖の脇にいたのだ。そう、昨夜ばばが前
田を突き落とした、その崖の上に……。

「何やってんだ？」
唐突に聞こえたその声は、祐子のものでも、おっちゃんの物でもなかった。おっちゃんの背中から現れたのは、祐子がもう一度会いたいと願ったが、憎しみも少なからず持ち合わせている友樹にほかならなかった。
「どうして。友樹がどうしてここに？」
祐子は、おっちゃんがなぜここへ連れてきたのか分からず、少しずつ距離を取ろうと後退していた。崖の上、なぜ友樹までいるのだ。二人は何かを企んでいるのだろうか。しかし、男二人の態度からしてもそれはあり得ないようだった。お互いが、ここにいることに驚いているようだ。祐子は、昨夜の友樹に拒絶された気まずさも忘れて、同じ質問をもう一度繰り返した。彼の口から、何かを否定してほしかったのかもしれない。……何をだ。
「俺は、さっき家に刑事が来たんだ。それで、前田さんが亡くなったって聞いたよ。気になったから来てみたんだ。それだけだ。祐子はどうして」
祐子はなんて答えれば、どこまで話せばいいのか迷った。おっちゃんと二人、友樹の顔を見つめる。治まらない心臓の鼓動の激しさは限界を迎えていた。またあの蜘蛛に襲われることを想像すると、発狂しそうなほどの恐怖が足下から沸き上がってくるのだ。とにかく、一刻も早く隠れなければならない。

＊

祐子に言った事は、事実でしかなかった。この崖になぜ来ようと思

ったのか、友樹自身
も曖昧なものだった。身近な人間が死に、家にいることも不安だった。自分では誰にも恨みなど買っていないと思っている。しかし、それは夏美にも前田にも当てはまる気がした。それならば、友樹も殺されないとは限らないのだ。家に一人でいるのも不安。仕事に行くのも不安。気づけば、足が現場へ向かっていた。不思議とその場所には不安が起こらなかった。この崖に来る前に社にも行ってみたが、規制線が張られたままで入ることも出来なかった。神主さんはいないので、あまり困ることもないのだろうが。次にここへ来たが、その途中で友樹の家に来た細川刑事が別の家に入っていくのを見かけた。思わず逃げるようにその場を後にしたが、自分だけが何かを疑われているわけではないと確信したことで、ほっとしたのも間違いではなかった。ここに来て、崖下を覗くと足が震えた。その下は鬱蒼と繁る森だ。刑事が言っていたロッジというのが、おもちゃのように眼下に見える。あそこまで落ちるなら、途中で意識を失うだろう。無意味な行動に出たことを後悔し始め、自宅に戻ろうとした時だった。女の声が、崖のほうへ上がってくるのが聞こえたのだ。何かを焦っているような、それでいて怒っているような声に、友樹もその場に立ちすくむ。隠れるのもおかしな話だが、ひっそりと木の陰で息を殺したのだ。すると、最初に姿を見せたのは、男だった。それも友樹にとっては大切だった人物、夏美の父親ではないか。思わず姿を現し、声を掛ける。
「どうしてここに？」
なぜこの二人が一緒にいるのだ。父親の後ろに隠れていた祐子が姿を見せる。そして返ってきたのは、友樹への返答ではなく、同じ質問だった。その目には、詰問の色がある。
「俺は、刑事にここで前田さんが亡くなったって聞いて」
嘘をつく必要はないはずだった。もしかしたら、夏美の父親も祐子も同じ気持ちでここへ来たのかも知れない。それならば、一緒に手を合わせて帰ればいいのだ。しかし、父親は夏美が死んだ翌日に、

こんなに落ち着いているのだろうか？　疑問が心に浮かんだ時だった。祐子が叫んだのだ。それは、森中に駆け抜けるほどの大声ではなかった。耳を塞ぐほどの高い声でもない。しかし、その声を聞いた途端、友樹の体中を寒気が襲った。友樹が感じていた不安が、全て一気に体中からあふれ出したような、そしてそれをまさに表現した声だった。声だけではない。友樹の背筋が凍ったのは、声と同時に見た、祐子の表情のせいでもあったのだ。口を縦に思い切り開き、喉の奥がはっきりと見えた。真っ青な顔で、目からは涙が零れている。両手でその頬を挟めば、有名な絵画そのものだった。

「祐子……？」

その叫びを止めようと、友樹は祐子に駆け寄った。しかし、それより一瞬早く、夏美の

父親が彼女を抱き留めたのだ。

「祐子ちゃん、大丈夫だから」

それでも祐子の悲鳴は治まらない。もうこの二人を置いて、自宅へ逃げようかと、友樹

は思った。そして足を踏み出そうとした時だった。

「蜘蛛が、ばばの蜘蛛が……追いかけてくるんだよ！」

怒りを孕んだその声に、友樹の顔色が変わった。ばばとは、祐子の祖母のことだ。昔か

ら、今でさえ友樹も仲良く話す機会はある。昔よく遊んだ祐子よりも、ばばの方が近い存

在だ。

「おじさん、どういうことですか？　祐子は、何をこんなに怯えて」

祐子を抱きしめる夏美の父親に、友樹は問いかけた。今や、祐子の腰は抜けてしまいそ

うだ。

「友樹くん、この子を一緒にその木の陰に。早くするんだ！」

夏美の父親は、祐子の右肩を友樹に持つように促した。なぜ、ばばから逃げるのだ。友

樹は混乱する頭を必死に押さえ、とりあえず祐子の片方の腕を自分の肩に回した。そして、
父親に誘導されるまま、茂みの中へと入る。夏は、葉っぱが繁る。大きな太い木は、てっぺんまで身を隠すように枝を葉で覆う。小さな木も、まるで自分の誇りとでもいうように、全身に葉をつける。もろいようで、しっかりと土に根を生やし枝は固い。
友樹は茂みに入ると、一本の枝で自分の腕を擦ったのを感じた。ゆっくりと祐子を土の上に下ろし、患部を見る。一本の筋が通ったように、十センチほどの線が入り、次第にじわじわと血が出てきた。人差し指に唾を付け、傷のある位置に塗る。帰ってから、洗い流せば平気だろう。
「ばばは？　ねぇっ！　ばばは？」
地面に座り込んだ祐子が、夏美の父親のズボンを掴みながら何度も尋ねる。それを、友樹は呆然と眺めた。何かがおかしい。
「大丈夫だよ。少しの間、ここへ隠れていよう」
父親が、宥めるように祐子の頭を撫でる。しかし、祐子はそれでも安心出来ないようでキョロキョロと辺りを見回す。
「なぁ？　何が起こっているんだ。祐子のばーちゃんがどうかしたのか？」
「しっ！」
友樹が話しかけたが、祐子は睨むような視線で人差し指を顔の前に立てた。静かにしろ、ということか。友樹は、不平を表すように唇を尖らせると、祐子の脇にしゃがみ込んだ。

夏美の父親も、警戒するように辺りを確認すると、同じように祐子を挟んで反対側にしゃがんだ。三人で、こんな茂みの後ろで何から隠れるというのだ。しかし、それは祐子の口から語られたのだった。

「もうあたし、黙っていられない……」

もしも今、セミがたくさん鳴いていたら、聞こえないのではないかと思うほど小さな祐子の声。それを、両脇の男が顔を寄せて聞こうとした。祐子の話を待つ男達。その視線は、話すか迷う祐子の背中を押すことになった。友樹が、期待するように一つ頷く。友樹には感じられたのだ。おそらく、祐子は夏美と前田の死について何かを知っている。そして、それを今うち明けようとしているのだと。

「実は、夏美は蜘蛛の生け贄となったでしょう。あれは、村の身も心も綺麗な女の子がなるんだって、夏美は喜んでいた。でもね、そんなの嘘っぱちよ。あの子はばばに殺されたのよ」

「なっんだって……？」

友樹は、祐子の口から出た言葉が信じられなかった。祐子のばーちゃんが夏美を殺した？

言葉が見つからず、視線を夏美の父親へ向けると、彼も静かに頷いた。それに、再び驚く。

知っていた、というのか？

「ちょっと……。ちょっと待ってくれ。どうしてそうなるんだ。全然、訳が分からない！夏美とお前のばーちゃんは仲が良かったんだぞ？　そうだよな！　おじさん！」

友樹は、声を荒げそうになり、また祐子のしっと指を当てられた。その仕草が妙に腹立たしい。夏美の父親も冷静のようだが、息を殺して祐子の腕を掴んでいるのが気になった。

しかし、それよりも説明が欲しいなによりも、どうしてこんな事態になっているのか自分だけ置いてけぼりにされているようで心許ないのだ。

「全部を。全てを話すわ」

祐子がそう呟き、友樹は強く頷いた。

「あたしがここへ来たのは偶然だった。夏前に受けたオーディションに合格して、これから忙しくなるから、ばばに報告をかねて会いに来たのよ。夏美に会えたことは純粋に嬉しかった。お祭りにも最初は一緒に行こうと話していたの。でも、ばばはあたしに帰れと、来た日からうるさく言ったわ」

友樹は、夏美と行った祭りを思い出した。その記憶を、最大限に努力して振り払うと、後を促すように頷いた。父親も、祐子の腕を握ったまま下を向いている。聞きたくないのだろう。

「その後すぐ、生け贄の話を聞いた。蜘蛛の神様なんているわけない。くだらないのに選ばれた夏美を、あたしは鼻で笑ったわ。でも、それはあたしが間違っていたのよ」

「間違っていた？」

友樹が首を傾げると、今度は祐子が大きく頷いた。

「そうよ。蜘蛛の神はいたのよ！　いいえ、まだいるの！　ここにいるおじさん。この人も仲間よ！」

祐子を掴むその彼の手にさらに力が込められるのを、友樹は見た。なにか、動揺しているようだ。一切顔を上げないので表情は掴めない。

「あたし、見たのよ。ばばが大きな蜘蛛の化け物になっているのを。今もそうよ」

「蜘蛛の化け物？」

「そうよ。身体は大きくて真っ黒で、目が赤くなるの。手足は長くて八本があちこちに伸びていたわ。さっきもばばは蜘蛛になっていたの。それで、手足の先には細い毛が生えている。身体は蜘蛛なのに、顔はばばのままなのよ？　とっても怖かった」

「まさ……。まさかそんな馬鹿なことが？　祐子。そんなことあるわけないだろう。それに、その蜘蛛が夏美となんの関係があるっていうんだ」

じれったそうに、祐子が舌打ちをする。

「だから、その蜘蛛が夏美を襲うのを、あたしはこの目でみたのよ

！　それだけじゃない。最初の晩、あたしは夜中に目が覚めたわ。廊下を見ると、蜘蛛になった姿のばばが糸を家の壁に吐いていたのよ。あたしが見たことに気づいたばばが、あたしを飲み込もうとまでした。その痕が、くっきりと足首に残っていたのを、次の日の朝に夏美も見ているわ！」

「そんな。嘘だろう」

絶望、その二文字が友樹を襲った。ただ、首を横に振る。

「いいえ、間違いじゃないの！　友樹、あたしははっきりとばばが蜘蛛となって殺すのを見たのよ」

「もういい」

友樹は我慢できなかった。しかし、祐子は友樹が叫んだことにも気づかないように、さらにまくしたてる。もしも夏美の父親が腕を押さえていなかったら、彼女はきっとどこかへ行ってしまう気がした。それが、どこか人間離れしているようでぞっとする。

「凄かったわ！　ばばが、一気に夏美に駆け寄って殺したのよ。前田さんもそう。ばばが体当たりして、ここから落ちていったわ。あり得ない？　現にあり得るのよ」

「何を言っているんだ。前田さんまで？」

「そうよ！　でもね、ばばはあたしに気づかれたのが分かったから、殺そうとしたのよ。それで、ここまで逃げてきたの。この夏美のおっちゃんが、助けてくれた。もう、あたしは街へ戻るわ」

祐子は、息も切れ切れに早口でそこまで言い切った。街へ戻る？　それなのに、彼女はなぜここにいるんだ。いや、どうして夏美の父親は彼女をここへ連れてきたのだろうか。そして、それを友樹が聞こうとしたとき、夏美の父親が動いた。

「だから、お前が死ぬんだ！」

その父親の叫びと、祐子の悲鳴が重なる。友樹には、一瞬何が起こったのか分からなかった。気づいた時には、父親が祐子を崖下へ突き落とそうとし、祐子はそれに耐えながらも悲鳴を上げ続けていた。そんなに叫べば、喉が切れてしまうのではないかと思うほどに。

しかし、心のどこかでは合点していた。父親が、なぜあんなにも祐子の腕を握っていたのか。彼女をこうするためだったのだ。

「やめろっ！」

今度は真後ろから聞こえる男の声。続いて、友樹は重いものが背中から被さるのを感じた。地面に顔を打ち付ける。鼻をぶつけ、目に土が入った。咄嗟のことに驚き、歯が唇に当たる。口の中に、血の味が広がった。うめき声を漏らしながら首を曲げて背中を見ると、男が一人自分の背中に乗っているのが分かった。両手を押さえられ、身体をゆすってもびくともしない。顔を上げると、今度は目の前で繰り広げられている光景に驚く。警官の服を着た男数人に、夏美の父親と、祐子が取り押さえられているのだ。

「助けてっ！　誰か、助けてー」

そう、祐子に向かって、祐子のばばが近寄っていたのだ。祐子は、夏美の父親に押され崖下に落とされそうになったが、警官に助けられたようだ。しかしそこに安心した様子はなく、ただ、ばばの方を向いて叫んでいるのだ。

「友樹！　見て。ばばが来る！　助けてちょうだい！　蜘蛛の化け物よ」

友樹は足が動かなかった。周りに警官がいたから、自分が守ってやらなくてはならないと思わなかったのではない。ばばは、確かに現れた。しかし、それは人間の姿に間違いなかったのだ。ばばは、蜘蛛などではなかった。

8　エピローグ

「じゃあ、すべて祐子がやったというんですか？」

二日後、友樹の家にはもう一度細川刑事が訪れて来ていた。居間のソファに座った途端言った刑事の言葉に、友樹は耳を疑った。一度刑事の前から立ち上がると、その場で所在なげに二、三歩歩いた。自分を落ち着かせるために深呼吸をして細川を見ると、彼はさりげなくソファへ手を差し出した。座れ、ということだ。友樹は小刻みに数回頷くと、もう一度席に着いた。確かに、昨日の祐子の姿は尋常ではなかった。しかし、なぜ祐子が久しぶりに会った夏美と、そして前田まで殺さなければならなかったのだ。それに、蜘蛛がなんとかと言っていなかったか。昨夜も友樹は眠ることが出来なかった。祐子と夏美の父親は、友樹が崖の上で警官に押さえられている間に連行されていった。警官は、友樹に手を出すつもりは毛頭なく、夏美の父親の強行から彼を守ろうとしたのだった。そのまま、若い刑事が友樹を自宅に送ってくれたが、話は翌日細川が来るということで何も教えてはくれなかった。そして、ばばは、騒ぎ立てる祐子の頬を一度平手で打ったかと思うと、そのまま一人足を自宅へ向けたのだった。年老いたその足で、刑事が送ると言った申し出を強く断り、一人歩いて山を下りていった。それからどうしたか、友樹は会いに行くことも出来ず、分からない。

しかし、まずは細川の話を聞くのが先だと思ったのだ。祐子の異常な姿を見たものの、祐子が話してくれた、ばばが夏美を殺したという言葉が、友樹の頭からも離れていなかった。身を乗り出して友樹が目の前の細川に詰め寄ると、両手でそれを抑えるように、刑事は太った腹を膨らませた。

「いや、まだ祐子さんは全てを自白したわけではありません。しかし、間違いないでしょう。いや」

今では、細川の口癖も気にならなかった。早く教えてくれ。それ

しかなかった。
「祐子は、祐子はなんで……夏美を。蜘蛛はなんだったんですか？」
細川は、一つため息を吐くと、友樹が出した冷たいお茶を一口飲んだ。
「話せば長くなりますが。実は、私はおとといい、祐子さんを見た時から怪しいと思っていたんです。いや、おかしいと言うべきですかな」
「おかしい？」
友樹の問いに、細川が神妙に頷く。
「そう。あの外見ですよ。確かに細い。色も白くて美しい。しかし、健康的とはほど遠い。それが私の彼女への第一印象でした」
友樹も祐子の色白の肌を思い出した。そして、次に自分の浅黒い日に焼けた肌を見る。
「どういうことですか、それ。祐子が幽霊だとでもいいたいんじゃないでしょうね？　それに、あいつはモデルだか歌手だかになるのが夢だったんです。女の子は美白美白ってこだわりますよね。夢が叶うから慎重になっていたんじゃないですか」
友樹はごくりと唾を飲み込んだ。夏とはいえ、怪談話はお断りだ。確かに、祐子には足があるし、身体も透けていない。第一幽霊なんて存在するわけが……ないではないか。細川が、ゆっくりと首を横に振った。友樹は、それが彼女は幽霊ではない、という返事だと思った。しかし、そうではなかったのだ。
「違うんですよ、友樹さん」
「何がですか？」
細川は、両手を腹の上で組み合わせた。でっぷりとした腹の上では、その手が埋もれてしまいそうだ。その肉厚の手に焦点を合わせていると、細川はまたもや予想外のことを口にした。
昨日の空が嘘のように、今の窓から見える空はどんよりと曇っている。いつもは清々しく見える真っ白な入道雲が、今日はその色を灰色に変えている。それだけで世界中が重苦しく、誰もが悩んでいる

ように思えてしまう。いや、空も気を遣ってくれているのかもしれない。どうぞ悩んでください、とばかりに。
「彼女は、歌手のオーディションになど受かってはいないのです。いや、もちろん、デビューの話などありません」
細川の野太い声が、部屋に響いた。冗談だと思った。祐子は、あんなにも嬉しそうだったではないか。おかしい話ばかりで、脳みそが付いてこない。眉間に皺を寄せながらも、友樹の声は笑いを含んでいた。
「は？　だって、彼女が言っていたんですよ。オーディションに受かったから来たって。しばらく来られないって。え……？　嘘をついていたっていうんですか？」
笑ってデビューすると言った祐子。彼氏と別れたと泣きそうな顔で告げた祐子。社で雨の音に怯え、悪戯っぽい目で友樹に寄り添ってきた祐子。どこまでが本当で、どれが嘘だ。全て欺かれていたのか。わざわざ人を騙しにここへ来て、殺人をおかして何の得があるのだ。脳裏に浮かぶ質問に、答えを挙げてはすぐにうち消していく。細川は、そんな友樹の前で大きく手を左右に振った。
「いや、言ってみれば彼女は生きた幽霊みたいなものですよ。今も、取調室で違う世界にいる」
「細川さん。お願いです。はっきりと言って下さい。俺は、夏美のためにも、夏美の親父さんのためにも、何が起こったのかはっきりと知りたいんですよ」
二人は、これからも友樹の大切な人間のはずだった。それが少しの歯車が狂っただけで、自分の人生とは無縁になってしまう。夏美のことを記憶から消すことはできないだろう。しかし、一緒に歩むこともう出来ない。記憶だって薄れてしまう。夢に出てきて欲しい。これは昨晩も布団の中で祈ったことだった。友樹のまっすぐな視線に、細川もゆっくりと頷いた。
「いいでしょう。今日はそれをお伝えに来たのですから。ただ、驚かないでくださいね」

ごくり、友樹が唾を飲み込んだのと同時に、細川は話し始めた。
「事の始まりは三ヶ月ほど前になります。彼女はね、付き合っている男性との間に、子供が出来たんですよ」
「えっ？」
今や事件や周りのニュースとして、十代で妊娠する女の子は少なくないのは知っている。
それでも、友樹は自分の身近な人間が、まさか妊娠を体験しているとは思わなかった。それに……。
「子供は……？」
「調べたところ、中絶しています」
「調べたって、なぜ彼女のそんな過去を調べる必要があったんですか！」
その答えは分かっていた。彼女は子供の話など一寸もすることがなかったし、子供を連れてなどいなかった。だが出来れば、友樹は知りたくなかった。中絶の選択をしたからにはそれなりの理由があったはずだ。自分に、その理由を受け止められるとは思わなかった。人の生き方にはそれぞれの道と理由がある。そんなことくらい分かっている。それでも、自分と祐子の間の数年間の溝は大きいのだ。小さい頃に別れたままの祐子とは違いすぎる。　細川は、今度は友樹の脳みそが追いつくのを待ってはくれなかった。すぐに続ける。
「言ったでしょう。彼女の痩せ具合が気になったと。それにね、私は以前、警察のある部署にいて、そういう人間を見ているからすぐにピンと来たんですよ」
「そういう人間？」
「そうです。祐子さん、被疑者ですが、彼女は薬物中毒なのですよ」
薬物。麻薬、シンナー、言葉だけは知っている。それは、友樹の人生に関わるはずのないものだったはずだ。次から次へと、そんなものが目の前に突き出される。なんだ、なんだ、なんだ。これは夢ではないのか？
「いや、彼女がそんなことをするはずがありません。俺たち、何も

知りませんでした」
友樹の顔を、一度細川が凝視した。自分が関係ないことを表すように、友樹が必死で首を横に振ると、細川は小さく頷く。
「もちろん、この村の人間は誰も同じ事などしていません。ただ、知らなかったか、と言うと、そうでもないのですよ」
「誰が祐子に薬を……？」
「祐子さんに疑問を持った私は、部下に調べさせました。彼女の実家、そしてその周辺をね。街の警察署にもお願いしまして。すると、すぐに獲物がかかりました」
細川は、そこでまたお茶を一口啜る。その一連の動作が友樹をじらしているように思えてしまう。だが次の言葉をじっと待った。
「祐子さんが付き合っていた男性、つまり子供の父親が、彼女に薬を渡していたのです」
「は？　なぜですか」
「その男は、裕福な家の次男坊でしてね。色々な悪ガキとも付き合っていた。そして、薬を入手する機会があったんです。あ、そのルートは現在捜査中ですが。男は、子供を下ろしてショックを受けている祐子さんの気分を、盛り上げようとしてあげたらしいです。中絶したあとに飲む薬だと偽ってね」
「そんな……」
これから先は、聞かない方がいいのかもしれない。直感的にそう思った。部屋の温度はどんどん下がっていくようだし、無意識に体中が震えた。今まで関わったこともなかったような悪への恐怖と、それを断ち切らなかった祐子への苛立ち。彼女との再会を、もう喜ぶことは出来ない。細川の声が聞こえないように、友樹は両耳を手で塞ごうとした。それでも、細川の声は頭の芯にまで響いてきた。
「祐子さんは、その薬を飲んでから、元気はあるもののどこか気分の上がり下がりが激しくなったそうです。ご家族に連絡すると、ご両親もなんとなく気づいていた、と。そこへ、オーディションの合格の話を、祐子さんが始めた。友樹さん、続きを聞くことをやめま

すか？」
　細川の最後の言葉で、友樹は塞いでいた手をゆっくりとはずした。項垂れた顔から視線だけを上げ、ごくり、と唾を飲み込んだ。夏美は襲われる恐怖から逃げることも出来なかった。それなのに、自分は事実を聞くだけで恐れているのだ、という思いが友樹自身を責める。その顔は頬が歪み、数日寝ていないせいで目が窪みかけている。どんなに醜いかと友樹は自覚出来なかったし、細川も口にはしなかった。絞り出したような友樹の掠れた声が、話を進めるクスリとなる。
「嘘、なんですよね？」
　その一言で、細川も深く頷いた。まだ数回しか顔を合わせていないはずなのに、二人の間には親密な空気が流れた。楽しいことを共有することは簡単だ。どんな顔をしていても誰も責めない。笑い声が漏れ、その時一緒にいた相手がどんな表情をしていたかは、それほど記憶には残らない。だが、辛い場面ではそれが正反対になる。相手の一挙一動が気になり、憎らしくなる。細川は、この話が一人の人間を苦しめると分かっているからこそ、真剣だった。握りしめた両手が動くことはない。それは細川が表す意志の強さだった。
「そうです。嘘、というよりは妄想です。ご両親が、祐子さんの言う事務所に連絡をしたら、そんなオーディション自体開催されていなかったそうです。彼女は、この村に来てからも薬を飲んでいた。その薬を調べたところ、確かに薬物でした。彼女からも陽性反応が出ました。それは、幻覚が主に見えるもので、ほんのわずかだけで物が変形・巨大化するんですよ。身体的にも不安感や気分の高揚や頻脈とか症状は出ますがね。全て、彼女の幻視だったんですよ」
「つまり、蜘蛛の化け物なんか存在しなくて、祐子が化け物になりつつあったということですか」
「あ、蜘蛛の化け物。それは取り調べでも供述しているようですね。なんでも、自分のおばあさんが巨大化して蜘蛛に化けている。それで夏美さんと前田さんを襲ったのだと」

それは祐子が崖の上でも話していたことだ。彼女は薬のせいでそんな幻覚を見ていたというのだ。なぜ蜘蛛だったのだろう。なぜ自分の祖母を化け物にしたのだろう。その答えを、友樹が祐子の口から聞くことはないだろう。しかし、言えることは一つだけ。

「ばーちゃんが、そんなことするはずないんだ」

細川が、再度頷いた。

「おばあさん、そして祐子さんのご両親にもお話を聞きました。ご両親は、祐子さんの異変に気づき、おばあさんに相談したらしいです。祐子の飲んでいる薬がおかしいから、確かめてくれ、と。これもおかしな話だ。普段一緒に住んでいる家族が、田舎の一人で住む老人に頼むなど、調子がいい。かわいそうに彼女をおしつけられたおばーさんは、必死で彼女を街へ戻そうとしたらしい。なんでも、最初の晩は薬を飲んで寝た祐子さんが、夜中に暴れたとか。それで、おばあさんは彼女の足を押さえつけ、どうにか幻覚作用が治まるのを待ったらしい」

「そういえば、それも崖の上で祐子は言っていました。足に痕が残って、夏美もそれを見た。と」

「そう。でも、老人の力では若い……、しかも薬をやっている子を抑えつけるのは大変だ。それで、おばーさんは夏美さんの父親に助けを求めたのです」

「え……、てことは」

「そうです。夏美さんのお父さんも、その夜祐子さんを抑えるのに呼ばれ、薬の秘密を聞いてしまったのですよ。でも、祐子さんからすれば蜘蛛のお化けにしか見えなかった。それが、おぼろげな記憶として残った。足の痕を見て、間違った記憶を確信してしまったのでしょう」

結局、祐子に踊らされていたということなのだろうか。夏美を返せ、時間を返せ、楽しかった思い出を返せ。憎しみは増すばかりだ。頭の中に浮かぶいくつもの「なぜ」は、結局なんにもならないのに。一番聞きたい答えを、友樹はもとめた。

「でも、なんで夏美は殺されたんですか！」
「それは彼女の嫉妬、そして、あなたが原因かもしれません。いや、事故とも言えるのですよ」
「事故？」
あんなにも無惨に首を切られていたというのにか。友樹の記憶が再び蘇る。じっと見つめている夏美の黒い瞳が、友樹の呼吸を苦しくさせる。それが、事故だというのか。自分が原因だと言われたことにも納得がいかない。友樹は細川を睨んだ。
「そうです。祐子さんは、祭りであなたと夏美さんが社に行くのを見て後を追った。そして、あなたと前田さんが去ったあと、社に入った。何も殺すつもりなどなかったでしょう。しかし、そこへ現れたのが、おばーさんだった。彼女の目には、化け物だった。夏美さんを守ろうと、側にあった護身用の刀を蜘蛛、もどきですが、向けた。反対に、おばーさんは驚いたでしょう。孫が刀を向けてきたのだから。祐子さんから刀を取ろうとしてもみ合ううちに、夏美さんに被害が及んだ。すべておばーさんの証言ですが、現場を見ても合致します。こういうことなのですよ」
「そんなっ。夏美、夏美は無関係だったというんですか」
夏美は、そんなことで死んだのだ。祐子の妄想のせいで死んだ。真っ黒の闇が友樹の視界を塞いだ。ショックだった。それだけのことで自分と夏美の未来は奪われたのだ。身体の感覚が全くなくなり、頭だけが妙に重たい。
「俺、俺があの夜、夏美の側にいてやれば……」
細川は首を左右に振ると、小さく溜め息を吐いた。コトリ、と音がしたので友樹が庭を見ると、窓の向こうから野良猫がじっと見ていた。全身黒い毛で覆われた大人の猫だ。その鋭い視線に、猫にまで責められている気がした。
「それだけではないかもしれません。女の子同士ですからね、感情の行き違いもあるでしょう。夏美さんと恋人同士だったあなたを見て羨ましかったのかもしれない。心のどこかでは、自分が夢の中に

いると気づいていて、夏美さんの手にしている幸せが欲しくなったのかもしれない。殺そうと思っていたのか、思っていなかったのか。祐子さん……被疑者の供述を待ちましょう」

猫が、細川の言葉に相づちを打つように鳴いた。すぐに細川がシッツシッツシと追い払う仕草をした。猫は、仲間に入れて貰えないことに不平だというようにもう一度鳴くと、尻尾をぴんと立てて、そのまま庭を横切っていった。細川が、猫がいなくなったのを確かめるように一度首を伸ばすと、その先を続ける。

「つまり、そういうことです。前田さんも、祭りの夜祐子さんを見かけたんですよ。彼女はその前にどうやら薬を飲んでいたようでね。祭りでも様子はおかしかったのでしょう。前田さんはあなたにも彼女のことを聞いたようですしね。薬だとは分からないまでも嫌な臭いを嗅ぎつけた。そして警察から帰ったあの夜、おばーさんの家に行った。祐子さんはその時、あなたと会っていたらしいですが。何か、気づきましたか？」

友樹はそう問われて考えた。確かに、祐子の言っていることは自分のことばかりであり、どこかおかしかったといわれれば否定出来ない。しかし、それ以上に自分も夏美を失って心が壊れかけていた。今もそうだ。細川は何を言いたいのだ。あの時、祐子の異変に気づき抑えていれば、前田は死なずに済んだとでも言いたいのか。それが友樹の表情に出た。

唇を噛みしめ、泣きそうな顔で、しかし細川を睨む。細川も、まるでその気持ちも分かっていたかのように小さく笑って言った。

「いや、前田さんが亡くなったことで、あなたを責めている訳では決してないのです。あなたに言える同じことが、私にも当てはまりますからね。ただ、前田さん、彼が何か知っているとは思っていたのですがね」

「前田さんが？　なぜですか。彼は祭りを仕切っていただけで、祐子となんの繋がりもないはずですよ」

「いえいえ、現在の話ではありませんよ。友樹さん、私が先日警察

署に来ていただいた際、最後にお聞きしたことを覚えていますか？」
　こんなに次々と質問されることが、最後にいつあったか友樹は覚えていなかった。今日は何度記憶を掘り返していることだろう。警察署……。最後に細川と何を話しただろう。確か刑事が部屋からみんないなくなり、細川は友樹の前に座っていた。蜘蛛の復活祭がなぜ出来たのかを話し、それから……。前回の捧げ者も死んだ、と言っていた。そうだ。友樹は今までそのことをすっかり忘れていた。あの日帰りのタクシーで、友樹が前回の捧げ者について聞いた祭の、前田の歪んだ顔。
「前田さんが、五十年前の捧げ者と何か関係しているんですか？」
　友樹の頭の線が繋がったことに、細川は口の右端を微妙に引き上げた。正解。そう言っているようだった。
「実は、五十年前捧げ者として社で眠り、死亡したのは前田さんのお姉さんなんですよ」
「え……？」
「驚くのも無理はありません。私は、前田さんが、という説も捨てきれなかったんです。後から前田さんの取り調べをしていた刑事によると、素直に姉の死亡したことを認めたということでした。ですが村の、つまりその事実を知らない者には黙っているようにと念を押したそうですがね」
　益々頭が混乱してきた。友樹は何度か口を開いたが、それは言葉にならずに消えていく。前田の姉が、五十年前に捧げ者になっていた。そして死んだ。だから、友樹がその話を持ち出した時、あんなに嫌そうな顔をしたのだ。
「どうして……」
　何度も頭に浮かんだ言葉がそのまま口をついて出た。それはどうして彼の姉が死んだのか。なぜ姉の死んだ原因の祭りに、あんなにも前田は積極的だったのか。その二つの意味があったが、後は続かなかった。目だけで細川に訴える。
「どうしてお姉さんが亡くなったのか、ということですね？」

細川の質問に、友樹は深く息を吐き出しながら大きく頷いた。
「実は、この蜘蛛の捧げ者は質素な儀式でした。しかし、それなりに人々に知られていたらしいのです。そうなれば、ずっと事件が起こらなかったことのほうが不思議ですよ。お姉さんは、ある心ない男共に襲われ、殺されました。数日後三人の犯人が捕まりましたが、市外の者で、計画的犯行でした」
友樹は吐き出した息を、今度は思い切り吸い込んだ。再び目の前が真っ黒になる。そんな事件がここであったなど、聞いたことがない。五十年の月日は、そんなにも大きなものなのか。一人の少女が殺されたのに、なぜ儀式は終わらないのだ。
「前田さんは取り調べで言っていたそうです。姉が殺された前回と違い、今度は自分が守りたかった、と」
「なぜ……、なぜ前田さんは全てを僕たちに話してくれなかったんですか。そうすればもっと厳重に守れたかもしれない」
「五十年前、前田さんはまだ赤ん坊だった。ご両親から後々お姉さんについて聞いたそうです。それでも捧げ者になったことをご両親は後悔していなかった。五十年分の不幸を、娘さんが一心に受けてくれたと。もし捧げ者をなくせば、何が起こるか分からない。この村の人たちはそう考えているようですね。だから余計な過去を話すことはない。葬り去ろうとしているんですよ」
「そんな……。それじゃあ、夏美のこともそうして納得しろと言うんですか！」
友樹の顔には、あのチャームポイントといえるえくぼはなかった。その代わりに、怒りで歪んだ顔中に皺が刻まれている。細川が、友樹の叫びに動揺することはない。さっきの猫と同じように、ただじっと友樹を真正面から見つめている。その目を見ていると、友樹も怒りの気力を失っていった。少しでも臆病な素振りを見せられれば、もっと怒鳴っていたかもしれない。だが、彼は違った。全てを受け止めようとしている。そんな態度を取られると、嫌でも気が付いてしまう。この人に当たっても仕方がないのだ、と。

「すいません……」
「構いません。前田さんも、同じように取り調べで混乱を見せました。だが、彼は全てを話してくれてはいなかった。まさか、おばーさんの家に行くとは。警察に話してくれれば、彼も不幸な目に遭うことを防げた」
そうだ。彼はなぜタクシーを降りたあと、祐子の家に向かったのだ。用事があるならば翌日でも良かっただろうに、あの時の前田を思い出すと、妙にそわそわしていた。
「まさか、ばーちゃんを脅そうと？」
「その、まさかです。その言い合いを祐子さんが聞いてしまい、彼の後をつけた。前田さんは祐子さんにも黙っていろ、と脅そうとしたらしい。が、おばーさんも二人の後を付けていた。祐子さんは、同じ映像をまた見たのです。おばーさんが襲ってくる、というね」
崖の上で友樹の目の前で動転していた祐子は、端から見ればただ暴れているだけだった。恐怖で目を見開き、首を激しく左右に振って辺りを見回す。彼女は我を失っていた。友樹でさえ、彼女を押さえている自信はなかった。真っ暗な暗がり。そこに現れる一体の巨大蜘蛛。そんな祐子の目から見た世界を想像して、友樹は身震いして言った。
「祐子が怯えて、前田さんを突き落としたんですね」
暗い闇の中から蜘蛛が飛び出し、襲いかかってくる。前田も側にいる。三つどもえになって、その一つが崖の下に押される。……本当に、祐子が突き落としたのだろうか。老婆が、脅されたことにカッとしての犯行ではないのだろうか。腰が曲がり、脚も弱くなっている。腕の皮膚はたるみ、額には皺が寄っている。そんな老人に可能なことだろうか。そんな友樹の考えを、細川は否定するように言った。
「そうです。それも事故だということです。おばあさんの証言ですが、間違いないでしょう。こうして二人は亡くなった。おばあさんは、祐子さんをどうしても街に、両親の元に返したかったようです。

もう二人も死んでしまった。もう一人祐子さんの秘密を知っている人間がいる。彼女は、成り行きではその男も殺すかもしれなかった」
もう一人。祐子の薬について知っているのは……。
「夏美のおじさんですね？」
「そう。彼も、祐子さんの行動がおかしいことを知っていた。初めは前田さんの犯行だと思ったらしいが、彼が死んだことを耳にした。それでいて、祐子さんの奇行だ。夏美さんを殺したのが彼女だと思い当たり、あの朝彼女を連れ出した。おばーさんに確認したところ、動揺され確信を持ったようです。彼女に会ったとき、ちょうど祐子さんはまた幻覚を見ていた。親父さんは、すぐに突き落とすつもりだったそうだ。だが、君に会ってしまった」
「俺？」
確かに会った。友樹は、自分の胸を自ら指さした。自分があの場で何が出来たのか分からない。警察が来なければ、祐子共々崖下に落とされたかもしれない。もしくは、祐子に落とされていたかもしれない。だが、細川は今度は口の端を下げて言った。その表情は切なげで、全てが真実だと改めて突きつけられたようだった。
「そうだよ。いや、あの娘と付き合っていたんだろう？　夏美さんの父親もそれなら気が引けただろう。君は、時間を稼いでくれたんだよ。しかし、祐子さんの言葉を聞いているうちについにカッとして行動に出た。そこに、私たち警察が駆けつけた。これが事件の真相だよ。これからは、祐子さんもご両親もとてつもなく大きな苦労があるだろう。君も恋人を亡くした。それでも、若いんだ。夢はあるだろう。強く、生きるんだよ」
彼なりの励ましが、部屋には虚しく響いた。
―夢。俺の夢ってなんだっけ。
友樹は、涙で霞む目で、細川の顔をただぼんやりと眺めた。夢など持たなくてはいけないのだろうか。すぐ近くにある幸せを失って大きな夢を掴むなら、そんなものに意味はなかった。この村に、五十年に一度やってくるという不幸は本当だったのかもしれない。捧げ

物は綺麗な身体でなければならない。友樹は、ただ夏美を思ってその場で泣き続けた。

＊

「それで？　それでどうなったの？」

腰までありそうな真っ黒な髪をおさげにした女の子が、身を乗り出して聞いた。女の子の周りにいる数人の子供達も、老人を囲んで興味深そうに目を輝かせた。女の子の着ている青い浴衣は、おろし立てのいい匂いがする。老人は、その幸せそうな女の子に向け頷くと、鼻の下にこしらえた白い髭を撫でながら言った。

「そうだね。それから、女の子はいっぱい、いっぱい苦しんだんだ。それで、心が壊れてしまったのさ」

「死んじゃったの？」

女の子が言い、数人がその声に息を飲んだ。庭にある大木には、十数匹もいるだろうか。ひっきりなしに、休憩もなくセミが鳴き続けている。今年も夏がやって来た。太陽の光が村中を照らし、作物に栄養を与える。それは数十年前となんら変わらない光景だ。それなのに、人は老いていく。五十年前の事件を知る者は、もうほとんどいない。前田は、過去を封印した。だが、老人は違った。

「そうだよ。女の子は、夢を叶えることが出来なかったんだ」

「かわいそう……」

おさげの髪の女の子が、鼻を啜る。すると、周りの男の子が一人、その子の髪を引っ張った。甚平を着て、胸にはうちわを差し込んでいる。その行動で、女の子が余計泣きそうな声を上げる。すると、老人が男の子に言った。

「これこれ、やめなさい。女の子が泣いている時、意地悪をするのではなく、優しくしなくてはいけないよ」

老人が静かに諭すと、男の子は恥ずかしそうに髪から手を離した。まだ男の子は小さくて、こんな時どう接すればいいのか分からなかっただけなのだ。間違いは、封印してはいけない。教えてあげなけ

ればならないのだ。
「よしよし。では、続きを話してあげよう。その祐子お姉さんのおばあさんは、どうなったか分かる子はおるかな？」
子供達は、口々に思い思いの考えを口にした。
「えー、百年生きたー！」
「違うよ、お姉ちゃんがいなくなって寂しくて死んじゃったんだよ！」
「嘘だね。これが当たりでしょう！　おばーちゃんは祐子が死んで嬉しかった！」
「えー、そんなわけあるかー！」
子供達の間で口論が起こりそうになった時だった。老人が、ぱんぱん、と手を打つと、子供達は静かになる。これは、普段からある光景だ。
「おばあさんはね、それから一年後に亡くなったんだよ。心労がたたったんだろう」
老人は、両手を膝の上で握りしめながら、ぎゅっと目を瞑って言った。子供達は、何かもっと驚くようなことが待っていると思ったのだろう。一瞬、ぽかんと口を開けた。
「なんだ！　全然面白くないや」
一人の男の子が、そう叫んで森の方へと駆けだした。周りに座っていた男の子達も、一人、二人とその少年の後を追っていく。最初はちらちらと老人の方を振り返って走っていったが、すぐに振り向かなくなった。それでいい、それでいいのだ。老人は心の中で繰り返した。
「ねーおじいさん。心労ってなぁに？」
一人だけ残った、おさげの髪の少女が、老人を見上げて聞いた。その瞳は、老人が過去

のどこかで見たような覚えのあるものだった。少女というのは、皆同じ瞳をしているものだろうか。

「心労とはね、色んな心配や苦労があって、心が疲れてしまうことだよ。心が疲れると身体も疲れる。それで、死んでしまうんだ」

「えー、こわいんだね。おばーさんは、どうして心労になったの？」

難しい言葉でまとめてしまえば簡単だ。しかし、老人は少しの間考えて、ゆっくりと口を開いた。

「自分の罪が心に重く蓋をしたんだ。おばーさんは祐子お姉さんに言ったんだ。何年も田舎に来ないで、いきなり心配されても嬉しくない。早く帰れ、と」

「それが、心労なの？」

「そうだよ。蜘蛛の神様は本当にいるのかもしれん。おばーさんは、蜘蛛に呪われていたんだよ。気持ちをな。田舎で一人、寂しかったんだ。都会の家族に見向きもされず、田舎にいる周りの家族が羨ましく。おばーさんは、孫に隠す孤独と憎しみの本心をぶつけたことを後悔したんだ。それにね、最後まで聞いてくれたお礼に秘密におしえてあげよう」

老人が言うと、女の子が顔を寄せた。

「なぁに？」

「本当はね、夏美さんと前田さんを殺したのは、そのおばーさんだったんだよ。おばーさんは、夏美さんの家族が羨ましかったんだ。それがだんだん憎らしくなってしまったんだ。脅されていたのも、実は自分の犯した罪についてだったんだよ」

女の子には難しい感情だったのだろうか。彼女は数秒首を傾げる

と、さも当然、という
ように声高らかに言った。
「え！　ひどーい！」
　その言い方が妙に女の子の年代には大人びていた。彼女は理解出来なかったのかもしれない。それでも、老人の勿体ぶった言い方に妥当な反応を見つけたようだった。こんな感情は知らないでいられればどれだけいいだろう。
「そうだね。でも、おばあさんは死んだんだよ。一人で、ひっそりと。ある日、少年がそのおばーさんの家に行って死体を発見したんだ」
「一人で死んでいたの？」
「いいや。一人ではない。部屋の床一面に蜘蛛も一緒に死んでいたらしい」
「うわ！　気持ち悪い！……もしかして、その少年っておじいちゃんのこと？」
少女の頭を撫でながら、老人は微笑んだ。
「さて、どうかな。ほら、もうすぐお祭りが始まるよ。お友達が行ってしまったみたいだ。早く遊びにいっておいで」
女の子は一瞬迷う仕草を見せたが、すぐに笑顔で頷いた。
「うん！　おじーさん、またお話聞かせてね」
浴衣の裾を揺らし、慣れない下駄に足下ばかりを確認しながら、女の子はさっき男の子達が駆け上がって行った森への道を追いかける。老人は、自分の顎の下に蓄えた白い髭を撫でながら、小さなため息を吐く。あの事件から、五十年。老人は、話を上手く完結出来たことに満足していた。子供達に大事なことを伝えながら、それでも怖がらせる必要はな

い。知らなくて良いこともあるのだ。嘘をついたことを後悔はしていない。事実を知れば、
せっかく都会から戻ってきたりする今の村の若者が出ていってしまう恐れもある。子供を
怖がらせる悪者じいさんの役を買って出る勇気もない。
老人は、五十年前のあの夏、颯爽と姿を消した老婆の顔を思い出そうとした。しかし、
記憶はすでに、それを消し去っていた。あの夏、祐子が捕まり、夏美の父親も殺人未遂で逮捕された。その翌日、ばばは一人姿をくらました。当初は、警察も捜索願の元、方々を探し回ったようだが、それもすぐに音沙汰がなくなった。それ以来、祐子の家に近付く者はいない。なぜなら、老婆が姿を消した後、村長が家の様子を確かめに行ったのだ。その時、仏壇のある和室には、なんとも奇妙な物体が残されていたのだ。それは、一本の長い蜘蛛の足だった。しかし、それは足の一本だけで、身体も他の部位も見つからなかった。その長さは異様な大きさで、すぐに焼き払われてしまった。それがなんの種類なのか、本物だったのかも今となっては永久の謎である。老人は、走り去った子供の姿を探すように山の先を見つめた。お囃子が鳴っている。そろそろ夕日が沈む頃だろう。願わくば、今年の復活祭で未だに存続し続けている捧げ者に選ばれた少女が、無事に任務を成し遂げることを祈るばかりである。祭りに行くつもりはない。今夜は早く布団に入るつもりだ。縁側に置いていた腰を上げた時だった。老人の家の前を何かがスッと通ったように見えた。その物体は黒く、飛ぶように横切った。一瞬老人の方を見たその顔は、五十年前消えた老婆に見えた。
「ばば……か？」
いや、そんなはずはない。老人は心の中で繰り返した。今夜を過ぎれば、また村には平和が訪れるだろう。五十年前にこの祭りで起こった惨劇を思い出しながら、一人家の中へと戻っていった。

【了】

あとがき

長々と読んでくださり、ありがとうございました。
ミステリーって難しいですね（笑）
驚かせたいという気持ちだけではうまくいかないし、
かといって、平坦なだけだと物足りない（自分自身で）

他の作品も違った味をしていると思うので（希望）
よろしければご一読ください。
主にホラーやサスペンス、ファンタジがあります。
書きためたものがありますので、徐々に載せていこうと思います。
それでは、ありがとうございました。

なお、ご感想もお待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3461o/

蜘蛛と夢のあとさき

2010年10月16日19時08分発行